

寝屋川市所在

# 小路遺跡（その2）

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



調査地遠景（北西から）



3区（東・西）第5面 20・21流路全景（垂直方向から）

卷頭図版



3区(東・西)第5面 20流路出土 人面墨書土器

# 序 文

小路遺跡は、当センターが第二京阪道路（大阪北道路）の予定地内で平成13・14年度に本調査を実施しています。

本報告の対象地は、大阪府寝屋川市小路・高宮に位置し、枚方丘陵の縁辺部にあたります。この地周辺には丘陵上に立地する国指定史跡「高宮廃寺跡」や条里型地割が良好に残る「讃良郡条里遺跡」など、多くの遺跡が知られています。

本報告の特筆すべき成果には、古代の流路と下層確認トレンチで出土した縄文土器があげられます。

古代の流路は、北側で調査を実施しました讃良郡条里遺跡（その1）で灌漑施設である井堰遺構や絵馬などが出土した溝の上流部にあたります。流路内からは奈良時代後半から平安時代前半の遺物が多く出土しました。特に、人面墨書土器は24個体が出土し、目・鼻・口が明確に判別できるものです。また、縄文土器は、滋賀里式から北白川下層Ⅱ式が多く出土しました。この地周辺に縄文時代の遺構の存在が想定されるとともに、この地の歴史を考察していく上で、貴重な資料を提供することができたと考えます。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関ならびに地元関係各位に深く謝意を表します。

平成16年12月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好

## 例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地のうち、寝屋川市小路・高宮に所在する小路遺跡（その2）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所（現浪速国道事務所）の委託（平成14年3月1日～平成15年2月28日）を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財センター中部調査事務所調査第一係が実施した。
3. 現地での発掘調査は平成14（2002）年3月27日～平成15（2003）年2月28日にわたり実施し、引き続き整理事業を行った。発掘調査および整理事業の担当は、以下の通りである。  
調査部長玉井 功、中部調査事務所長藤田憲司、調査第一係長一瀬和夫、技師田中龍男（平成14年10月～）・服部美都里、専門調査員島田裕弘が行った。
4. 現地調査の実施および整理作業にあたっては、関係諸機関、地元関係各位をはじめ、多くの方々から御指導ならびに御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）  
泉 拓良（京都大学）、禰冨田佳男（文化庁）、堀江門也（大阪府教育委員会・当時）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、前田義明・木下保明・長戸満男（財団法人京都市埋蔵文化財研究所・現当センター）、小暮律子・浜田保子・村岡浩康・青山由美子・福井真美寿・山本友紀・波岸初美・前田千津子・中川寿美
5. 各調査区の全景および遺構の写真は調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影・焼付に関しては、中部調査事務所主査片山彰一、京阪調査事務所主査上野貞子、非常勤職員水取康人、米子千智が担当した。今回、片山は人面墨書土器を展開写真で撮影した。第V章にその撮影方法について記している。
6. 木製品等の樹種鑑定は、中部調査事務所主査山口誠治が担当した。
7. 今回の調査では、花粉・珪藻化石分析、放射性炭素年代測定の実施した。分析は株式会社パレオ・ラボが実施し、その結果は本書第IV章に掲載した。
8. 本書の執筆・編集は田中・島田が共同で担当した。
9. 本調査に関わる図面・遺物・写真などは、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡 例

1. 本書に掲載した地形図・遺構実測図やその他に付された方位は、全て座標北を示している。
2. 遺構の基準高は、東京湾標準水位（T.P.+）を使用し、単位はメートルで表した。
3. 図中の方位・座標値は世界測地系（測地成果2000）の平面直角座標第VI系による。
4. 本書で使用した土色の色調に関する記述は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖第22版』1999年版を使用した。
5. 本書の挿図中の遺物番号と写真図版の遺物番号は対応する。

# 目次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査に至る経過 .....	1
第Ⅱ章 位置と環境 .....	2
第Ⅲ章 調査成果 .....	5
第1節 調査方法 .....	5
第2節 基本層序 .....	6
第3節 遺構と遺物 .....	11
第1遺構面 .....	11
第2遺構面 .....	11
第3遺構面 .....	14
第4遺構面 .....	17
第5遺構面 .....	24
第6遺構面 .....	46
第7遺構面 .....	56
下層確認トレンチの調査 .....	56
遺物観察表(1)～(4) .....	63
第Ⅳ章 自然科学分析 .....	67
第1節 小路遺跡(その2)の花粉化石群集 .....	67
第2節 小路遺跡(その2)堆積物中の珪藻化石群集 .....	73
第3節 放射性炭素年代測定 .....	79
第Ⅴ章 展開写真について .....	81
小路遺跡(その2)出土の人面墨書土器の撮影方法について	
第Ⅵ章 まとめ .....	85

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	1
第2図	調査区位置図	2
第3図	調査地周辺遺跡分布図	3
第4図	調査区配置図	5
第5図	基本層序模式図	8
第6図	調査地北壁断面図	9・10
第7図	第1面平面図	12
第8図	第2面平面図	13
第9図	第3面平面図	15
第10図	第3層出土遺物	16
第11図	3溝出土遺物	17
第12図	第4面平面図	18
第13図	9土坑、8・10～13・16～18溝、14・15ピット平・断面図	19
第14図	8溝出土遺物	20
第15図	14ピット出土遺物	21
第16図	15ピット出土遺物	21
第17図	19井戸平・断・立面図	22
第18図	第4層出土遺物	23
第19図	第5層出土遺物	24
第20図	第5面平面図	25
第21図	20流路・21溝平・断面図	26
第22図	20流路・21溝出土遺物	28
第23図	20流路出土遺物	29
第24図	20流路出土遺物	30
第25図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔1〕	33
第26図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔2〕	34
第27図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔3〕	35
第28図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔4〕	36
第29図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔5〕	37
第30図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔6〕	38
第31図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔7〕	39・40
第32図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔8〕	41・42
第33図	20流路出土遺物 人面墨書土器〔9〕	43
第34図	第6面平面図	45
第35図	22流路・26落ち込み遺物出土状況図	47

第36図	22・23流路出土遺物〔1〕	48
第37図	22・23流路出土遺物〔2〕	49
第38図	26落ち込み出土遺物	50
第39図	27溝内木樋出土状況図	51
第40図	27溝出土遺物	52
第41図	28流路出土遺物	54
第42図	28・29流路出土石器	54
第43図	第7面平面図	55
第44図	下層確認トレンチ配置図	57
第45図	下層確認トレンチ他出土縄文土器（晩期～前期末）	58
第46図	下層確認トレンチ他出土縄文土器（前期末）	59
第47図	下層確認トレンチ他出土縄文土器（前期）	60
第48図	下層確認トレンチ他出土石器〔1〕	61
第49図	下層確認トレンチ他出土石器〔2〕	62
第50図	花粉化石分布図	72
第51図	堆積物中の主な珪藻化石分布図	78

## 写真目次

写真1	3区（東）第7面 全景（南から）	56
-----	------------------	----

## 表目次

第1表	分析試料対応表	67
第2表	花粉化石産出一覧表1	69
第3表	花粉化石産出一覧表2	70
第4表	花粉化石産出一覧表3	71
第5表	堆積物中の珪藻化石産出表1	75
第6表	堆積物中の珪藻化石産出表2	76
第7表	堆積物の特徴と堆積環境	77
第8表	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	79

# 図 版 目 次

## 図版1 第2・3面遺構

1. 3区(西)第2面 全景(北西から)
2. 4区(北)第2面 全景(東から)
3. 4区 第3・4面 全景(垂直写真)
4. 3区(東)第3面 全景(北東から)
5. 4区(北)第3面 全景(東から)

## 図版2 第4面遺構

1. 3区(東)第4面 全景(西から)
2. 4区(北)第4面 全景(東から)
3. 4区(北)第4面 検出状況(北西から)

## 図版3 第4面遺構

1. 4区(北)第4面 8溝断面(北から)
2. 4区(北)第4面 9土坑断面(北から)
3. 4区(北)第4面 13溝断面(西セクション)(東から)
4. 4区(北)第4面 10・11・12溝断面(北から)
5. 4区(北)第4面 14ピット断面(北から)
6. 4区(北)第4面 15ピット断面(東から)
7. 4区(北)第4面 17・18溝断面(北から)
8. 5区 第4面 19井戸(東から)

## 図版4 第5面遺構

1. 3区 第5面(垂直写真)
2. 3区(東)第5面 20流路 遺物94出土状況(北から)
3. 3区(西)第5面 20流路 遺物102出土状況(西から)
4. 3区(西)第5面 20流路 遺物102出土状況(北西から)
5. 4区(北)第5面 20流路 遺物98出土状況(北から)

## 図版5 第5面遺構

1. 3区(西)第5面 20流路 遺物55出土状況(北西から)
2. 4区(北)第5面 20流路 遺物63出土状況(南東から)
3. 4区(北)第5面 21溝 遺物69出土状況(北東から)
4. 3区(西)第5面 21溝断面(北西から)
5. 3区(西)第5面 20流路断面(北西から)

図版6 第5面遺構

1. 3区(東)第5面 20流路(東から)
2. 3区(西)第5面 20流路(南から)
3. 4区(北)第5面 検出状況(南東から)

図版7 第6面遺構

1. 3区(東)第6面 全景(南西から)
2. 4区(北)第6面 29流路(北西から)
3. 5区 第6面 27溝(南東から)
4. 5区拡張 第6面 27溝(北から)
5. 5区 第6面 27溝木樋出土状況(西から)

図版8 第6面遺構

1. 3区(東)第6面 22流路腰掛座板出土状況(南から)
2. 3区(東)第6面 22流路腰掛座板出土状況(北東から)
3. 3区(東)第6面 26落ち込み(東から)
4. 3区(東)第6面 26落ち込み遺物出土状況(南から)

図版9 出土遺物 8・28・39・44・45・46・55・63・65・69・70

図版10 出土遺物 74・83・84・85・90・95・96

図版11 出土遺物 94・98

図版12 出土遺物 97・99・100・101・102・104-1・104-2

図版13 出土遺物 103

図版14 出土遺物 106・132~135・137・139~142

図版15 出土遺物 143・144・146・148・149・159・160・174・178

図版16 出土遺物 198・211・212・218・219・220

図版17 出土遺物 189~197・199~204

図版18 出土遺物 205~210・213~217

図版19 出土遺物 221~228

図版20 出土遺物 75~81・180~188

図版21 出土遺物 154~156・237~243・229~236

図版22 出土遺物 66・67・153・161・244

図版23 出土遺物 94・96・98人面墨書土器展開写真

図版24 出土遺物 102・103・106人面墨書土器展開写真

図版25 花粉分析(1)

図版26 花粉分析(2)

図版27 珪藻分析

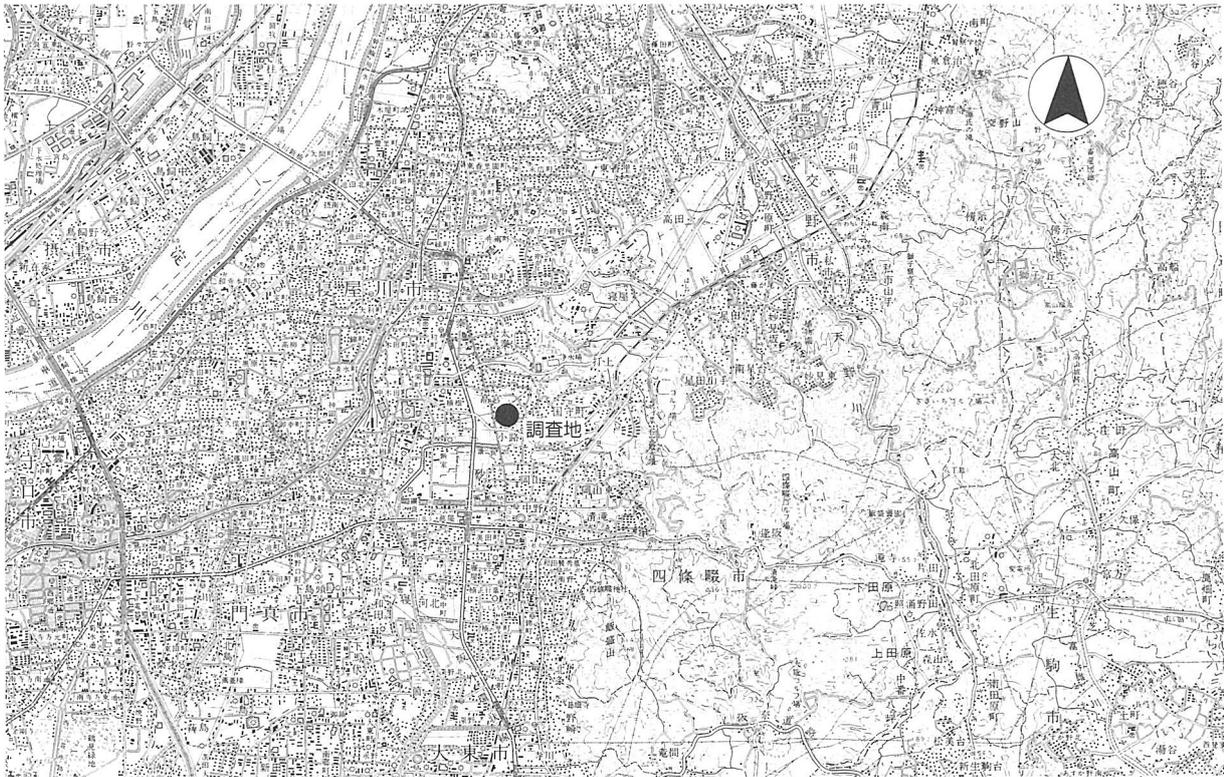
# 第 I 章 調査に至る経過

今回の調査は、第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴うものである。この道路は昭和40年代に大阪と京都間を結ぶ幹線道路として計画されたものである。

この道路建設予定地周辺では、平成12（2000）年度に寝屋川市域として讃良郡条里遺跡、小路遺跡、高宮・大尾遺跡、打上遺跡、太秦遺跡、太秦古墳群の確認調査が当センターによって実施された。その結果、遺跡の範囲拡大などの多種多様な新知見が得られた。このことから道路予定地内の遺跡の取扱いについて、大阪府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所、日本道路公団関西支社等の関係機関で協議が続けられてきた。この結果、平成13（2001）年度に高宮遺跡の発掘調査が開始された。翌年の平成14（2002）年度には高宮遺跡その2・3、小路遺跡その2・3、讃良郡条里遺跡その1～3の調査が実施された。本書は、大阪府教育委員会の指導のもとに当センターが実施した小路遺跡その2の発掘調査報告書である。

今回の調査区周辺は、縄文時代から古代・中世にかけての遺物が出土し、溝状の遺構や自然河川なども確認調査によって検出されている。発掘調査は、盛土と旧耕作土を機械掘削によって除去し、以下を人力で掘削した。しかし、調査区内に多くの里道や水路、埋設管が複雑に入り組んでいたために調査区を8地区に分割して実施することとなった。人力掘削は1層ごとに掘り分け、各層の下面で遺構の検出を行った。また、各地区で下層確認のためにトレンチを設定した。下層確認トレンチからは縄文時代前期の土器や旧石器時代のものと思われる石器が出土した。

検出された遺構は写真撮影、図化実測を随時実施し、主要遺構面の全体図化は航空撮影による写真測量図化を行った。



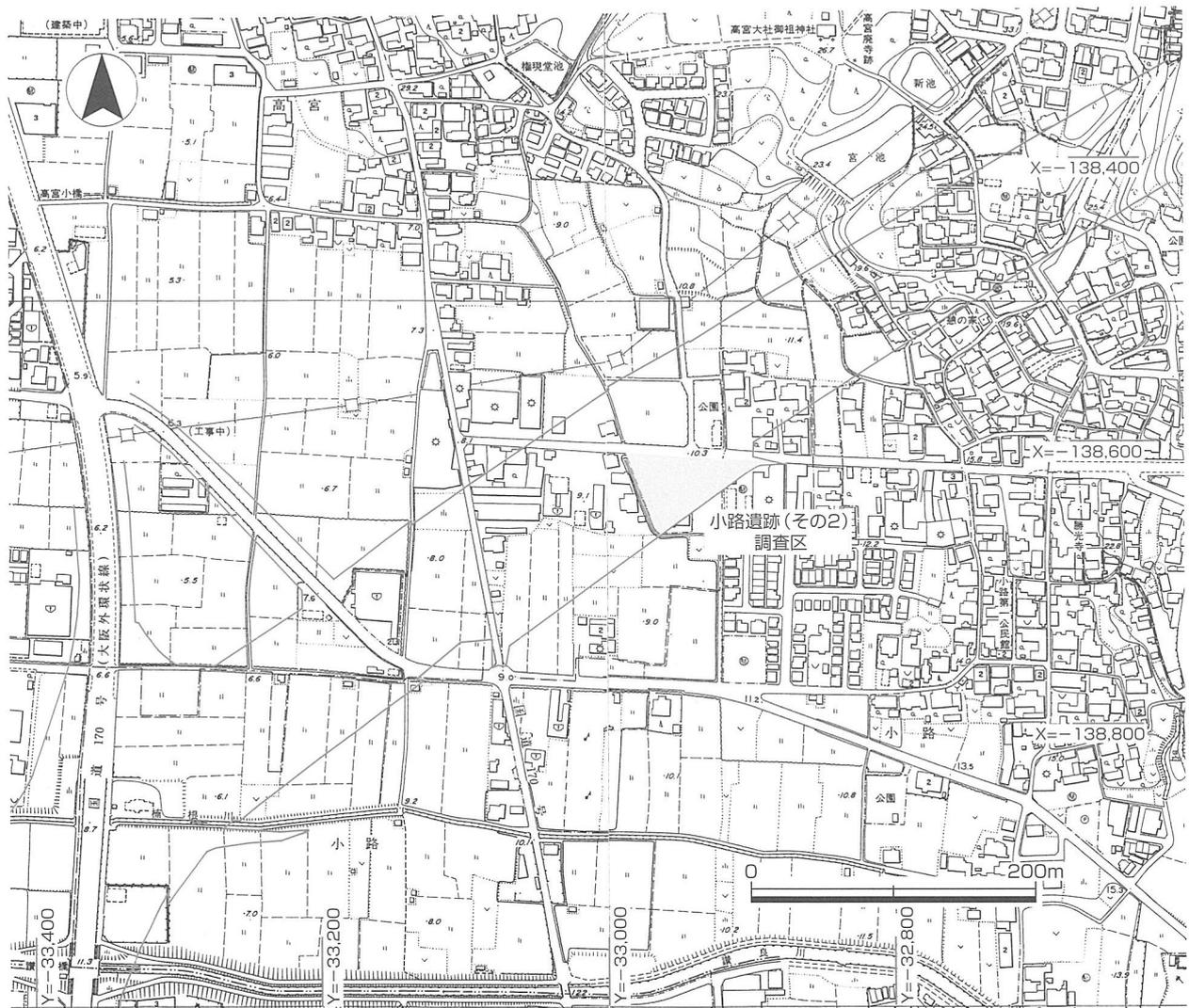
第1図 調査地位置図（1：100,000）

## 第Ⅱ章 位置と環境

小路遺跡（その2）の調査地は、大阪府寝屋川市小路に所在している。調査地は、大阪層群や段丘堆積物から構成される枚方丘陵の南西側に位置し、扇状地性微高地上に立地している。また、南側には枚方丘陵の開析谷を集水域としている讃良川がある。この地周辺は、縄文時代前期に海岸線が枚方丘陵縁辺付近まで入り込んで旧河内湾を形成していた。

次に調査地周辺の遺跡を概観しておきたい。周辺には旧石器時代から古代に至る各時代の遺跡が分布している。出土量は少ないが、旧石器時代では讃良川遺跡や高宮遺跡でナイフ形石器が、讃良川河床遺跡ではスクレイパーなどが出土している。縄文時代では、前期の北白川下層式や大歳山式の土器片が出土した高宮遺跡があげられる。今回、小路遺跡で出土した土器も同年代のものであることから、近隣に生活痕の存在が考えられる。また、晩期では長保寺遺跡と高宮八丁遺跡があげられる。長保寺遺跡では、平安時代の井戸壁から滋賀里Ⅲ・Ⅳ式土器が、高宮八丁遺跡では滋賀里Ⅳ・船橋・長原式土器が弥生時代初期の土器と同じ層内より出土している。

弥生時代では前期に高宮八丁遺跡が、中期には集落を確認した太秦遺跡や方形周溝墓が検出された大



第2図 調査区位置図



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	小路遺跡	18	法復寺遺跡	35	打上遺跡	52	更良岡山古墳群
2	楠遺跡	19	神宮寺跡	36	打上神社古墳群	53	忍丘古墳
3	茨田郡条里遺跡	20	秦刀鍛冶屋遺跡	37	石宝殿古墳	54	国守遺跡
4	三井南遺跡	21	太秦元町遺跡	38	長谷古墳	55	坪井遺跡
5	秦山遺跡	22	太秦廃寺跡	39	砂遺跡	56	忍ヶ丘駅前遺跡
6	池の瀬遺跡	23	鹿埴輪出土地	40	蔀屋北遺跡	57	南山下遺跡
7	寝屋遺跡	24	太秦遺跡(太秦古墳群)	41	蔀屋遺跡	58	奈良井遺跡
8	寝屋東遺跡	25	太秦高塚古墳	42	鎌田遺跡	59	岡山南遺跡
9	伝寝屋長者屋敷跡遺跡	26	太秦1号墳	43	北口遺跡	60	清滝古墳群
10	星田駅北遺跡	27	寝屋古墳	44	奈良田遺跡	61	正法寺跡
11	廻し塚古墳	28	布懸遺跡	45	中野遺跡	62	四条曙小学校内遺跡
12	太秦北遺跡	29	打上中道遺跡	46	墓ノ堂古墳	63	木間池北方遺跡
13	寝屋南遺跡	30	高宮遺跡	47	讃良川遺跡	64	大上遺跡
14	北木田遺跡	31	高宮廃寺跡	48	三味頭遺跡	65	国中神社内遺跡
15	高宮八丁遺跡	32	大尾遺跡	49	讃良寺跡	66	城遺跡
16	長保寺遺跡	33	上垣内遺跡	50	讃良川床遺跡	67	千畳敷遺跡
17	讃良郡条里遺跡	34	打上古墳	51	更良岡山遺跡		

第3図 調査地周辺遺跡分布図 (1:25,000)

尾遺跡がある。後期になると遺跡の数が多くなり、池の瀬遺跡・寝屋遺跡・小路遺跡などがある。前期から中期の遺物を含む溝や土坑・貯蔵穴が、高宮八丁遺跡から検出されている。遺物は、前期第Ⅰ様式古段階から中期第Ⅲ様式までの土器や、木製品・石器がある。特に農耕具が多く出土している。また、丘陵上に位置する太秦遺跡では中期第Ⅱ様式の土器や石器が出土している。当センターが平成13年度に調査を実施した大尾遺跡からは、中期の方形周溝墓が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、長保寺遺跡・讚良川遺跡・高宮八丁遺跡・高宮遺跡・楠遺跡などがある。また、周辺の古墳には忍ヶ丘古墳・太秦古墳群・打上神社古墳群・更良岡山古墳群・石宝殿古墳などがあげられる。古墳時代前期の遺跡は少ないが、長保寺遺跡と墓跡として忍ヶ丘古墳が知られており、長保寺遺跡では、自然河川から庄内式土器や前期の須恵器などと共に韓式系須恵器が出土している。また、讚良川遺跡と高宮八丁遺跡からは古墳時代前期の土器である布留式土器が出土している。前期に属する古墳としては、忍ヶ丘古墳がある。この古墳は、全長約80mの前方後円墳で碧玉製品や鉄製の武器類が出土している。なお、同年度に当調査区の北東で調査を実施した小路遺跡（その3）からは、庄内式期に属する前方後方形周溝墓と方形周溝墓を4基検出している。古墳時代中期から後期の集落跡が検出されている長保寺遺跡では、掘立柱建物跡や溝・土坑・井戸などがある。出土遺物は土器類や石製品・金属製品・木製品等が多く出土している。この遺跡では、建築部材の扉材や準構造船の船材を井戸枠に転用し使用していたことが発見された。古墳時代後期では高宮八丁遺跡で溝・土坑・自然河川から土器や木製品が出土している。古墳は、中期以降に太秦古墳群が丘陵上に作られ、後期には打上神社古墳群や更良岡山古墳群、終末期古墳の石宝殿古墳などがある。当センターが実施した太秦古墳群の調査では、前方後円墳1基、円墳1基、方墳11基が検出されている。

古代の遺跡としては、高宮遺跡・大尾遺跡などがある。高宮遺跡からは、飛鳥から白鳳時代の竪穴住居や一辺が約1mの柱穴をもつ大型の掘立柱建物跡が検出されている。大尾遺跡からは、飛鳥から奈良時代の掘立柱建物跡や土坑墓が検出されている。寺院には、薬師寺式伽藍配置と呼ばれる建物配置が発掘調査によって確認された高宮廃寺がある。この高宮廃寺は、出土瓦から白鳳時代に創建され奈良時代まで続いたと考えられている。しかし、奈良時代末から平安時代初頭に火災によって一旦廃絶し、その後鎌倉時代に大社御祖神社の神宮寺として再興された寺院跡である。

#### 《参考文献》

- 一瀬和夫・田中龍男・清水 哲他編 2002年8月『讚良郡条里遺跡・小路遺跡・打上遺跡・茄子作遺跡・藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群・長尾東地区』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第77集
- 伊藤 武編 2003年2月『大尾遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第92集
- 一瀬和夫・田中龍男・清水 哲他編 2003年2月『門真西地区、讚良郡条里遺跡西地区、讚良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第93集
- 井上智博編 2003年6月『讚良郡条里遺跡（その2）』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第98集
- 一瀬和夫・松尾洋次郎他編 2003年6月『太秦古墳群』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第99集
- 黒須亜希子編 2003年9月『讚良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第101集
- 長戸満男編 2004年2月『讚良郡条里遺跡（その1）』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第109集
- 木下保明編 2004年3月『小路遺跡（その3）』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第113集
- 前田義明編 2004年3月『讚良郡条里遺跡（その3）』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第114集

# 第Ⅲ章 調査成果

## 第1節 調査方法

小路遺跡（その2）の調査地は里道や水路、埋設管等の現在も使用されている施設によって調査可能範囲が大きく規制を受け、掘削により発生する排土も場内にて処理しなければならなかった。したがって、細かく地区設定を行う必要があった。また、調査地の中央を南北に走る資材置場進入路は調査対象地区であるが、現在も頻繁に使用されているために調査時には脇に仮進入路を設ける必要があり、最終的に元の進入路へ復旧を行わねばならなかった。結果、調査区を大きく1区～5区、最終的には8地区に分割し調査を行うことになった（第4図）。

第1次調査は1区・2-1区・5区、第2次調査は2-2区・3区、第3次調査は4区と、計3回の反転計画にて調査を実施し、各次主要遺構面において空中写真測量を実施した。機械掘削で表土から盛土及び舗装、建物基礎まで除去し、以下は人力掘削により調査を実施した。遺構面は各層下面で検出を行った。これは、地層が基本的に土壌層の連続であるためである。

以上のように複雑な地区割りとなっているが、各地区を分断されている単位（東側から）で4項にまとめ、以下に概要を述べる。

### \* 2区

調査地の東端にあたり、西側の里道を挟んで3区と分断される地区である。第1層に始まり以下各層



第4図 調査区配置図

準がほぼ残存していることが北壁断面の観察によって確認できた。しかし、調査区内は、建物基礎による攪乱が第3層半ばまでみられ、深い所では第7層にまで達していた。そのため、遺構面として検出できたのは第3面からであった。

#### \* 1区・3区（東）

調査地の東を里道、西を埋設管に分断される地区である。各層準の残存もよく、祭祀場として使われていたであろう古代の流路の検出や下層確認トレンチにおける縄文時代前期の遺物の出土など、本調査において最も成果のあった地区である。

#### \* 3区（西）・4区（北）

調査地の東を埋設管に、南を埋設管と水路とに分断される地区である。前述の1区・3区（東）に続いて各層準の残存もよく、古代の流路の続き（左岸）も検出されている。

東部においては、耕作区画の段差を形成するために第3層が削られている部分を確認した。この部分は辛うじて第4層を残すのみで、続いて第7層となっている。耕作地拡大や区画整備のため大規模な削平が行われた様子が窺える。

#### \* 4区（南）・5区

調査地の北を埋設管と水路とに分断される地区である。この地区内は、層準の残存が最も希薄であった。第1層は全体的に確認できるものの、続くべき第2層・第3層は部分的に薄くしか確認できず、直下に第7層がみられる。これは後世の削平による結果と考えられ、大半の遺構が同一面で検出された。

## 第2節 基本層序

当調査地は、北東から南西にかけて緩やかに下っていく斜面上に位置している。断面観察からその斜面で切り土や盛土を行い、平坦面を造成し耕作を行ってきた様子を確認した。この造成は繰り返し行われたものと考えられ、時代が下るにつれ大規模なものとなる。結果、中世以降の造成活動に伴う削平のため失われてしまった層準・遺構面が存在し、4区（北）西部においてはそれが顕著に表れている。第1層による削平が第2層、第3層まで及んでおり、大きな段差を作っている。対して、各層序の残存が最も良好だったのは3区であった。この地区断面を基に下層確認トレンチ断面を合わせ、基本層序模式図とした（第5図）。また、本調査区において最も長い軸であり代表的な遺構も網羅できることから、北壁断面図を掲載した（第6図）。

地層は上位から順に第1層～第7層までの7層に大きく分類した。基本的に土壌層が連続しており、遺物が出土したのは主に第1層～第5層までである。この遺物包含層からの遺物の出土量は非常に少ない。数少ない遺物の中でも時期幅は広く、特に瓦器や土師器等の軟質な土器は、激しく摩滅したものが多。これは調査区全域において、長期間にわたり耕作地としての土地利用であった結果と考えられる。

第7層以下は、主に下層確認トレンチにて調査を実施した。第7層堆積以前に埋没した流路から縄文時代前期に遡る土器が出土している。また、流路以外からも少量ながら縄文土器やサヌカイトが出土している。以下に各層の概要を述べる。

#### \*第1層

第1層は灰色の粗砂混じりシルト層で、現代耕作土である。上方は盛土や建物基礎により乱されている部分が大半である。2区と3区（東）、3区（東）と3区（西）の工区境、4区（北）西側において大きな段差が確認でき、この部分は現在も里道や暗渠などが存在している。

#### \*第2層

第2層は黄褐色シルト混じり細砂層で、近代～現代耕作土である。やや砂質が強く、上部に鉄分の沈着がみられる。第1層とほぼ同じ位置に段差がみられ、擬似畦畔も検出している。

#### \*第3層

第3層は黄褐色粘土混じり細砂層で、近世耕作土である。全体的に鉄分及びマンガン斑の沈着が顕著である。3区（西）から4区（北）にかけて層が厚くなり、マンガン斑は2枚ないし3枚の層状の単位が確認できる。第3層が厚く堆積した可能性としては、洪水砂などの自然起因の堆積によるかさ上げではなく、耕作地改変時の度重なる造成や整地の結果によるものと考えられ、西側の低地部が高くなったものと思われる。調査区東側にあたる2区と3区（東）の工区境では里道を挟み段差がみられる。また、花粉化石分析において、第3層からはキガシグサ・サンショウモ等の水田雑草とソバ属の花粉が検出されており、第3層は水田とソバ栽培が行われていた耕作土であった可能性が示唆されている。

#### \*第4層

第4層は黄褐色シルト混じり粗砂層で、中世耕作土である。径2～4mm程の礫を含み、全体的に鉄分の沈着がみられる。第4層は、3区（東）の中央から西側でしか確認できなかったが、これは東側の高地部では第3層に取り込まれてしまう為である。西側は徐々に低くなるが、明確な段差はみられない。

#### \*第5層

第5層は灰色シルト混じり粗砂である。2～4mm程の礫を多く含む。第5面からは耕作関連遺構は検出されなかったため、耕作土であるかどうかは不明である。第5層の分布範囲は3区と4区（北）の一部だけに限られている。

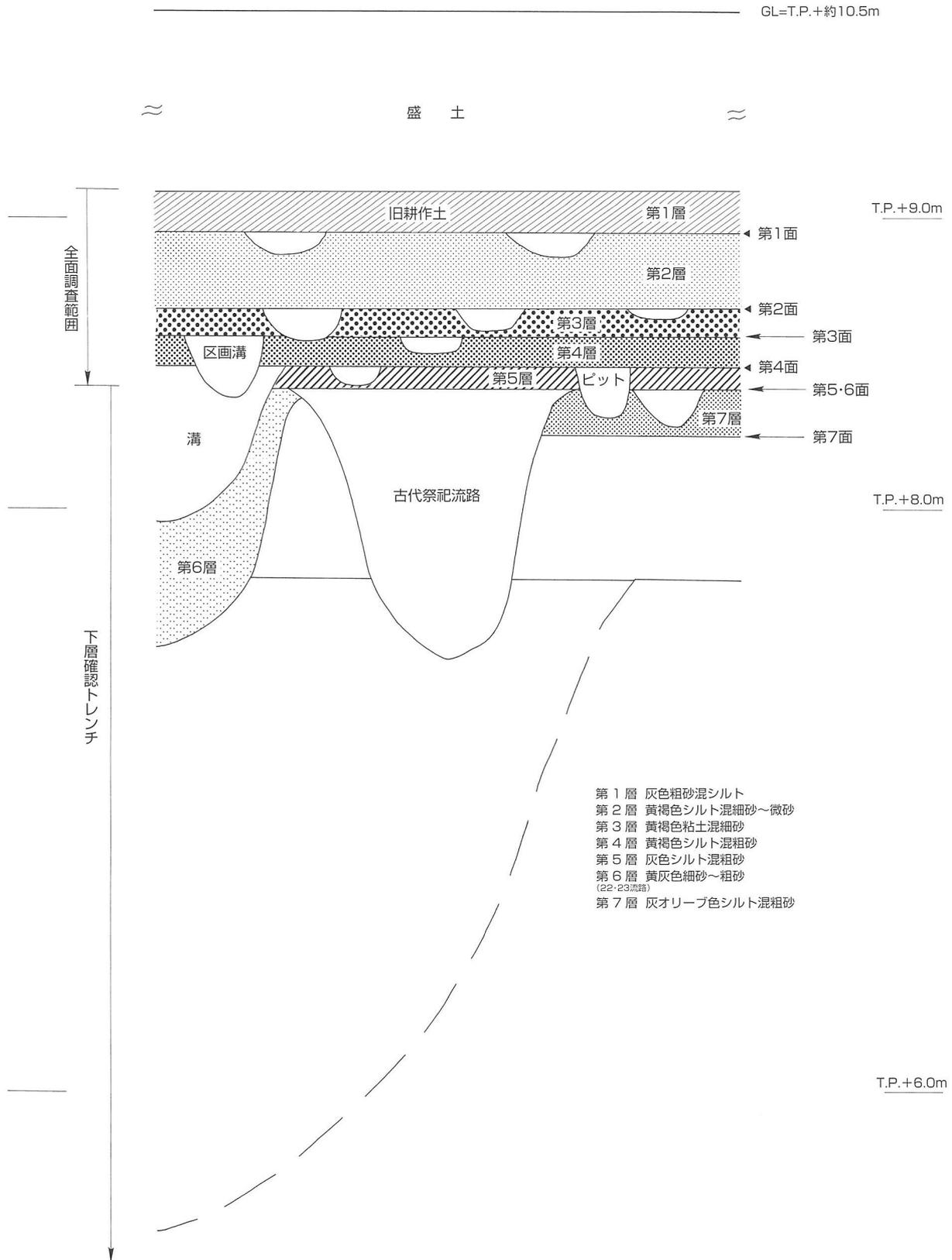
#### \*第6層

第6層は後の削平により大きく削られてしまっており、土壌を構成する層としては残存していない。しかし、遺構の切り合いや出土遺物から第5遺構面より古段階の遺構として区別できた。これらの遺構を第6面遺構とし、埋土を都合上第6層とした。黄灰色細砂～粗砂層であり、自然流路の堆積層である。

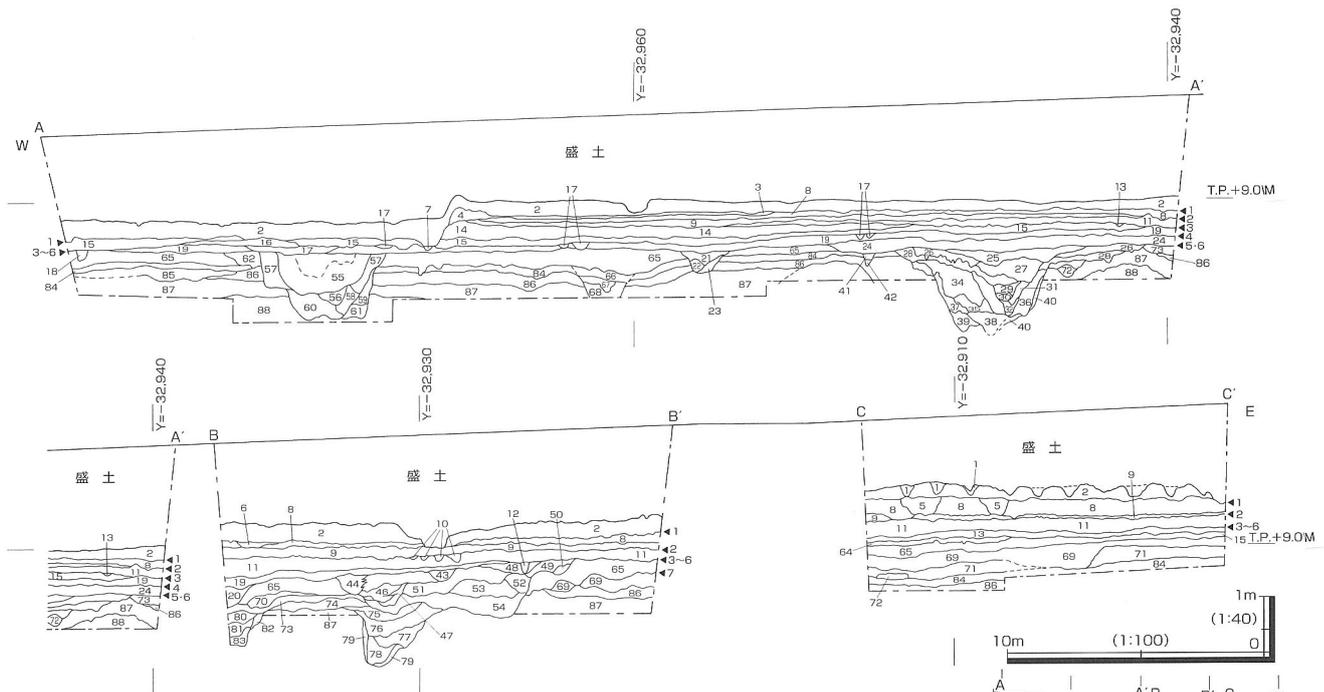
#### \*第7層

第7層は灰オリーブ色シルト混じり粗砂層で、洪水堆積層を母材とする弱い土壌層である。土壌化の進行具合により土色が異なる箇所があるが、径2mm程の礫を多く含む、調査地全域を通して土質はほぼ同じである。4区（南）で粗砂に挟まれた薄い粗砂混じり粘土層を確認したことから、第7層は複数回の洪水による堆積によって形成されたものと思われる。第7層直下は黄灰色シルト～粘土層であり、調

査区全体を通して確認できる。この層は上方では土壌化が進み、鉄分の沈着が顕著である。この粘土層以下は大きな流路が切り合っている。基盤となる層は緑灰色シルト～微砂であり、この基盤層に粗砂や細砂が所々層を成している。また、流路内より多数の植物遺体が検出された。



第5図 基本層序模式図



1	5Y6/2	灰オリーブ色微砂〜シルト	まだらに混ざる	ブロック土含む	20満	38	5Y3/1	オリーブ黒色シルト混粗砂	まだらに混ざる	径10mmまでの礫多く含む	
	2.5Y6/4	にがい黄色微砂〜微砂					5Y5/2	灰オリーブ色細砂			
	5Y7/2	灰白色細砂〜粗砂					5Y6/1	灰色微砂〜粗砂			
第1層	2	5Y4/1	灰色細砂〜シルト		20満	39	5Y5/1	灰色微砂	互層		
第1層	3	2.5Y6/1	黄灰色シルト混粗砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む		5Y2/1	黒色粘土			
	4	2.5Y6/1	黄灰色シルト混粗砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む		10GY5/1	緑灰色粘土			
	5	5Y6/2	灰オリーブ色シルト混粗砂	明黄褐色細砂が混じる		20満	40	5Y2/1	黒色シルト〜粘土	まだらに混ざる	
	6	5Y5/1	灰オリーブ色粗砂混粗砂	暗黄灰色微砂ブロック含む			7.5Y4/2	灰色シルト混粗砂			
	7	2.5Y5/2	暗灰黄色微砂〜粗砂				10GY5/1	緑灰色シルト			
	2.5Y5/3	黄褐色粗砂			21満	41	2.5Y6/2	灰黄色微砂			
第2層	8	2.5Y5/3	黄褐色シルト混粗砂〜微砂	Fe含む	21満	42	5Y4/2	灰オリーブ色シルト〜粘土			
第2層	9	2.5Y5/4	黄褐色シルト混粗砂〜微砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む	22-23流路	43	7.5Y5/2	灰オリーブ色微砂	Fe含む	
	10	7.5GY5/1	緑灰色シルト混粗砂	径2mm程の礫僅かに含む	Fe含む		2.5Y6/2	灰黄色微砂〜微砂			
	11	2.5Y5/3	黄褐色粘土混粗砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む	22-23流路	44	2.5Y6/2	灰黄色微砂〜粗砂	径2-5mm程の礫多く含む	
1溝	12	7.5Y5/2	灰オリーブ色シルト	黄褐色微砂が混じる		22-23流路	45	5Y5/1	灰色微砂〜微砂	径2mm程の礫少し含む	
4溝	13	10G4/1	暗緑灰色粘土混粗砂	径2mm程の礫少し含む		22-23流路	46	2.5Y5/3	黄褐色微砂〜粗砂	径2-5mm程の礫多く含む	
第3層	14	2.5Y4/3	黄褐色粘土混粗砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む Mn含む	22-23流路	47	5Y5/1	灰色微砂〜微砂	互層	
第3層	15	2.5Y5/3	黄褐色粘土混粗砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む Mn含む	22-23流路	48	2.5Y5/3	黄褐色微砂〜粗砂		
第3層	16	2.5Y5/3	黄褐色シルト混粗砂〜微砂	Fe含む		22-23流路	49	10Y4/1	暗灰色微砂〜粗砂	灰オリーブ色微砂が混じる	
5-6溝	17	5B5/1	青灰色粘土混粗砂	粗砂含む		22-23流路	48	2.5Y3/2	黒褐色シルト混粗砂	まだらに混ざる 径2mm程の礫少し含む	
	7.5Y6/2	灰色微砂					7.5Y4/1	灰色微砂			
	18	2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト混粗砂	粗砂含む	Fe含む	22-23流路	50	10Y5/2	暗黄褐色粗砂	礫径2-15mm	
第4層	19	2.5Y5/3	黄褐色シルト混粗砂			22-23流路	51	2.5Y4/1	黄褐色微砂	径2-5mm程の礫、粗砂少し含む	
	20	2.5Y4/2	暗灰黄色微砂混粗砂	径2mm程の礫少し含む		22-23流路	52	2.5Y4/1	暗灰黄色粗砂混粗砂		
	10YR3/1	黒色シルト					10G4/1	暗緑灰色シルト〜微砂			
8溝	21	5Y3/2	オリーブ褐色シルト混粗砂	粗砂含む	オリーブ黒色シルトブロック含む	22-23流路	53	2.5Y6/2	灰黄色微砂〜粗砂	互層 礫径2-5mm	
8溝	22	2.5Y5/1	黄褐色微砂				2.5Y6/2	灰黄色微砂〜粗砂			
	2.5Y5/2	暗灰黄色微砂〜粗砂	径2-4mm程の礫少し含む				5Y3/1	オリーブ黒色微砂〜シルト			
8溝	23	2.5Y6/2	灰黄色粗砂			22-23流路	54	2.5Y6/2	灰黄色微砂〜粗砂	互層 礫径2-10mm	
	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト混粗砂〜粗砂					2.5Y6/1	灰黄色微砂			
第5層	24	10Y4/1	灰色シルト混粗砂	径2-4mm程の礫多く含む		29流路	55	2.5Y5/4	黄褐色微砂	上方は黒褐色となる、土壌化の影響が	
20溝	25	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土混粗砂	径2mm程の礫少し含む	Fe含む	29流路	56	2.5Y6/2	灰黄色微砂〜粗砂	径2-5mm程の礫多く含む	
20溝	26	5Y5/2	灰オリーブ色微砂〜粗砂	オリーブ黒色シルトブロック含む		29流路	57	2.5Y7/1	灰白色微砂〜微砂	互層	
20溝	27	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土混粗砂	径2mm程の礫含む	Fe含む		5Y5/1	灰色微砂〜粗砂			
	5Y3/1	オリーブ黒色シルト					5Y5/1	灰色シルト〜微砂			
20溝	28	5Y3/1	オリーブ黒色シルト混粗砂	径2mm程の礫含む		29流路	57	7.5Y4/2	灰オリーブ色微砂〜粗砂	上方は黒褐色となる、土壌化の影響が	
20溝	29	2.5Y4/1	黄褐色微砂			29流路	58	5Y5/2	灰オリーブ色微砂〜粗砂	径2mm程の礫少し含む	
	5Y6/1	灰色微砂					29流路	59	10GY5/1	緑灰色微砂〜微砂	
20溝	30	5Y3/1	オリーブ黒色粗砂混粘土	黒色シルトブロック含む		29流路	59	5Y5/2	灰オリーブ色シルト混粗砂	上方土壌化 径2mm程の礫多く含む	
20溝	31	5Y4/1	灰色微砂混粘土	径2mm程の礫少し含む	層下部に灰黄色粘土帯	29流路	60	10Y4/1	暗灰色微砂〜微砂	径2-5mm程の礫多く含む	
20溝	32	2.5Y6/2	暗灰黄色微砂			29流路	60	5Y6/2	灰オリーブ色微砂〜粗砂	互層 径2-5mm程の礫多く含む	
20溝	33	5Y6/2	灰オリーブ色微砂〜粗砂	互層			10GY5/1	緑灰色微砂〜微砂			
	5Y4/1	灰色微砂〜粗砂					7.5Y5/1	灰色微砂			
20溝	34	7.5Y3/1	オリーブ褐色粘土	まだらに混ざる	植物遺体含む	29流路	61	5Y7/1	灰白色微砂〜粗砂	互層 礫径2-10mm	
	5Y4/1	灰色微砂					5Y6/2	灰オリーブ色微砂混粗砂			
	7.5Y5/1	灰色微砂					29流路	62	7.5Y4/2	灰オリーブ色微砂〜微砂	上方は黒褐色となる、土壌化の影響が
20溝	35	7.5Y4/1	灰色微砂〜シルト	互層	植物遺体含む	第7層	63	10YR4/1	暗灰黄色粗砂		
	5Y4/1	灰色微砂〜粗砂					10YR4/3	にがい黄褐色シルト			
20溝	36	5Y3/1	オリーブ黒色微砂	互層		第7層	64	2.5Y4/1	灰色微砂〜粗砂	互層 径2-5mm程の礫多く含む	
	7.5Y6/1	灰色微砂				第7層	65	5Y4/2	灰オリーブ色シルト混粗砂	互層 径2-5mm程の礫多く含む	
20溝	37	5Y3/1	オリーブ黒色シルト〜粘土	緑灰色シルトブロック含む			66	2.5Y4/1	黄褐色シルト〜粘土		
	5Y4/2	灰オリーブ色微砂〜微砂					67	2.5Y5/1	黄褐色シルト	上部の黄褐色シルトがクラック状に入る	
							68	5Y7/1	灰色シルト	黄褐色シルトブロック含む	
							69	10YR4/1	暗灰色シルト〜粗砂	Fe含む	
							70	7.5Y4/1	暗灰黄色微砂〜粗砂	Fe含む	
								5Y3/2	オリーブ黒色微砂		

## 第3節 遺構と遺物

今回の調査区は、里道や水路が近接する場所のため掘削単位を多く設定することとなった。各調査区での遺構検出は各層準ごとに掘削し、隣の地区と整合性を持つようにした。当該地に遺存する遺構は調査区全体で計7面を検出した。本節では時期の新しい上の遺構面から順を追って説明する。

### 第1遺構面（第7図）

第1層を除去して検出した第1面は現代の耕作面である。主な検出遺構は溝、井戸である。尚、1区、5区では第1面の調査は行っていない。

溝は、第1層が埋土となる鋤溝が大半であるが、砂が埋土の溝も検出している。4区（北）の南部から3区（東）にかけて検出された東西方向の溝は砂が埋土である。他の溝に比べて深く掘られており、鋤溝を切っていた。このことから用水目的の水路であると考えられる。4区（北）と4区（南）の工区境には調査時にも暗渠が設けられており機能していたことから、水路の位置が踏襲されているものと思われる。4区（北）東部において検出された南北方向の段差は、西側は約0.4m低くなる。北壁断面において盛土直下で第1層が盛り上がっていることが確認でき、畦畔であったことがわかる。西側の下段部には第2層、第3層は存在しないため、この段差は第1面時に行われた削平による結果作られたものと考えられる。また、西側の段差際で砂埋土の溝を検出した。これも用水目的の水路であると考えられる。

5区北西部において西壁断面にかかる形で井戸を検出した。埋土内からは現代遺物である棧瓦、陶磁器、板材、杭が多く出土している。これらの遺物は井戸の埋め戻しの際に投棄されたものと思われる。第1遺構面で検出した鋤溝、水路はやや西に振るもののほぼ正方位に乗っており、条里地割であることがわかる。

### 第2遺構面（第8図）

第2面は第1面と同様に耕作面である。近代から現代にかけて存続していたものと思われる。主な検出遺構は溝である。尚、1区、5区では第2遺構面の調査は行っていない。

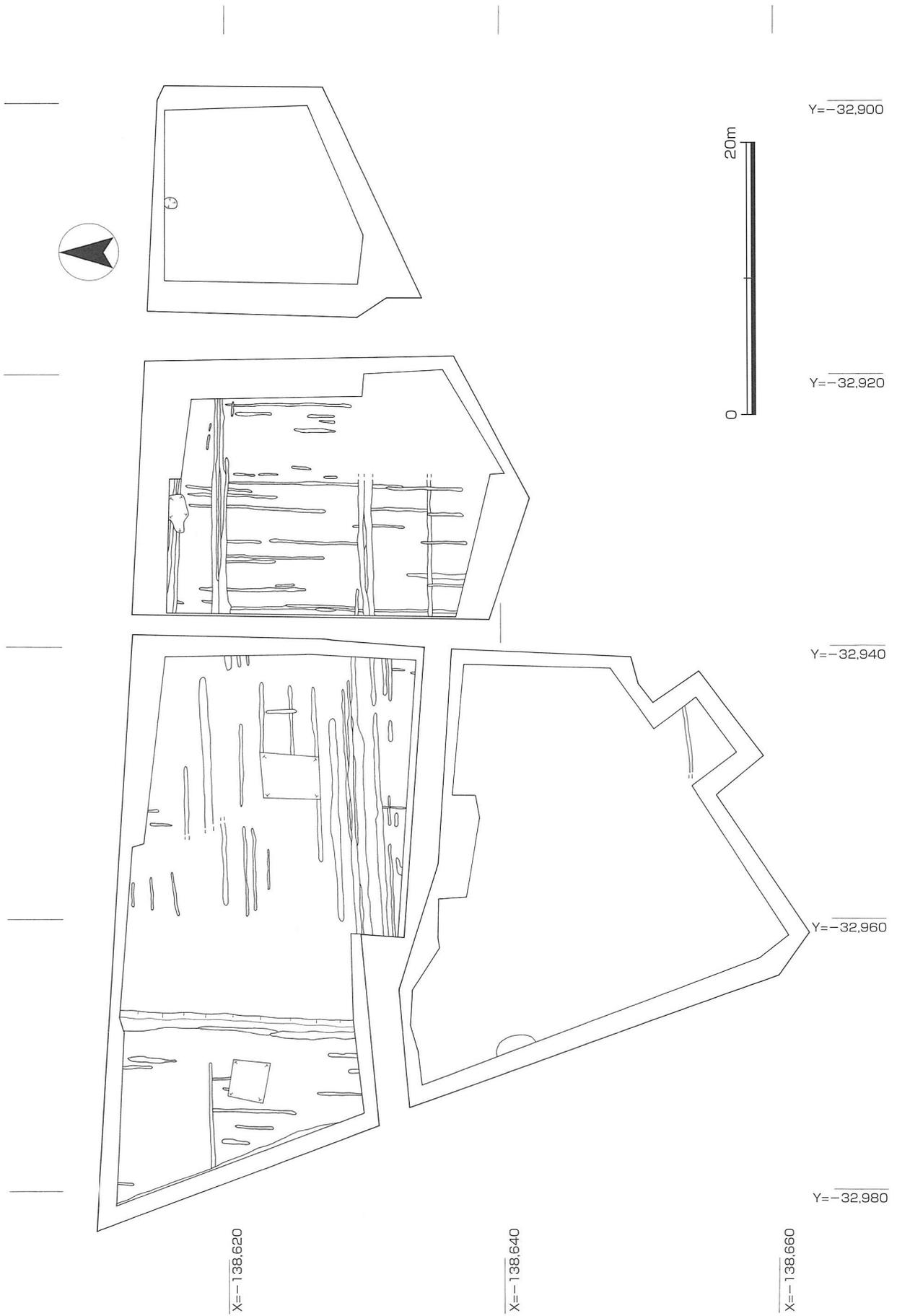
正方位に乗る鋤溝及び溝が多数検出され、場所により鋤溝の方向や密度に規則性がみられた。鋤溝は全体的に輪郭がはっきりせず、検出が困難であったが、耕作単位を表しているものと考えられる。

3区（東）中央部を南北に貫く溝は、鋤溝に比べて幅が広く、深い。さらに同じ溝の通りで切り合いが多くみられ、繰り返し同じ場所を掘り直していたようである。

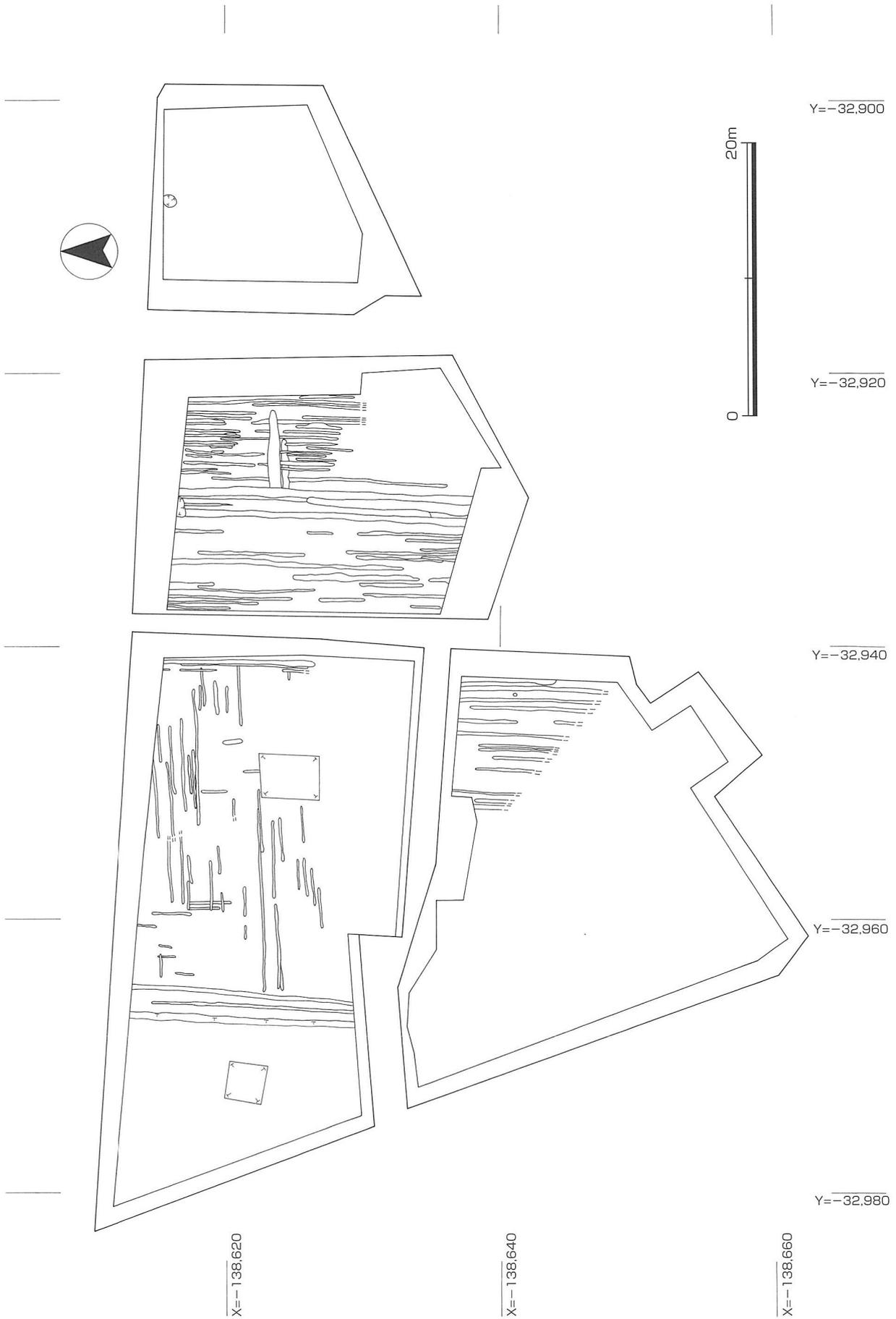
3区（西）東端部において南北方向の畦畔状の高まりを検出したが、これは第2層を除去した状態で検出した高まりであるため、第3層が芯になっている擬似畦畔である。高まりを検出できたのは北端から南に5m程のみである。

4区（北）東部において検出された第1面の段差と同位置に、南北方向の畦畔が存在していたものと考えられる。平面では検出できなかったが、北壁断面で第2層が直下の第3層に擦りついていることが確認できるためである。

第2面において、区画的要素を持つと思われる溝、畦畔はほとんどが南北方向であった。調査地周辺は東から西にかけての下りの傾斜が強いことを考えると、南北方向を主軸とする区画を設けていたことは自然であるといえる。



第7図 第1面平面図



第8図 第2面平面图

### 第3遺構面（第9図）

第1遺構面、第2遺構面に続き耕作面であり、中世後半～近世にかけて存続していたものと思われる。主な検出遺構は溝の他にピット、土坑である。

2区で検出した遺構は残存が非常に悪く検出も困難であった。検出した遺構も全体的に浅く、染みのように残っている程度であり、遺構の配置にも規則性はみられない。しかし、2区の第3層は他工区の第3層と同じ土質で、マンガンの沈着も見られるなど同じ特徴を持つことから同類の耕作土であると判断した。また、2区と3区（東）の工区境に通る南北方向の里道を挟んで2区側が約0.4m高くなるため、第3面時にも里道が条里の区画を規制していたことは間違いのないものと思われる。

2区以外の調査区では全域に亘り、正方位に乗る形で溝を検出したが、前2面と異なり鋤溝は非常に少ない。実際の遺構検出時には小さな単位が無数に確認できたが、溝状には検出できなかった。これは長期間同じ面で耕作が行われていたため、鋤溝の単位が検出できなくなったためと考えられる。このため、無理に鋤溝の検出は行わなかった。これに反して、調査区を南北方向に貫き長く検出した溝は土の違いがはっきりとしており明確な状態で検出することができた。

4区（北）西端で検出された鋤溝には、調査区の西を北流する現代水路と同じ軸を持つものがある。埋土の特徴から第3面帰属遺構であると判断した。このことは現代水路と同じ軸で区画が規制されていたことを示しており、水路の位置が少なくとも第3面時から踏襲されている可能性が考えられる。現在のこの水路は水量が多く用水路として活用されている。

1区・4区（南）・5区において少数検出されたピット状の掘り込みは、並びに規則性がみられず、柱痕も確認できなかった。また、埋土内から遺物が出土しなかったため時期も不明である。

#### \* 1 溝

1溝は南北に通る溝である。遺構の肩は明確で検出面からの深さは18cmを測る。埋土は黄褐色細砂を含む灰オリーブ色シルトである。

#### \* 2 溝

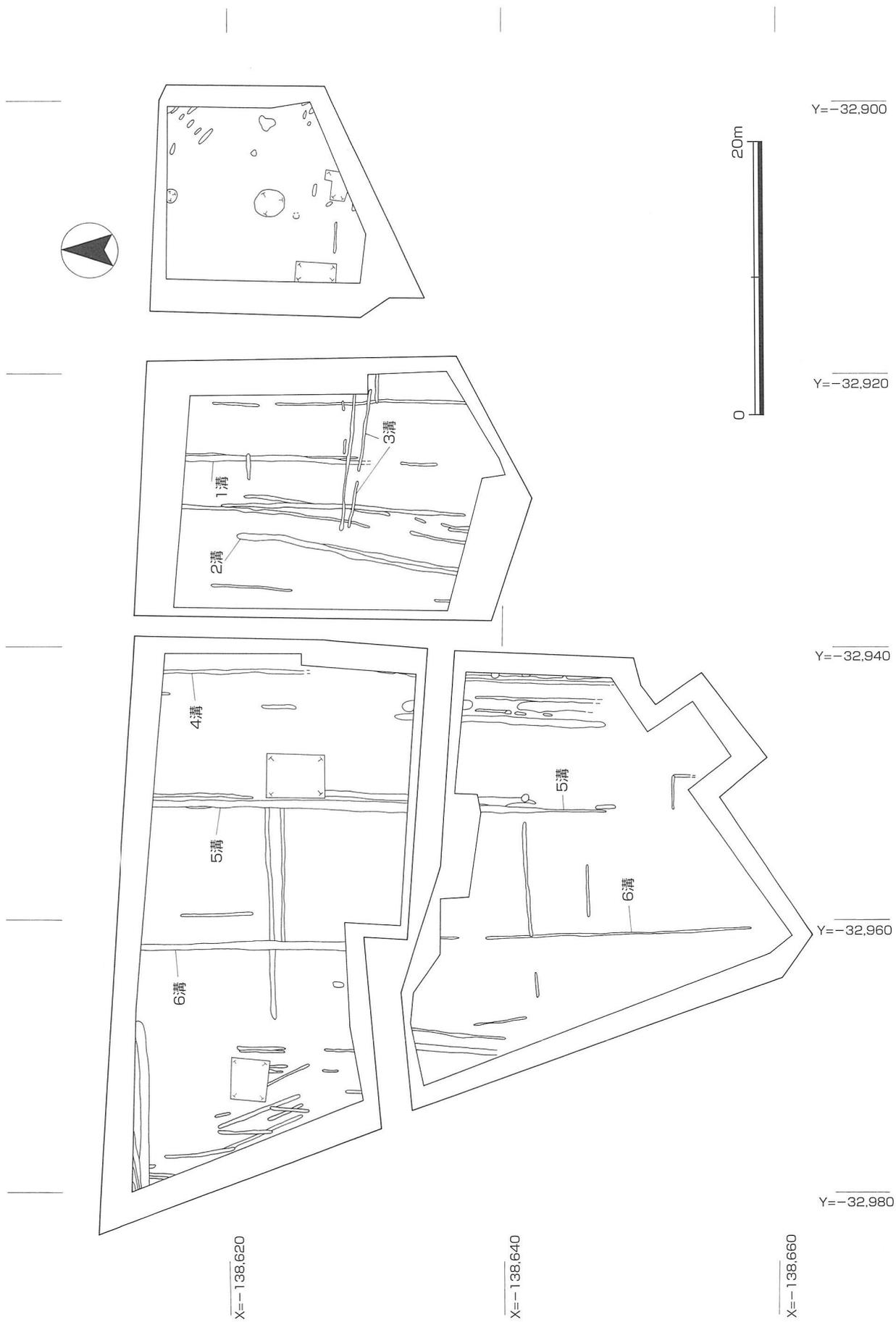
2溝は同じく南北方向の溝であるが、1・4・5・6溝とは方向が少し違いさらに東に振っている。付近の同じ軸を持つ一連の溝が同類の遺構であると考え、これらの溝群は遺構の切り合い関係から第3面において最も古い遺構である。

#### \* 3 溝

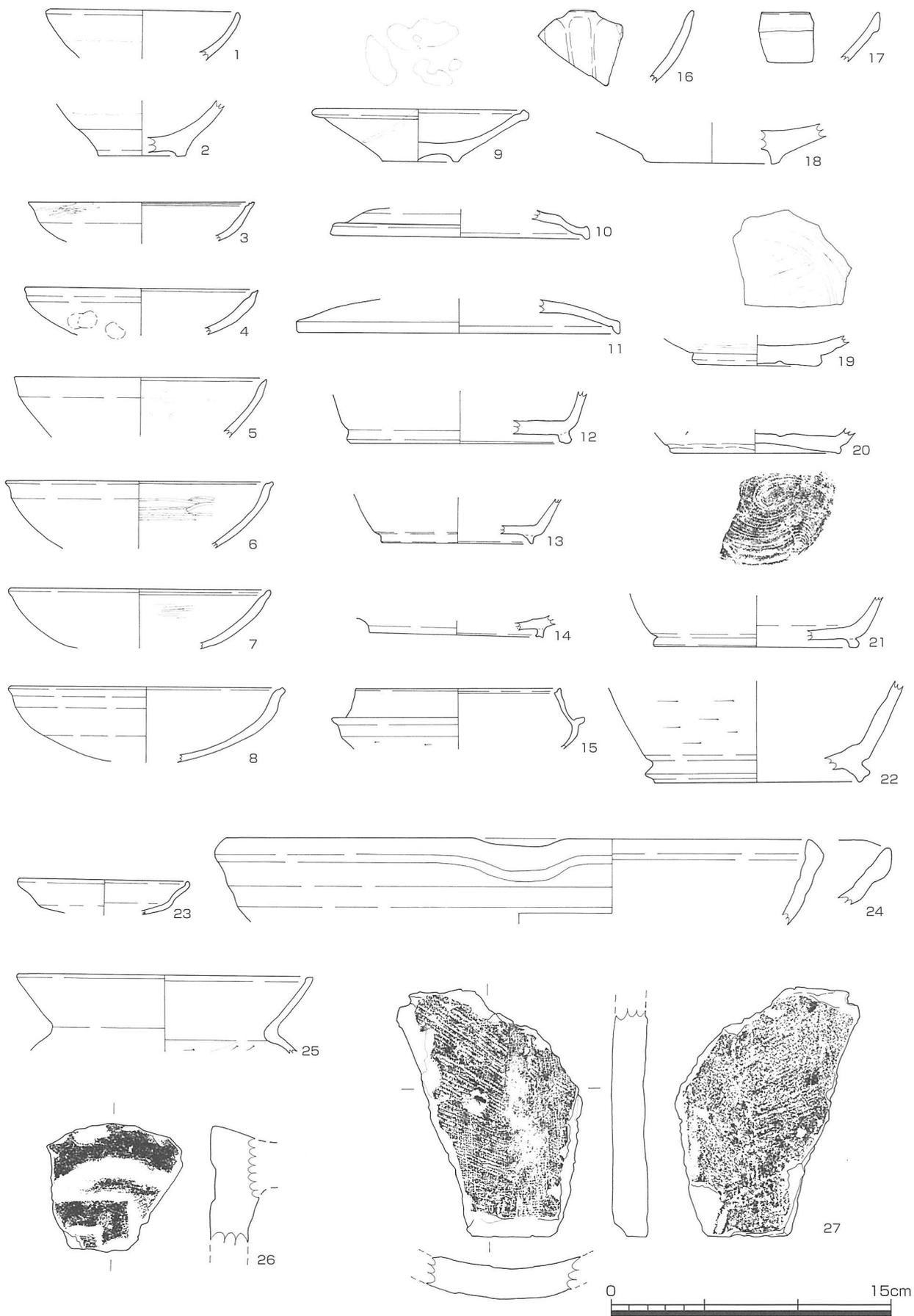
3溝からは須恵器壺の口縁部（第11図-28）が出土した。口縁端部を垂直につまみあげており、内外面とも回転ナデが施されている。特徴から平安期の遺物と考えられる。第3層の遺物より明らかに古いため、耕作により下層の遺物が混入したものと考えられる。

#### \* 4・5・6 溝

4・5・6溝は南北に通る溝である。南になるにつれ残存状況が悪くなり、5区の南側では溝はほとんど残っておらず、底がかるうじて検出できる程度であった。4溝は第2面の畦畔とはほぼ同位置で検出しているが、6溝は第1面段差、第2面畦畔より4m程東に位置する。



第9図 第3面平面図



第10图 第3層出土遺物

前述の工区境の里道から6溝まで約44mの間隔を想定したときに、1溝を除く各溝は約10～12m間隔となり、里道を起点とした南北方向の長地割りを復元したときに適当な場所であると思われる。これらの溝は畦畔造成の盛土調達のための掘り込みや、畦畔（段差）際に沿うように掘られた溝の可能性を考察することができ、地割りに関連する遺構であると考えられる。1溝だけは間隔が合わないが、しっかりと掘り込まれているため鋤溝の類でないことは明らかである。

### 第3層出土遺物（第10図）

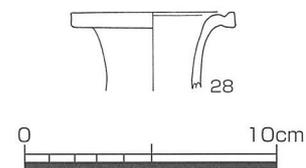
第3層からは遺物が多く出土している。これは、遺物の密度によるものではなく、2区を除く調査区全域に亘り、第3層は平均して30cm程の厚さで層が存在したため、結果的に遺物の出土量が多くなったものである。出土遺物は、陶器、磁器、瓦、須恵器、土師器である。耕作土内からの出土であるため細片が多く全体的に摩滅を受けている。

瓦器や土師器は軟質であるため、特に摩滅が顕著であった。遺物の時期幅が広く、古い遺物も比較的多いが、これは大規模な削平や整地などにより古い遺物が混入したためと考えられる。

層の時期を示す遺物として唐津焼（1・2・9）が挙げられる。（9）の唐津焼溝縁皿は良好な状態で出土している。口縁端部を折り返しつまみあげており、高台は削り出している。また、内面には重ね焼きの際の離れ砂が砂目として残っている。卍文を持つ軒丸瓦の瓦当（26）も近世の遺物と思われる。これらの遺物から第3層は近世耕作土であると判断した。

中世遺物では、内面の口縁端部付近に段状に沈線を施す瓦器椀（3～8）、輸入陶磁器である青磁碗（16）青磁皿（18）白磁碗（17）、土師器皿（23）、片口を持つ東播系須恵器の捏鉢（24）が出土している。古代遺物では、須恵器杯蓋（10・11）、須恵器杯身（12～14・21）、須恵器皿（19）、須恵器壺（20・22）、平瓦（27）が出土している。（19）は須恵器の皿であるが、外面は回転ナデ、高台を削り出している。内面は暗文を巡らせており、緑釉陶器の生地であると考えられる。

さらに古い遺物では、古墳時代の杯身（15）や布留式甕（25）が1点ずつ出土している。



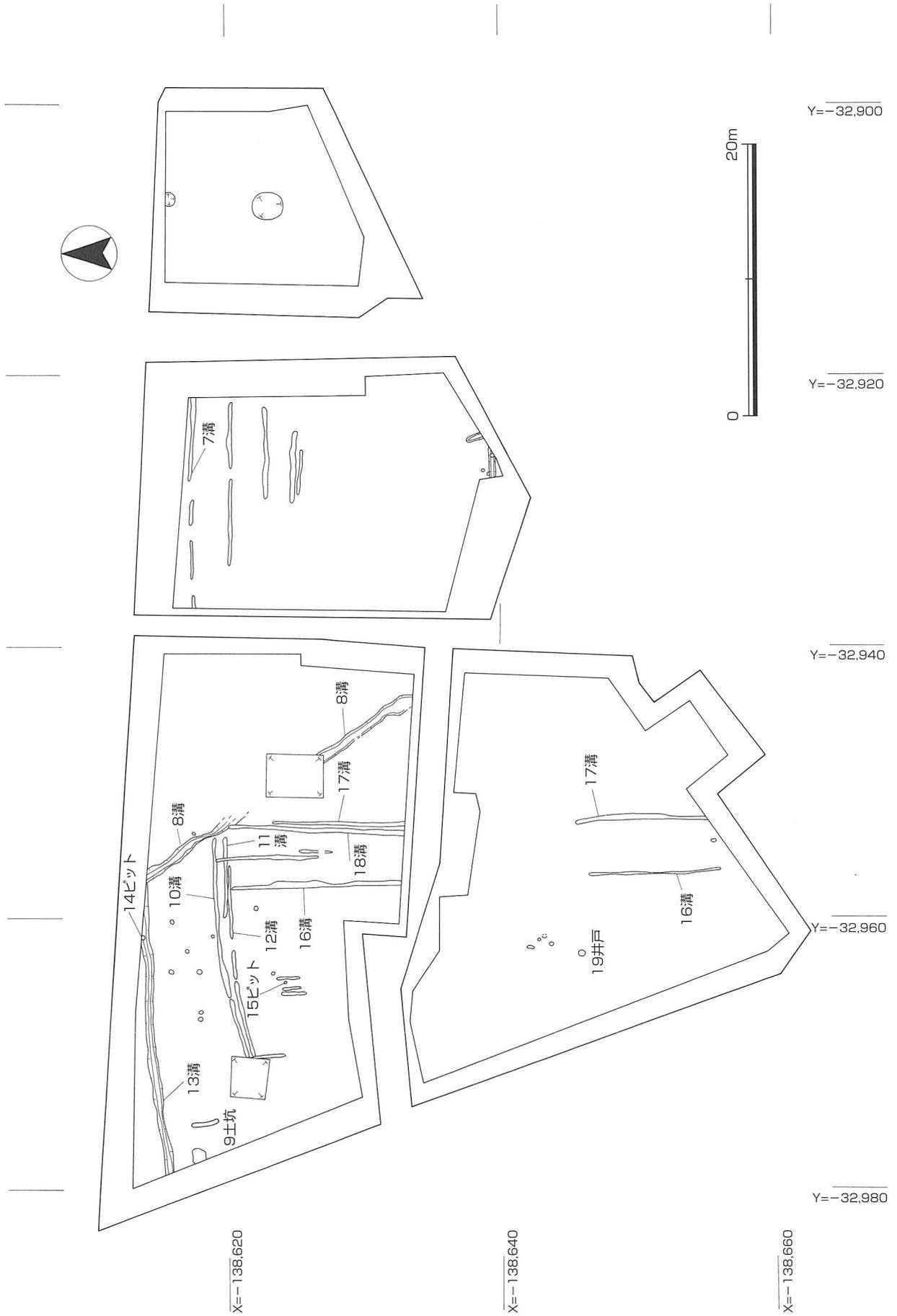
第11図 3溝出土遺物

### 第4層遺構面（第12図）

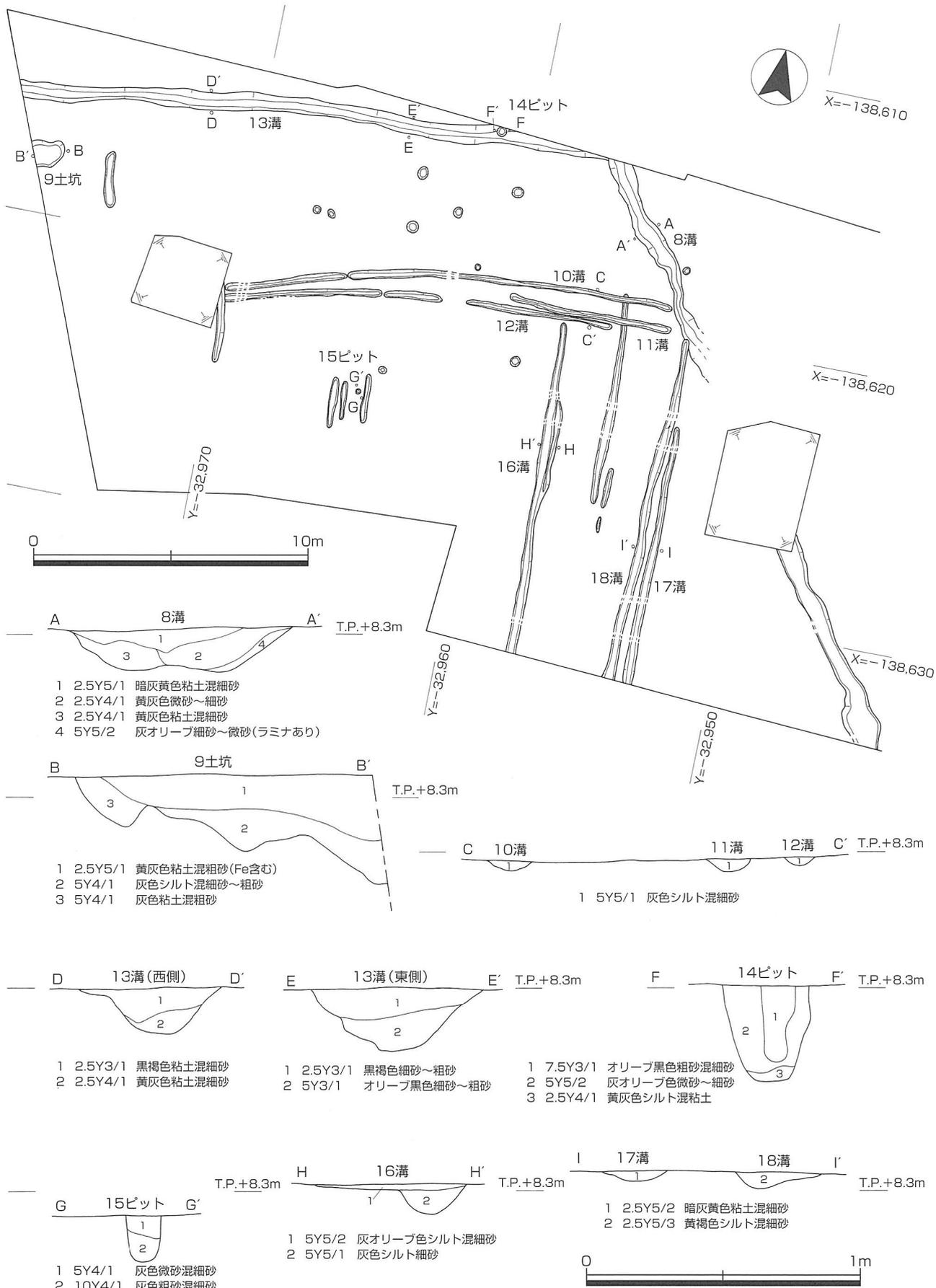
第4層は、主な遺構が正方位に沿った耕作関連溝であることから、条里制の耕作面であると考えられるが、耕作溝以外の遺構も比較的多く検出している。耕作溝以外の検出遺構は溝、ピット、土坑、井戸である。遺構の切り合いは、第4層に類似する埋土を持つ耕作溝が最も新しい。よって、新段階では耕作面であったことは確実である。また、第4層出土遺物の時期が中世であることから、耕作を行っていた時期は中世であると考えられる。

4区（北）の中央部においてピットを12基集中して検出した。この周辺は、古段階において耕作地ではなかった可能性を示唆しているが、ピットの並びに規則性がみられず、建物を復元する事はできなかった。ピットは浅いものが大半で残存が悪かったことから、新段階の耕作によって完全に破壊されてしまい検出できないピットもあるものと考えられるが、これらはあくまで可能性の域を出ない。また、ピット検出部周辺から遺物が多く出土するといった傾向は確認できなかった。

3区（東）では耕作関連溝と思われる東西方向の溝を数条検出した。深さ数cmしか残存しておらず



第12図 第4面平面図



第13図 9土坑、8・10~13・16~18溝、14・15ピット平・断面図

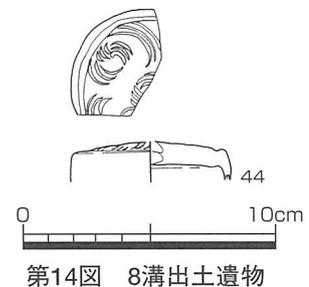
所々で途切れているが真っ直ぐ通り、埋土が同じであったことから同軸上の溝は同じであると判断した。埋土は黄褐色砂混じり粘土で粗砂や径2mm大の細礫が多く含まれており、第4層と近似する埋土である。このうち、遺構の残存が最も良好だったのは最北で検出した7溝である。この7溝の南側で同様の溝を3条検出している。7溝に平行し検出間隔も2～3mとほぼ等間隔である。一群の溝を検出したのは3区（東）のみである。

東側は第3面と同じく2区の工区境である里道に区画を規制されているものと考えられる。西側の3区（西）では溝の続きを検出することはできなかった。

4区（北）では、遺構の残存が良好であり、耕作関連遺構以外にピットや土坑を検出している。別図にて拡大平面図及び断面図を記載した（第13図）。

#### \* 8溝（第13・14図）

8溝は4区（北）の南東端から北西方向に伸びる溝である。幅40～90cm、深さは最深部で17cmを測り、ほぼ真っ直ぐ通っている。局所的に小さく曲がる状態で検出しているのは、溝の上部が後の耕作により第4層に取り込まれ残存せず、底近くしか検出できなかったためと考える。埋土は部分的に攪拌土が見られるが主体は砂である。溝西肩に僅かに堆積している埋土最下層内にはラミナがみられる。これらのことから溝には流れがあった可能性が考えられる。遺物は土師器の細片と共に、輸入陶磁器である青白磁の合子蓋（第14図-44）が出土している。



#### \* 10・11・12溝（第13図）

10・11・12溝は東西方向の耕作関連溝である。幅は10～15cm、深さは5～8cmを測る。埋土は第4層に類似する攪拌土で、灰色のシルト混じり細砂である。溝は浅く、途中で途切れながら東西に15m以上に亘り続いており、西方ではやや南に振る。

#### \* 13溝（第13図）

13溝は東西方向の溝である。幅45～65cm、深さは最深部で30cmを測る。断面形状はV字状に切り立つことから、明らかに溝として掘り込まれたものと考えられる。埋土は他の第4面遺構とは異なり、黒褐色の粘土混じり細砂及び粗砂である。遺構の切り合い関係から、8溝及び14ピットよりも古く、第4面では最古段階の遺構である。溝からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### \* 16・17・18溝（第13図）

16・17・18溝も南北方向の溝である。規模、埋土共に前述の10・11・12溝と差異はなく同じく耕作関連溝である。16溝だけ他の溝より深く、深さ14cmを測る。溝は第3面とは異なる位置で検出している。

これらの溝は正方位に乗ることから、共に条里地割りに起因する耕作関連溝であると判断できる。明確に検出できる南北方向の溝を区画の単位と考えると第3面は第4面時の地割りとは異なることになる。

#### \* 9土坑（第13図）

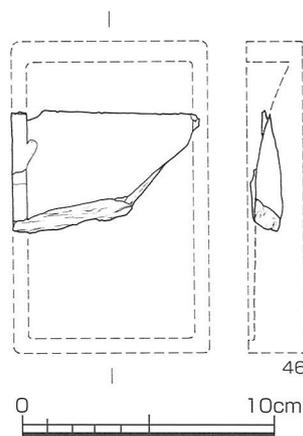
9 土坑は西側溝にかかっているため完全な形で検出できなかったが、西壁断面上では続きを確認できなかったため、溝ではなく土坑であると判断した。

埋土は黄褐色の粘土混じり細砂で、土師器片が出土している。楕円形に掘り込まれたものと思われるが、底には凹凸が激しく残っており、掘られて間も無く埋め戻されたものと考えられる。

#### \*14ピット (第13図)

14ピットは13溝と同位置で溝を切る形で検出した。円形で、直径31cm、深さ35cmを測る。オリブ黒色の粗砂混じり細砂が主な埋土であり、底に黄灰色シルト混じり粘土が薄く存在する。中央よりやや西よりに直径13cmの柱痕を確認している。柱痕は灰オリブ色の微砂～細砂であり、明瞭に確認できる。第4面で検出したピット中では最も深く、柱根が確認できる唯一の柱穴である。

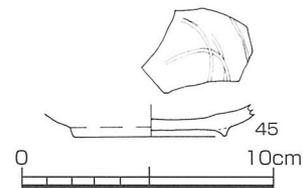
埋土、深さなどが類似するピットは他になく検出位置が4区(北)の北端であることから、建物があるとすれば調査区外である北側に伸びていたものと推察できる。埋土からは安山岩製の硯の破片(第15図-46)が出土している。



第15図 14ピット出土遺物

#### \*15ピット (第13図)

15ピットは円形で直径14cm、深さ17cmを測る。埋土は上下2層に分けることができ、上層は灰色微砂混じり細砂、下層は灰色粗砂混じり細砂である。ピットから内黒の黒色土器碗の底部(第16図-45)が出土している。破片は摩滅の進んだ細片である。内面に螺旋状の暗文を施し、貼り付け高台を持つ。



第16図 15ピット出土遺物

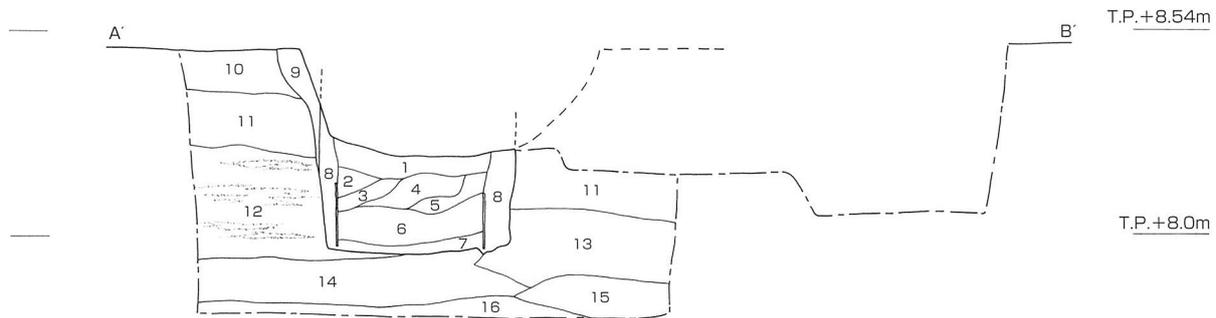
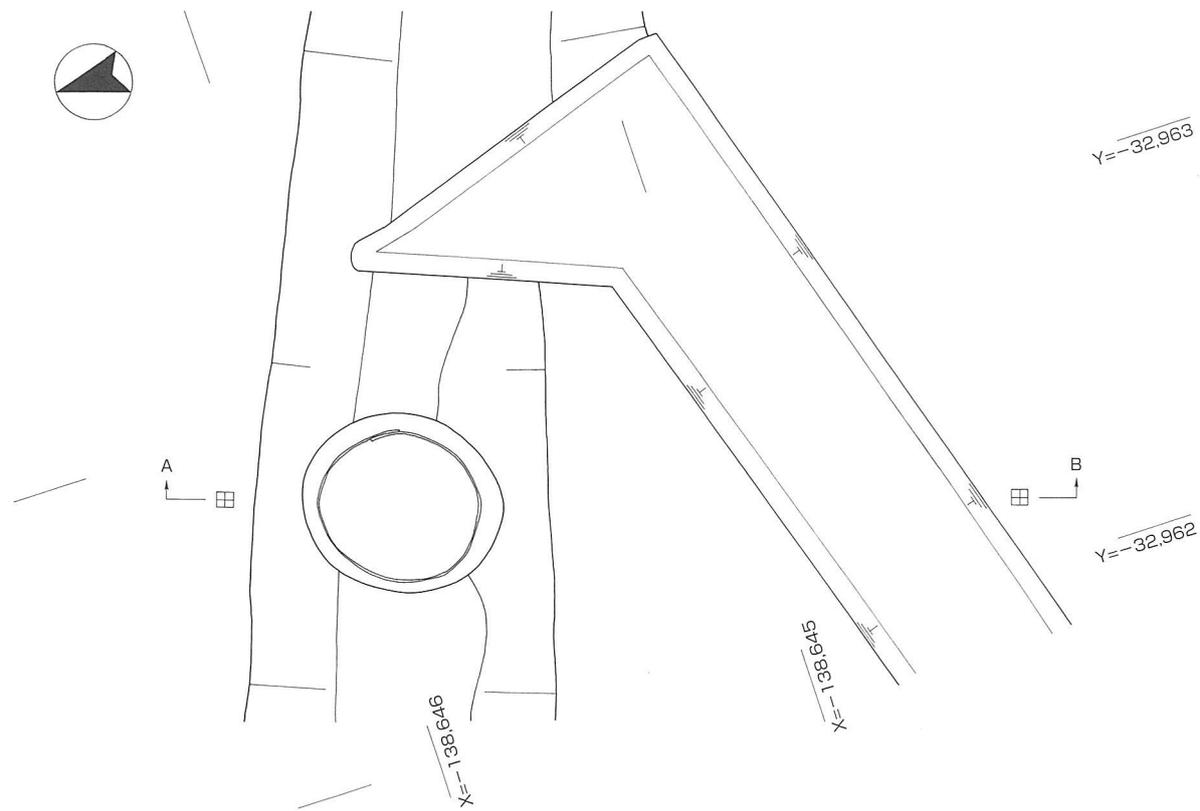
#### \*19井戸 (第17図)

5区で検出された19井戸は、第6面27溝を切る形で掘り込まれている。ほぼ円形で井筒径40～43cm、掘方径48～54cmを測る。井筒の底部には曲げ物を設置し井戸枠としている。この曲物は底から20cm程しか残存していない。それより上方は腐ってしまったものと思われる。

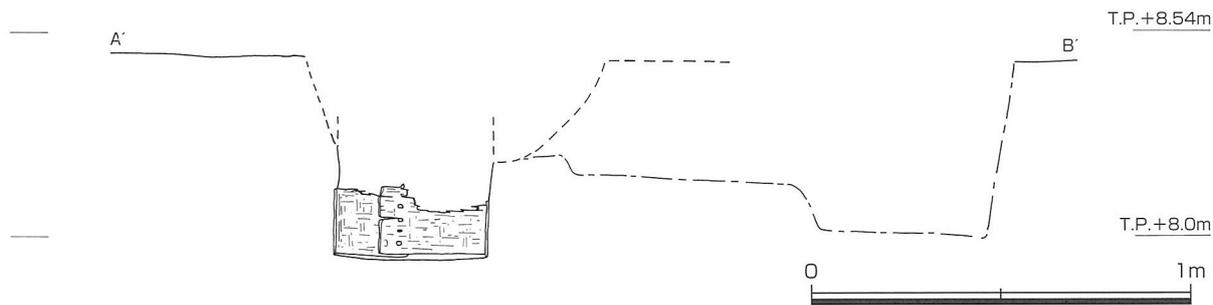
残存する曲物も傷みが激しく、原形を保ったまま取り上げる事はできなかった。27溝を完掘した後、溝の底面で19井戸を検出したため、検出時は27溝よりも古い遺構であると考えたが、断ち割りで断面観察を行ったところ、27溝の北肩を掘り残していること(9層)が確認され、井戸の掘方はこの掘り残しを切って掘り込まれていた。このことから、19井戸は27溝よりも新しい遺構であると判断した。井筒内からは遺物は出土しておらず、機能時の時期は不明である。一方、掘方埋土(8層)からは土師器片が数点出土している。いずれも細片であったため器種の確定には至らなかったが、おそらくは土師器の皿であると思われる。

#### 第4層出土遺物 (第18図)

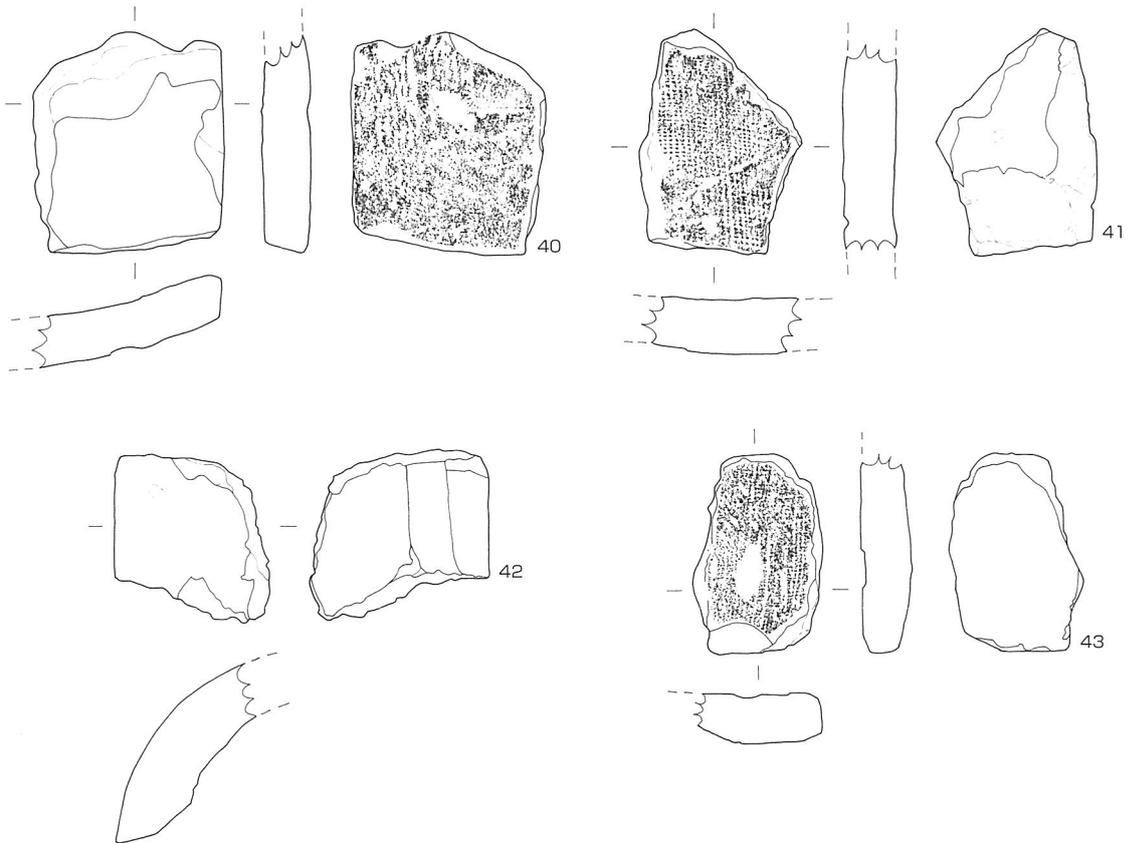
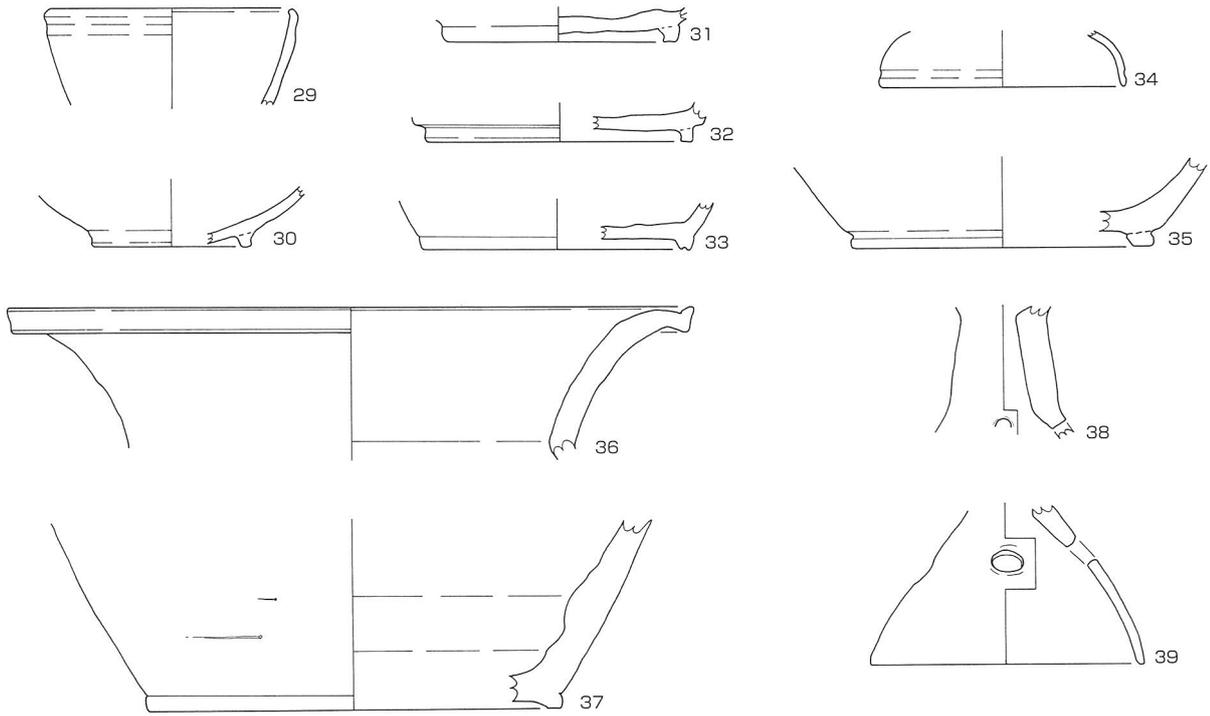
第4層からは中世から古墳時代の陶器、瓦器、瓦、須恵器、土師器が出土している。第4層も耕作土



- |  |   |
|--|---|
| 1 : 5Y3/2 オリーブ黒色シルト混細砂<br>(5Y6/2灰オリーブ色微砂ブロックで含む) | 8 : 7.5Y4/1 灰色シルト混細砂～粗砂                   |
| 2 : 5Y4/1 黄灰色シルト混細砂                              | 9 : 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混細砂                    |
| 3 : 5Y5/2 灰オリーブ色シルト混細砂                           | 10 : 5Y3/2 オリーブ黒色微砂～細砂(粗砂多く含む)            |
| 4 : 2.5Y3/2 黒褐色シルト混細砂                            | 11 : 5GY5/1 オリーブ灰色微砂(Fe少し含む)              |
| 5 : 7.5Y5/2 灰オリーブ色細砂～粗砂                          | 12 : 2.5Y5/3 黄褐色粗砂(5GY5/1オリーブ灰色微砂を含む)     |
| 6 : 5Y4/1 灰色粗砂混粘土                                | 13 : 5GY6/1 オリーブ灰色微砂(10G5/1緑灰色シルトを含む)     |
| 7 : 7.5Y4/1 灰色微砂～細砂                              | 14 : 5GY5/1 オリーブ灰色微砂～細砂                   |
|  | 15 : 5GY6/1 オリーブ灰色微砂(7.5Y3/1オリーブ黒色シルトを含む) |
|  | 16 : 5GY4/1 暗オリーブ灰色微砂～シルト                 |



第17図 19井戸平・断・立面図



第18図 第4層出土遺物

であるため、遺物は細片が多く摩滅も顕著である。掲載遺物は大半が須恵器となっているが、これは硬質なため残存したものと考えられ、実際に出土量が多いのは瓦器碗であった。

(30) は瓦器碗の底部である。内外面とも摩滅が激しく調整は確認できなかった。古代遺物は須恵器杯底部 (31~33)、壺 (35~37) が出土している。古墳時代の遺物では土師器高杯脚部 (38)、小型器台脚部 (39) が出土しているが、これらは3区 (東) で検出された古墳時代前期の溝である第6面22流路の上からの出土である。流路の上部は第4層に攪乱されているため、遺物が混入したものと考えられる。瓦は平瓦 (40・41・43)、丸瓦 (42) が出土している。平瓦のうち (41・43) は布目痕が確認できる。

### 第5遺構面 (第20図)

第5面の検出遺構は軸を同じくする20流路と21溝である。調査区南東から北西にかけての流れがあったものと考えられる。共に奈良時代後半~平安時代前半期の遺物が出土しており、流路と溝は同時期に併存していたものと考えられる。

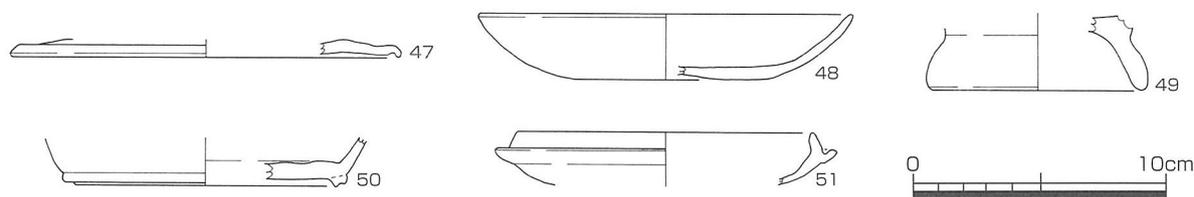
20流路は、その方向から讃良郡条里遺跡 (その1) において検出された溝27 (絵馬・人面墨書土器・人形などが大量に出土し、大規模なシガラミが施設された流路) の上流にあたるものと考えられる。本調査地においても人面墨書土器や獣骨など古代祭祀にまつわる遺物が多数出土している。(その1) で検出された流路同様に、本調査区で検出された流路でも祭祀が執り行われていたことが判明した。

流路周辺の第3・4・5層からは古代遺物が比較的多く出土していることから、周辺に建物等が存在した可能性が考えられるが、ピットや杭跡等の遺構は検出できなかった。

### 第5層出土遺物 (第19図)

第5層は3区 (東) と3区 (西) の一部分のみにしか存在しない。遺物量は少ないが、古墳時代~中世の遺物が出土している。流路埋没後に成立した第5層は流路機能時とは時期差を持つ中世帰属層である。第5層は攪拌土であり遺物も希薄なことから耕作土と考えられるが、第5層下面である第5面の検出遺構は流路とそれに伴う溝のみであり、耕作関連遺構は検出できなかった。

(48) は土師器の皿である。口径は大きく、14.8cmを測る。(49) は土師器の台付皿の脚台部である。内外面ともヨコナデを施す。須恵器の杯蓋 (47) ・杯 (50) は共に古代の所産で20流路に関連する遺物と思われる。

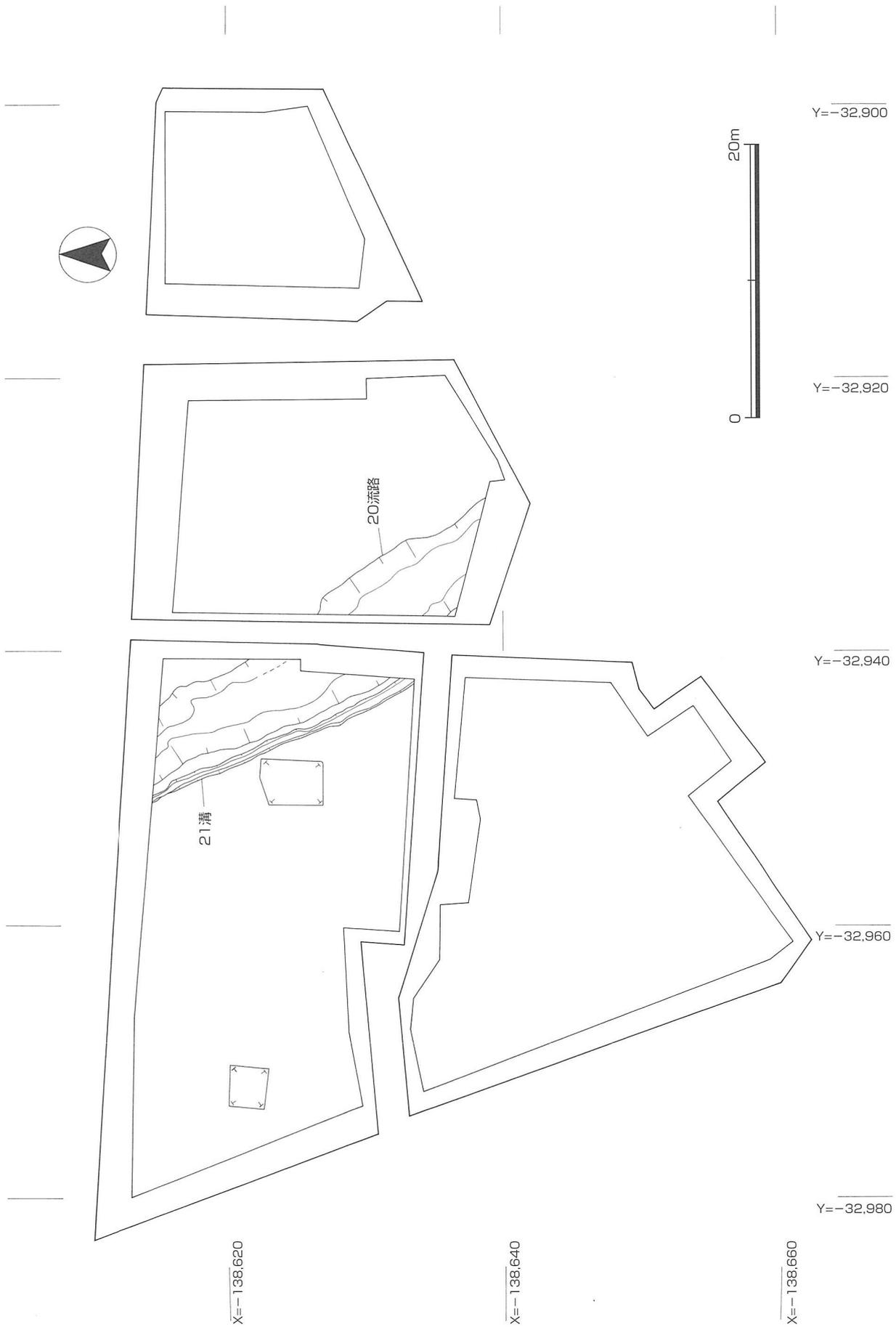


第19図 第5層出土遺物

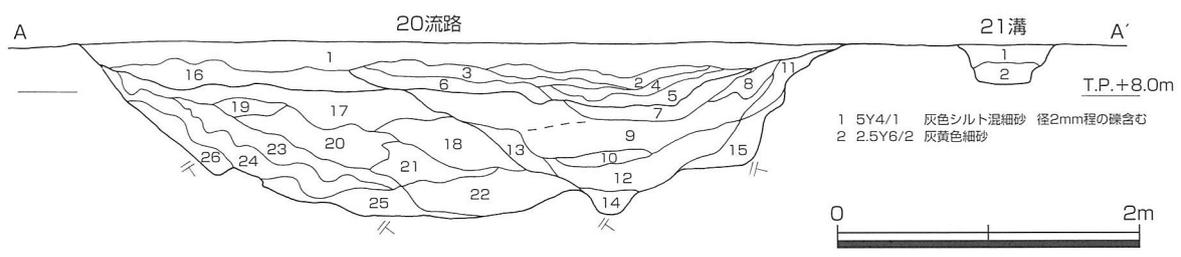
### 第5面遺構 (第21図)

#### \*20流路

20流路は前述の通り、南東から北西にかけて3区を貫く流路である。幅4.5~7.2m、深さ1~1.4mを測る。出土遺物から古代において祭祀が執り行われていたものと考えられ、流路全域において祭祀遺物が出土している。



第20図 第5面平面图



- |    |         |                 |                         |    |         |              |                          |                            |
|----|---------|-----------------|-------------------------|----|---------|--------------|--------------------------|----------------------------|
| 1  | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土混細砂       | 径2mm程の礫含む Fe含む          | 16 | 5Y4/1   | 灰色細砂混シルト     | 径2mm程の礫含む Fe含む           |                            |
| 2  | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色シルト混細砂    | 黒褐色シルトブロック含む            | 17 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色粘土     | まだらに混ざる 植物遺体含む           |                            |
| 3  | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土混細砂       | 径2mm程の礫含む Fe含む          | 18 | 5Y4/1   | 灰色細砂         |                          |                            |
| 4  | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土混細砂       | 径2mm程の礫含む Fe含む          | 19 | 7.5Y5/1 | 灰色微砂         |                          |                            |
| 5  | 5Y3/1   | オリーブ黒色シルト       |                         | 20 | 5Y6/2   | 灰オリーブ色細砂~粗砂  | 径2~4mm程の礫含む 緑灰色シルトブロック含む |                            |
| 6  | 5Y3/1   | オリーブ黒色粗砂混シルト~粘土 | 径2mm程の礫含む               | 21 | 5Y3/1   | オリーブ黒色シルト混粗砂 | 互層 植物遺体含む                |                            |
| 7  | 5Y3/1   | オリーブ黒色粗砂混シルト~粘土 | 土色より粗砂が多い               | 22 | 5Y6/1   | 灰色微砂~シルト     |                          |                            |
| 8  | 5Y3/1   | オリーブ黒色粗砂混粘土     | 黒色シルトブロック含む             | 23 | 5Y6/1   | 灰色細砂~粗砂      |                          |                            |
| 9  | 2.5Y4/1 | 黄灰色細砂混粘土        | Fe少し含む                  | 24 | 7.5Y4/1 | 灰色微砂~シルト     | まだらに混ざる 植物遺体含む           |                            |
| 10 | 5Y4/1   | 灰色粗砂混粘土         | 径2mm程の礫少し含む 層下部に灰色粘土帯   | 25 | 7.5Y5/1 | 灰色細砂~粗砂      | 緑灰色シルトブロック含む             |                            |
| 11 | 2.5Y6/2 | 灰黄色粗砂           |                         | 26 | 5Y4/1   | 灰色粗砂         |                          |                            |
| 12 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粗砂混粘土        | Fe少し含む, 黒色シルトブロック含む     |    | 5Y3/1   | オリーブ黒色粗砂混シルト | 緑灰色シルトブロック含む             |                            |
| 13 | 5Y6/2   | 灰オリーブ色細砂~粗砂     | 互層                      |    | 25      | 7.5Y5/1      | 灰色微混粗砂                   | 緑灰色シルトブロック, オリーブ黒色粘土ブロック含む |
| 14 | 5Y4/1   | 灰色微砂~細砂         |                         |    | 26      | 5Y5/1        | 灰色微砂~微砂                  | 緑灰色シルトブロック, 黒色シルトブロック含む    |
| 15 | 2.5Y6/2 | 灰黄色細砂~粗砂        | 互層 径2~15mm程の礫多く含む       |    |         |              |                          |                            |
|    |         |                 | 緑灰色シルトブロック含む            |    |         |              |                          |                            |
|    |         |                 | 黒色シルトブロック, 緑灰色シルトブロック含む |    |         |              |                          |                            |

第21図 20流路・21溝平・断面図

今回の調査で検出した他の流路が大きく蛇行しているのに対し、20流路は本調査地から讃良郡条里遺跡（その1）の溝27にかけてほぼ直線の流路を想定することができる。蛇行の跡がみられずほぼ真っ直ぐの流れを維持していることは、祭祀を執り行う特別な流路として計画的に護岸を行い、流れを管理していたことの表れであるものと考えられる。

埋土は上層（1～8層）、中層（9～14層）、下層（15～25層）の3層に大きく分類できる。上層は主に土壌層である。流路の埋没が進み、最終段階において窪地になった部分を埋め立てた埋土である可能性が考えられる。あるいは、埋没最終段階に湿地状になり、堆積が進んだ状態を表すものかもしれない。

中層以下は流路機能時の埋土である。9層の下方には灰色粘土が帯状に堆積しており、滞水していた時期があったことを示している。あるいは、この時期はすでに埋没が進み、流路としては機能しておらず所々に小さな池状の窪みが残された状態であったと考えることもできる。10層～14層までは主に砂が埋土となっており、ラミナも確認できることから流路として機能していたことがわかる。

下層も流路機能時の埋土である。主な埋土が砂である点は中層と同様であるが、より強い流れがあったものと考えられ、粒径がやや大きいのが特徴である。また、流路肩付近の埋土には基盤層である緑灰色シルトのブロック土がみられる。

調査時には埋土の違いによる掘り分けを行っていないため、各層の遺物の時期差を確認することはできなかった。

## 20流路出土遺物（第22・23図）

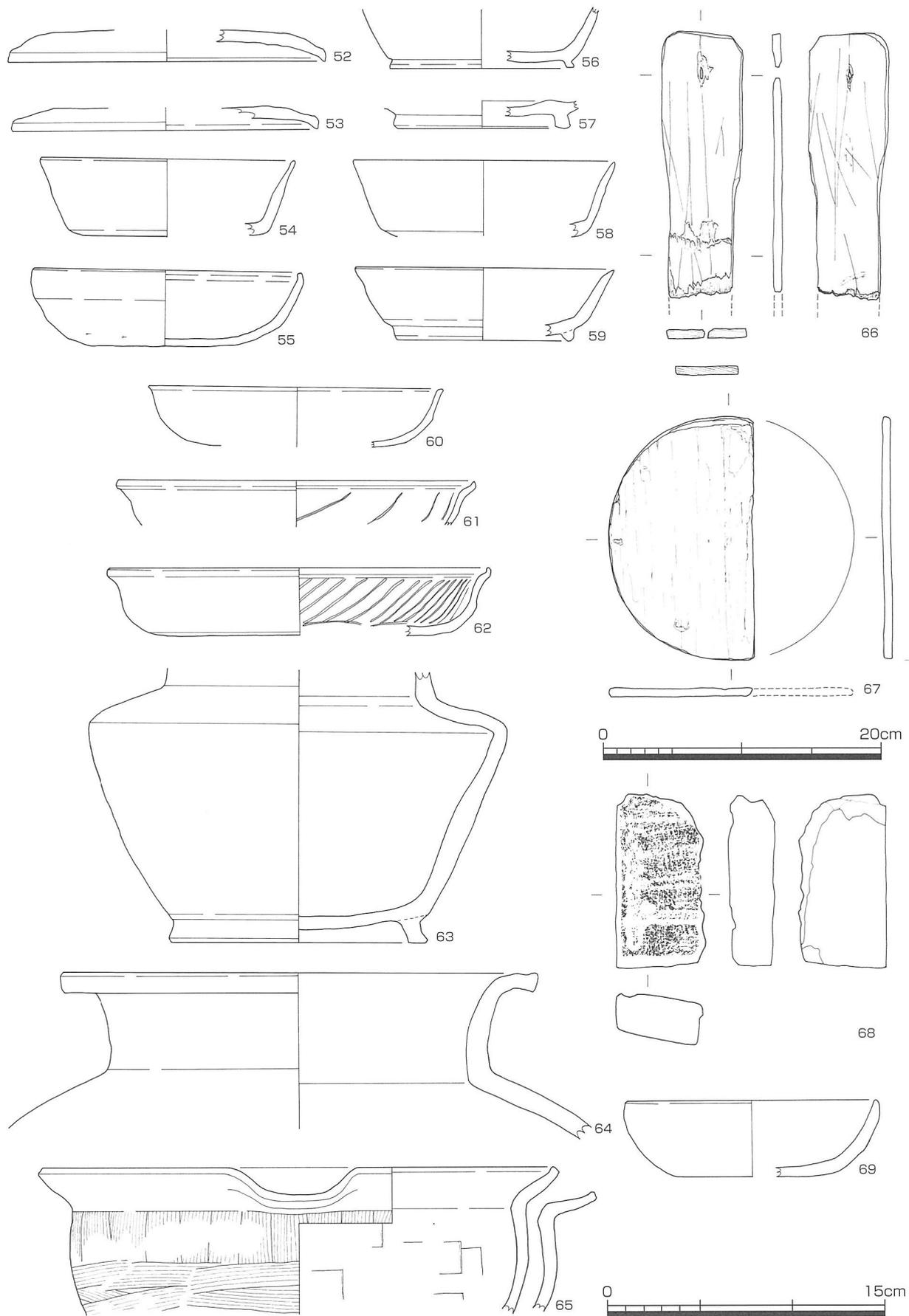
流路からの出土遺物は、瓦、須恵器、土師器、縄文土器、木製品、石器、獣骨と多岐に渡り、出土量は整理箱4箱である。特筆すべき遺物として、祭祀関連遺物である人面墨書土器、獣骨が挙げられる。獣骨は馬のものと思われる下顎部、種別不明の脊椎部が出土したが、残存状態が極めて悪く原形を保ったまま取り上げることはできなかった。

古代の遺物の内訳は大半が土師器の甕である。底部に穿孔されたり、人面墨書が描かれるといった特徴が確認できる個体が多く、主に祭祀に用いられた遺物であると考えられる。その他の通常の土師器・須恵器は、土師器甕の出土量に比較すると少なく、このような遺物の出土傾向からも20流路は祭祀を執り行う流路として管理されていたものと考えられる。古い時期の遺物も比較的多く出土している。特に、古墳時代前期の遺物はこの流路と切り合いを持つ第6面22・23流路に関連するものと考えられる。縄文土器・石器は流れによって基盤層から洗い出されたものと考えられる。

以下に出土遺物の概要を述べるが、土師器甕に関しては、出土量の多さと人面が描かれる等、祭祀遺物としての特殊性のため、別項にて解説する。

（第22図-52・53）は須恵器杯蓋である。天井部は平らで共に宝珠つまみを欠損している。（第22図-54・56～59）は須恵器杯である。54は須恵器杯Aである。体部はやや外方に直線的に立ち上がり、端部は薄い。56～59は貼り付け高台を持つ杯である。59の貼り付け高台の断面形状は台形であり、体部は開き気味に立ち上がる。新しい様相を持つ個体である。

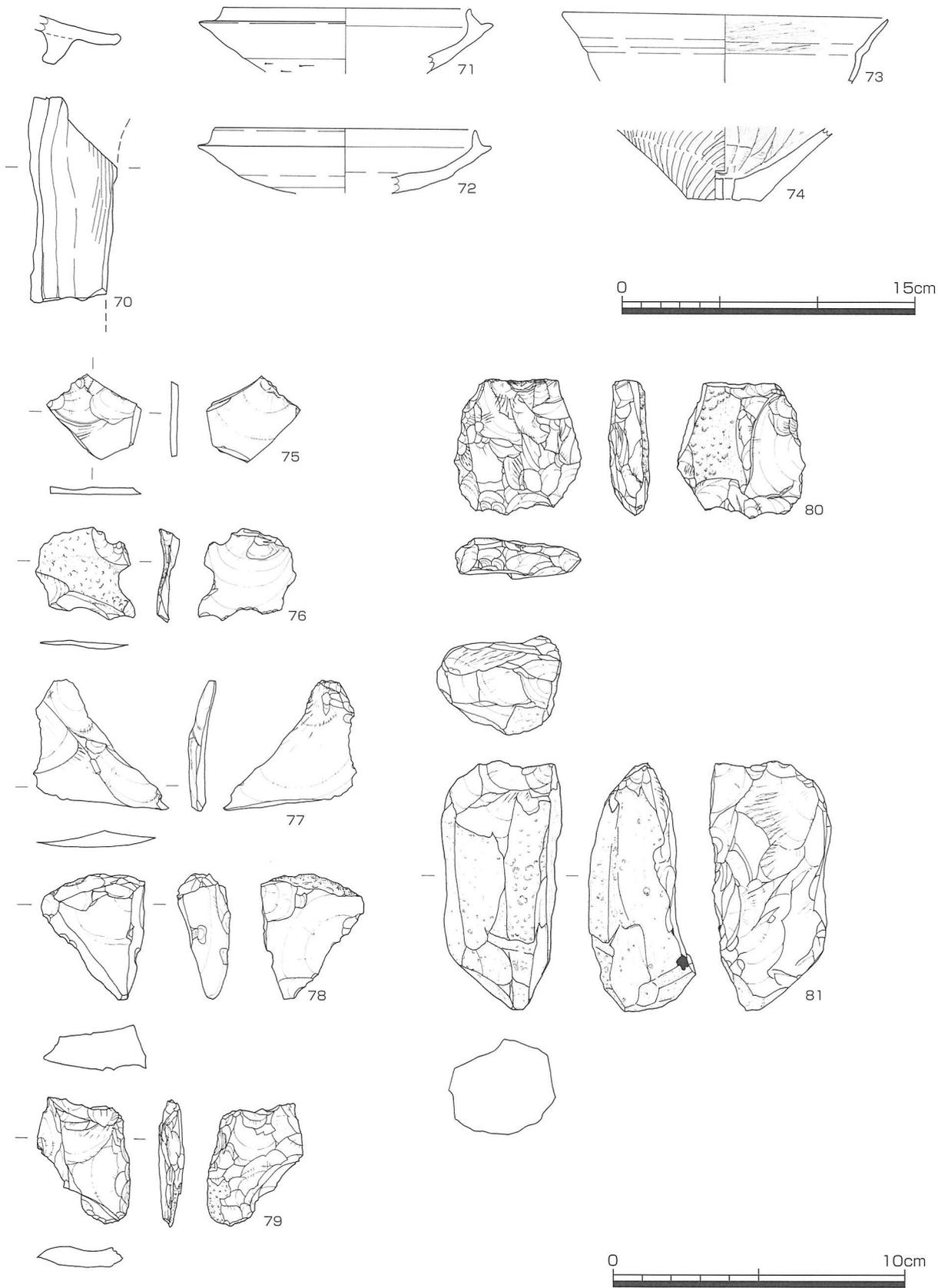
（第22図-55・60～62）は土師器杯である。55は完形の土師器杯で、砂粒を含む粗い胎土を持つ。底部外面は摩滅のため判然としないが、水平方向の砂流の動きがみられることから、ヘラケズリ調整であると思われる。体部は内外面ともナデ調整である。62は砂粒を含まない精良な胎土を持ち、器壁も薄く非常に丁寧な作りである。口縁部は丸く内湾して段を形成している。底部外面はヘラケズリの後にナデ



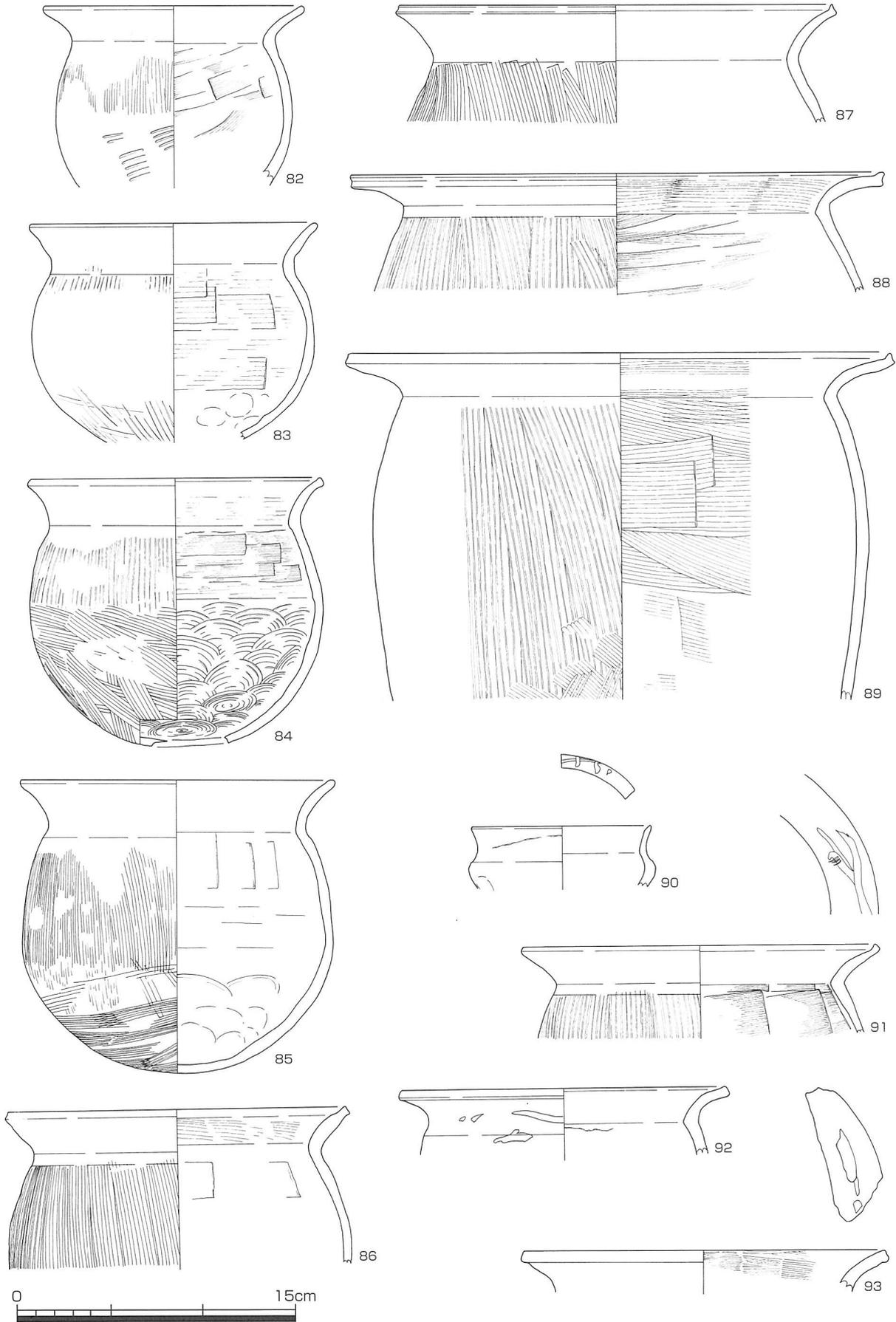
第22図 20流路・21溝出土遺物

調整、内面はナデ調整の後に螺旋状暗文・斜め放射状暗文を施す。

(第22図-63) は須恵器壺である。頸部から底部にかけては完形であり、うつ伏せ状態で出土した。回



第23図 20流路出土遺物



第24図 20流路出土遺物

転ナデ、回転ヘラケズリ調整で、外方に踏ん張る高台を持つ。内外面共に焼成時の降灰のためとみられる、自然釉がかかっている。釉厚は外面は肩部に、内面は底部に厚い。(第22図-64)は須恵器甕である。頸部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部は水平に開く。(第22図-65)は片口を持つ土師器鍋である。口縁部内外面をヨコナデ調整、体部外面上半部を縦方向の刷毛目調整、下半部は横方向を主体とする不定方向刷毛目調整を施す。体部内面は横方向の細かい刷毛目もしくは刷毛ナデが認められる。

(第22図-66)は板状の木製品であるが、下部は欠損しており元の形状は不明である。側面全面に面取りがみられ、上部の角を意図的に落としている。また、上部中央には穿孔がみられ、縦方向に刃物の先で引っ掻いたような痕が表裏共に確認できる。(第22図-67)は円形の木製品で曲物の底部と思われる。木目に沿って割れており、4割程度欠損している。

(第22図-68)は平瓦である。凹面に布目痕を確認できる。(第23図-70)移動式竈の焼き口であると思われる。煤の付着は認められない。

古代以前の遺物では、須恵器杯身(第23図-71・72)、土師器有段口縁鉢(第23図-73)、土師器有孔鉢(第23図-74)が出土している。また、石器も計7点出土しており、全てサヌカイトである(第23図-75～81)。80は刃を作り出すための加工が下部に集中しており、搔器の未製品であると思われる。

#### 土師器甕(第24～32図)

土師器甕は掲載数だけでも24個体を数え、20流路出土遺物の中でも群を抜いて多い器種である。口縁部が存在しないため実測できなかった破片も相当数あるため、総数ははるかに多い。

甕は器形から小形で球胴の個体と大形で長胴の個体の大きく2種に分類できる。球胴の個体は、口径の違いによりさらに小形(口径13.8～15.3cm)と中形(口径17.3～21.4cm)の2種に分類できる。墨書は24点中16点、全てのタイプに墨書が認められた。

球胴甕と長胴甕は調整の仕上がりに小異が認められるものの、製作手法はほぼ共通している。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は横方向の刷毛目もしくはヨコナデ調整である。体部は肩部から最大径部にかけての上半部と、最大径部から底部にかけての下半部では調整手法が異なる。上半部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整である。下半部は外面が不定方向の刷毛目調整、内面は同心円の当て具痕跡が認められる。タタキ技法による整形の後に、外面のみ刷毛目調整を行ったものとみられる。

長胴甕は器形に合わせて大型の工具を使用したものと考えられ、刷毛目の単位が大きいのが特徴である。また、体部下外面にはタタキ技法の痕跡が消えきらずに残っており、斜めに平行する短い溝状の単位が認められる。以下に各個体の概要を述べる。尚、(第24図-90)は土師器壺と思われるが、墨書が認められたため祭祀関連遺物であると判断し、本項に記載した。

(第24図-82～86)は球胴の甕である。84には底部に焼成後の穿孔が認められる。(第24図-87～89)は長胴の甕である。口縁端部を上方につまみ上げている。(第24図-90)は土師器壺である。口径9.5cmと小形であり、形状は扁平である。内外面ともナデ調整を施し、指頭圧痕や粘土の巻き上げ痕が明瞭に認められるなど、全体的に粗い作りである。口縁部内面に、口縁に沿う長い直線とそれに直交する短い線で構成される細い線描きの墨書が認められる。(第24図-91～93)は球胴の中形甕である。91・93は口縁部内面に、92は頸部外面に線描きの墨書が認められる。何を表現したものであるかは不明である。

(第25図-94)は完形の球胴の小形甕である。20流路の底近くでうつ伏せの状態出土した。体部外面

に5面の人面墨書と、底部中央からやや外れた位置に焼成後の穿孔が認められる。人面はいたってシンプルに描かれている。やや扁平な円を時計回りに描き、目と口の表現としており、この表現法は5面全てに共通している。また、目と口の両脇に描かれる縦方向の線描きは、輪郭を表現しているものと思われる、それぞれの顔を隔てている。人面の割付には偏りがみられ、B面とD面では顔幅が大きく異なる。

(第26図-95)は球胴の中形甕である。体部外面に5面の人面墨書、口縁部内面に円と線の墨書が認められる。人面は、円弧を2つ連続させた眉、扁平な円の目と口、鼻を描く。5面全てに共通した表現がみられるが、B・D面の鼻は丸く塗り潰されている。D面の鼻の下部から口にかけてと口の下部には縦方向の短い線描きが認められ、髭の表現であると思われる。

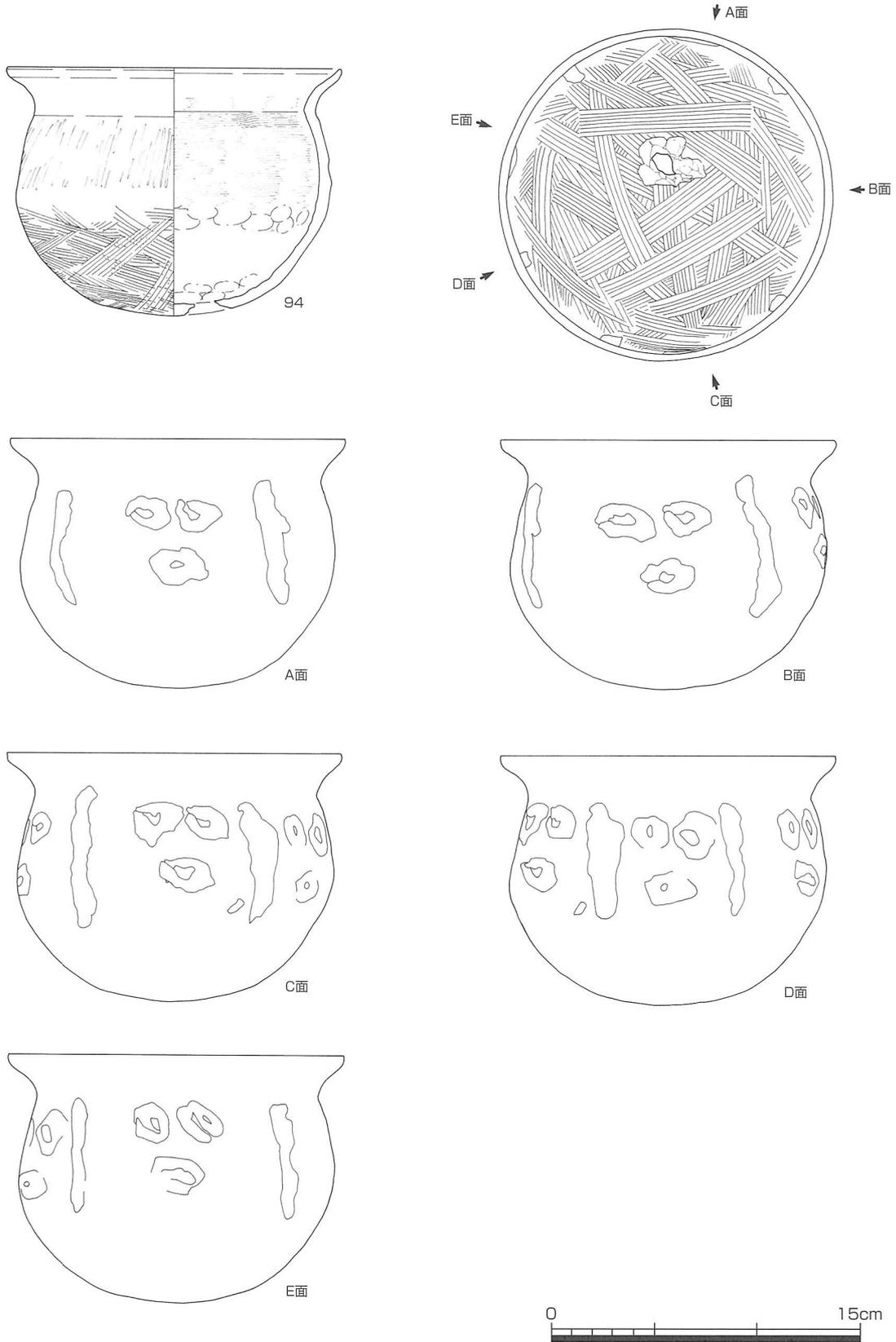
(第27図-96)は球胴の中形甕である。体部外面に4面の人面墨書、口縁部内面に円と線の墨書が認められる。人面は、円弧を2つ連続させた眉、扁平な円の目、円の口、口の下半から放射線状に伸びる顎鬚を描く。眉の交点から下方に直線が伸びており、口の下端にまで達する。鼻筋を表現したものである。また、口縁部から頸部にかけては縦方向の線描きが不規則に見られる。頭髪の表現であろうか。顔としての全貌を確認できたのはA面だけであったが、残る3面も共通した表現を持つものと思われる。口縁部内面の墨書は円を等間隔に配置したような文様である。

(第28図-97)は球胴の小形甕である。残存率は、接合しない2片で約7割である。体部外面に3面の人面墨書、口縁部内面に波状の墨書が認められる。割付位置から考えて人面は4面存在した可能性がある。人面は他の個体に比較してやや体部上方寄りに位置し、やや小さく描かれる。丸く円形に顔の輪郭を描き、丸い目には黒目が認められる。人面上半には、輪郭に沿うように円弧が描かれ、その直上にあたる頸部から口縁部にかけて、波状の墨書が認められる。これらは頭髪を表現したものであろうか。人面の下部両脇からは直線がやや開きながら伸び、それぞれの終端部からは左下から右上にかけて房状の表現が認められる。

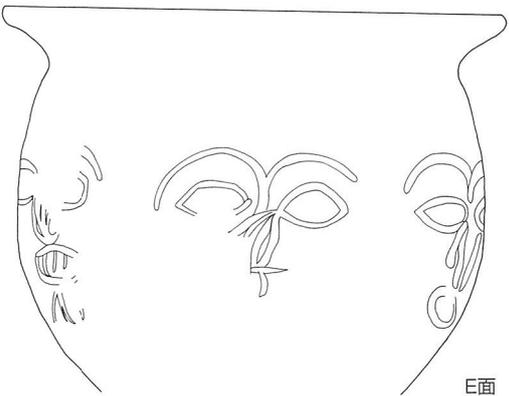
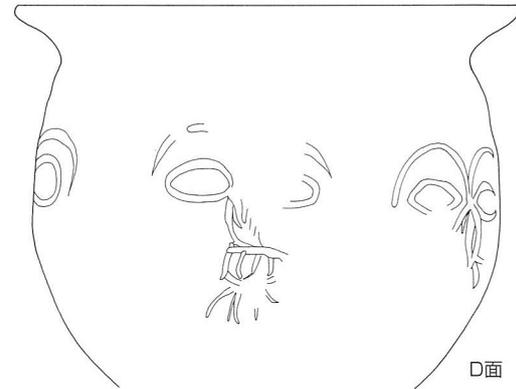
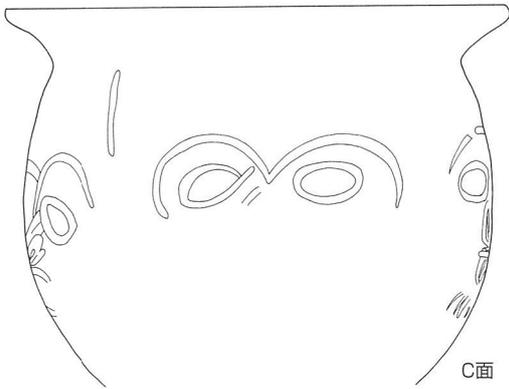
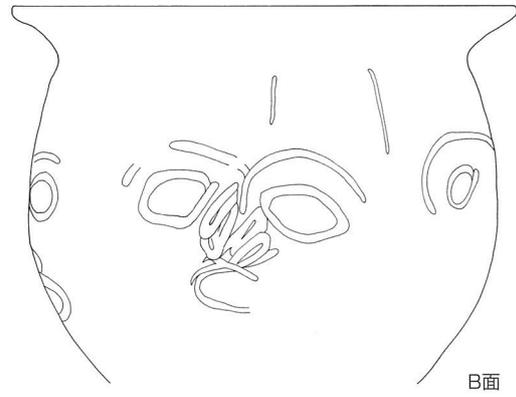
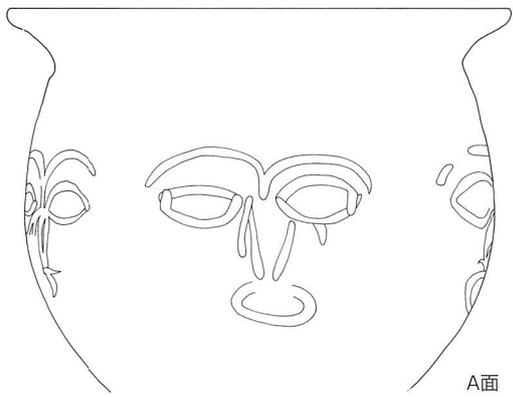
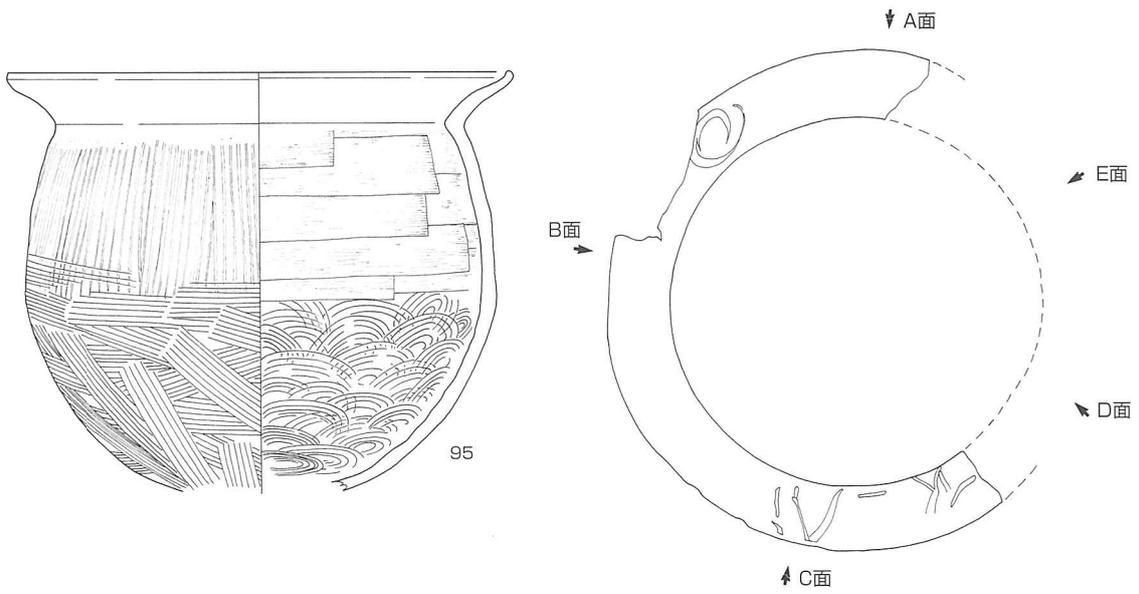
(第29図-98)は球胴の小形甕である。ほぼ完形であるが、上下に潰れ転倒した状態で出土した。体部外面に3面の人面墨書、口縁部内面に波状の墨書が認められる。表裏の位置関係であるA面とC面の人面は、顔の輪郭を円形に描く。この2面に挟まれるB面には、両脇の人面の輪郭線の上端と同じ高さに水平な直線が描かれており、これは顔の上部輪郭を表すものと考えられる。中央部はA・C面のため狭くなっており、B面は人面の隙間を埋めるように後から描かれたものと考えられる。B面の裏側は頸部に同様の直線が水平に描かれているが、人面は確認できない。黒目を持つ目、鼻、口に加え、額には横方向に数条の直線を描いた皺の表現が認められる。最も特徴的なのは、こめかみや頬に描かれている多数の短い線描きである。人面に対してハの字状に描かれており、連続するところは波状に見える箇所もある。これまでの類例からは頭髪や髭と推測できるが、額の皺との関連を考えると顔の皺を表現したものである可能性も考えておきたい。

(第29図-99)は球胴の小形甕である。残存率は4割弱で、体部外面に3面の人面墨書、口縁部内面に線描きの墨書が認められる。人面の割付に偏りがみられ、元の人面数は不明であるが少なくとも5面は描かれていたものと推測される。人面は小さくシンプルに表現されており、扁平な円で目と口とを表現し、U字形の鼻を描く。頸部から口縁部にかけて大きな単位の波状の墨書が認められる。口縁部内面の墨書は交差する短い直線で構成される。

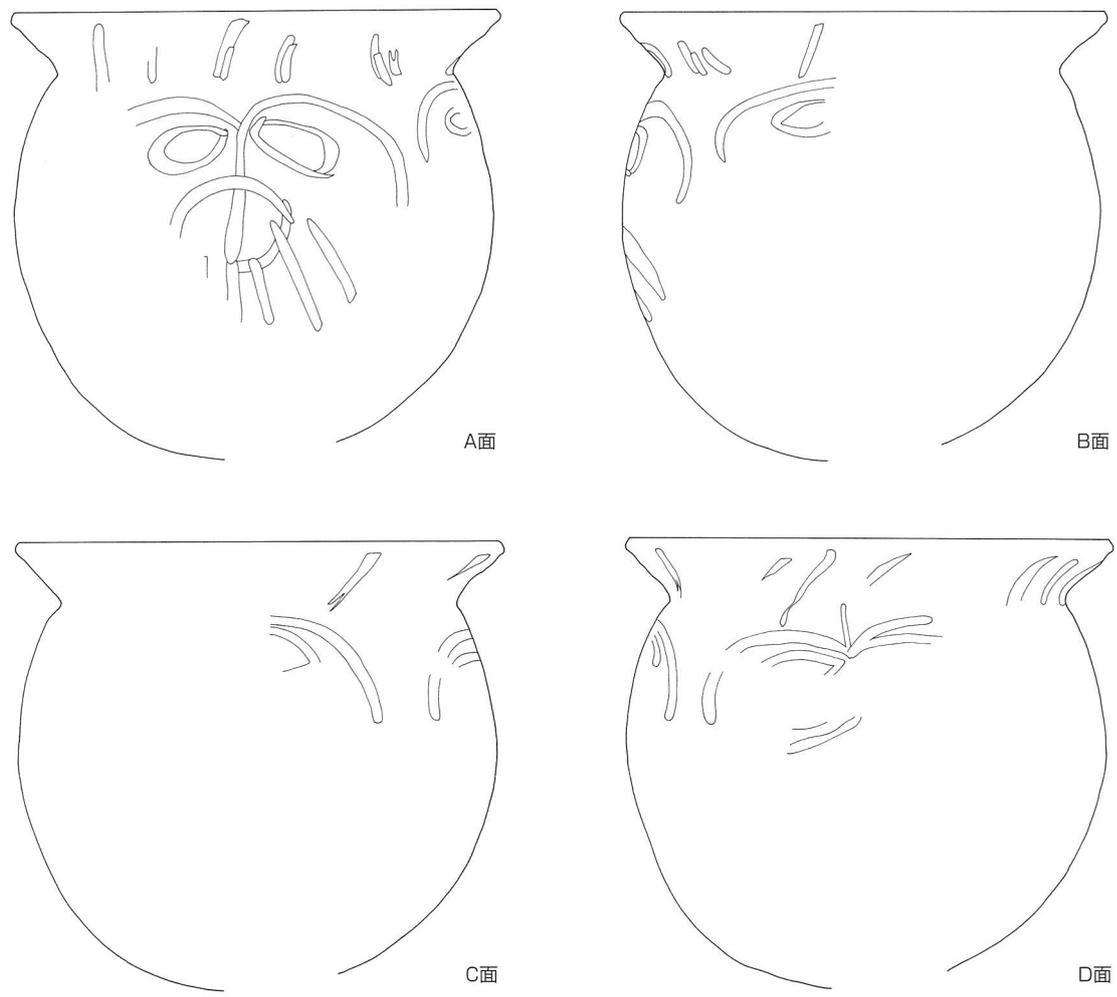
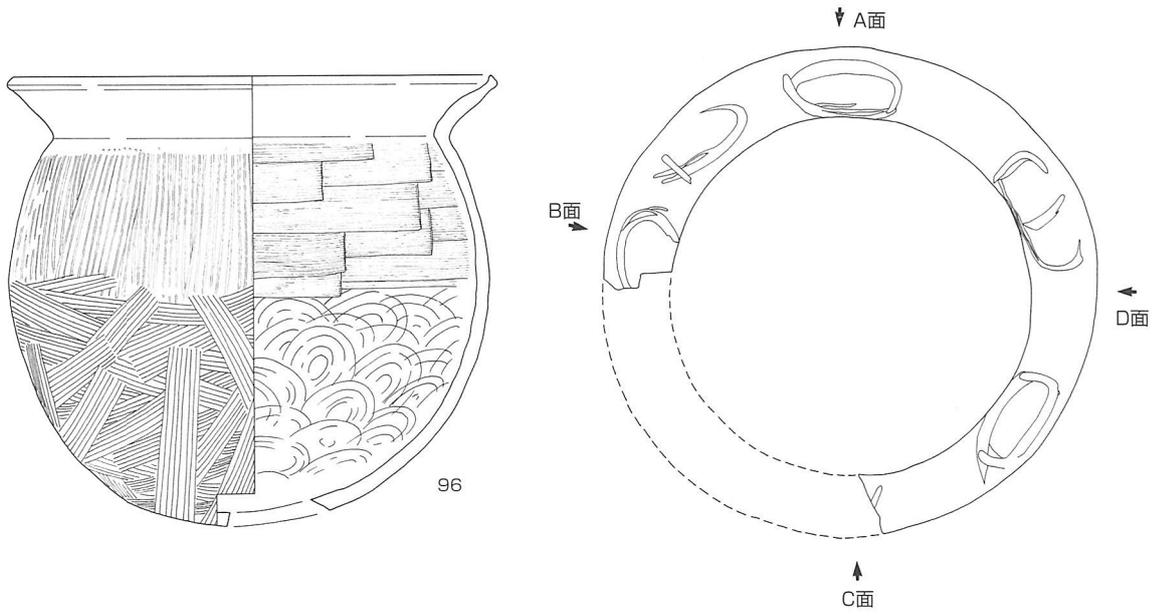
(第30図-100)は球胴の小形甕である。残存率は約1割の小片であるが、体部外面に2面の人面墨書、口縁部内面に線描きの墨書が認められる。人面の割付の偏りを考慮しても、相当数の人面が描かれてい



第25図 20流路出土遺物 人面墨書土器〔1〕



第26图 20流路出土遺物 人面墨書土器〔2〕

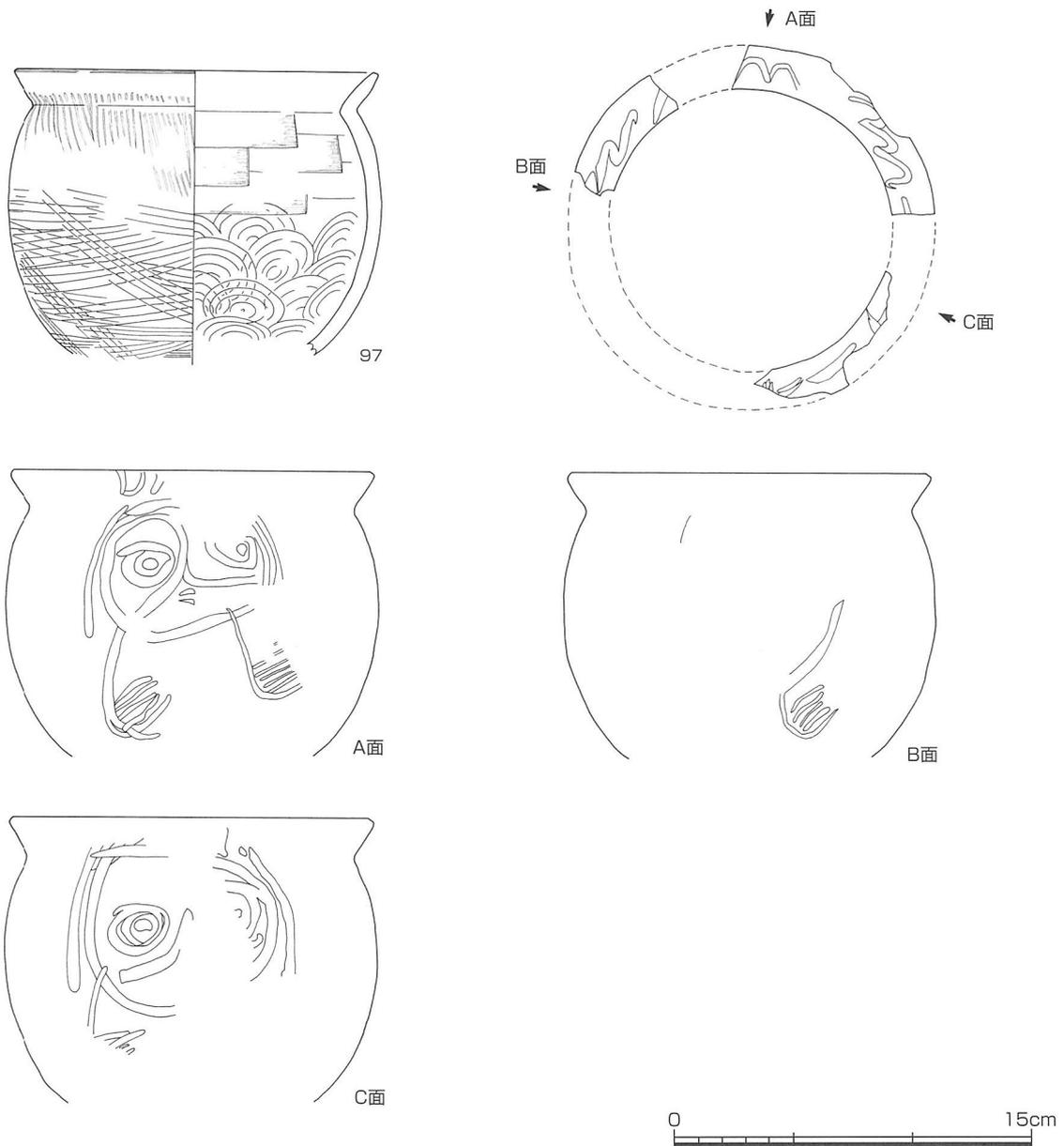


第27図 20流路出土遺物 人面墨書土器〔3〕

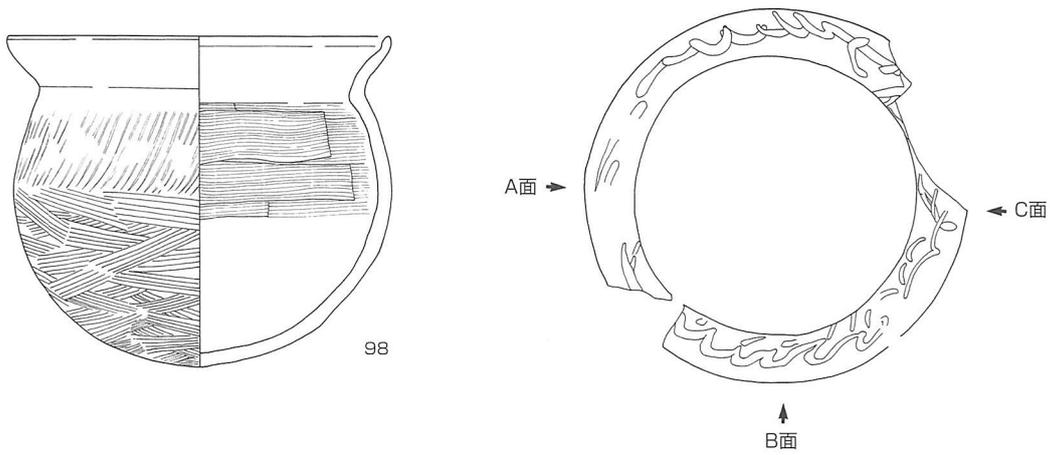
たと推測できる。体部には単位の粗い刷毛目調整がみられる。体部下半部では平行な右上がりの刷毛目調整を施しており、不定方向でない点が他の個体と異なる。人面は小さくシンプルに描かれている。目、鼻、口の表現法や上部にみられる大きな単位の波状の墨書、口縁部内面の線描き等が、99の人面墨書と酷似しているため、同一人物による描画である可能性が高いと考える。

(第30図-101)は球胴の中形甕である。口縁部から体部にかけての小片である。体部外面の上方、頸部付近に方形に近い円とその中央に小さな円が描かれており、目の表現と思われる。

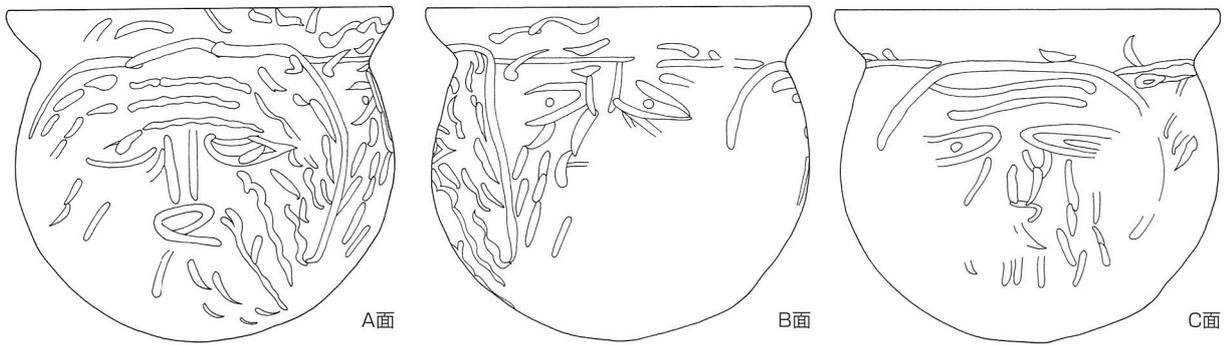
(第30図-102)は球胴の中形甕である。体部外面に墨書が2面認められるが、明確に人面として認識できるのはB面のみである。目は円で表現し、内部にさらに小さな円の黒目を持つ。鼻はやや傾いており、下部両側に鼻の穴の表現とも考えられる小さな円が認められる。口は扁平な円で表現し、下部には顎鬚と考えられる直線が放射状に延びる。A面はB面の側面に位置し、黒斑が広域に広がるため墨書の判別が困難である。確認しうる限りでは、円と直線が描かれており、人面に見えなくも無いが判然とし



第28図 20流路出土遺物 人面墨書土器〔4〕



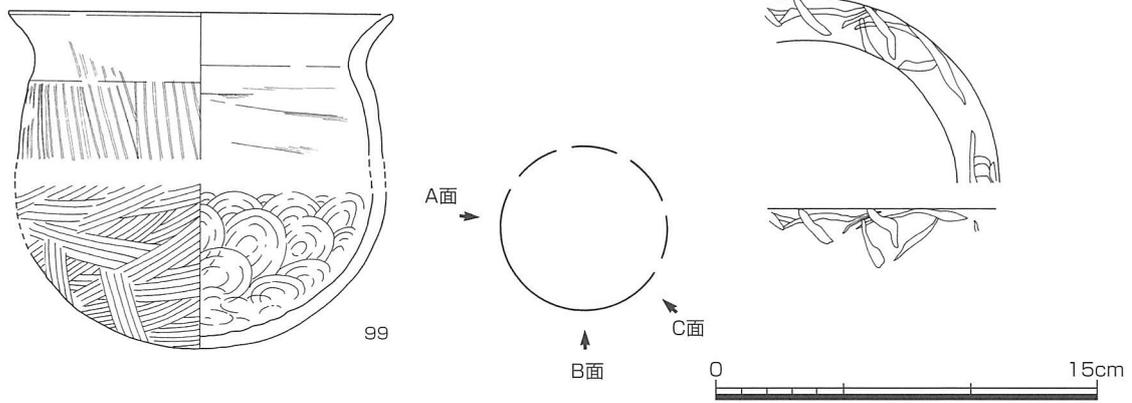
98



A面

B面

C面



99

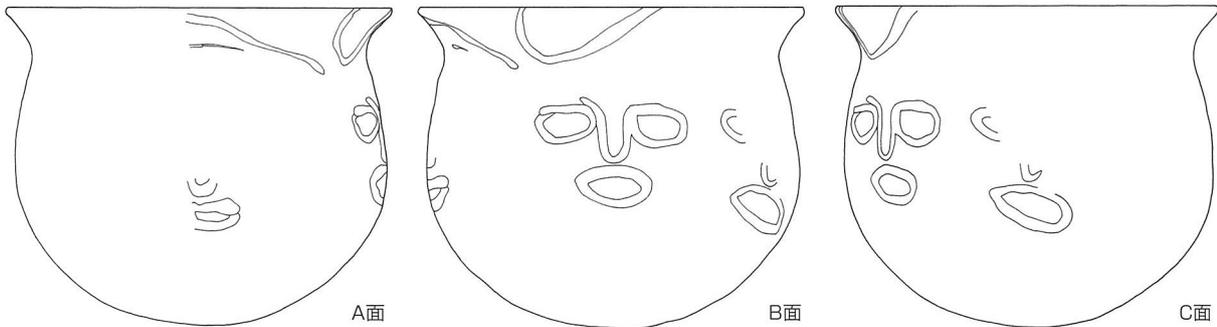
A面

B面

C面

0

15cm

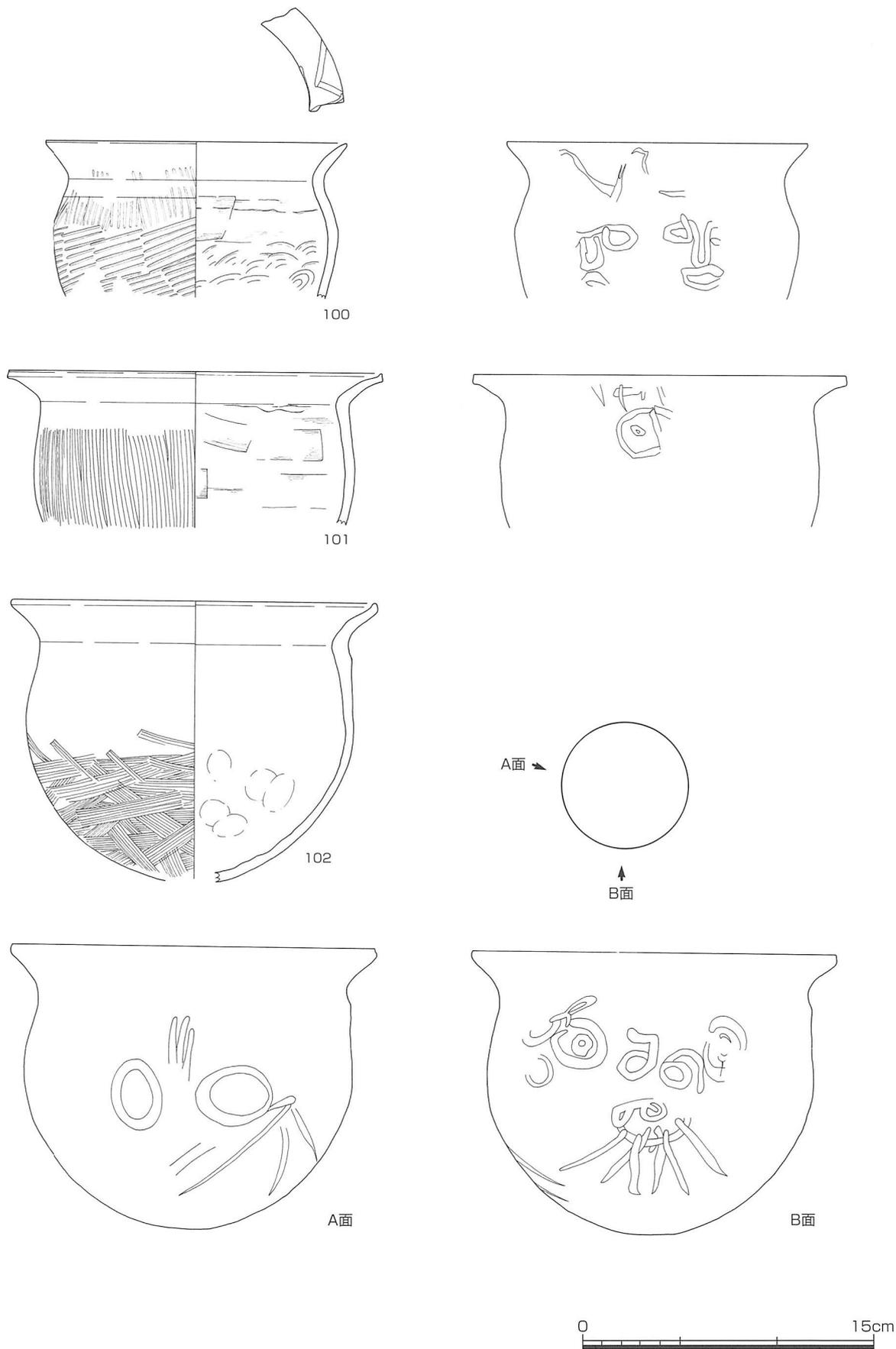


A面

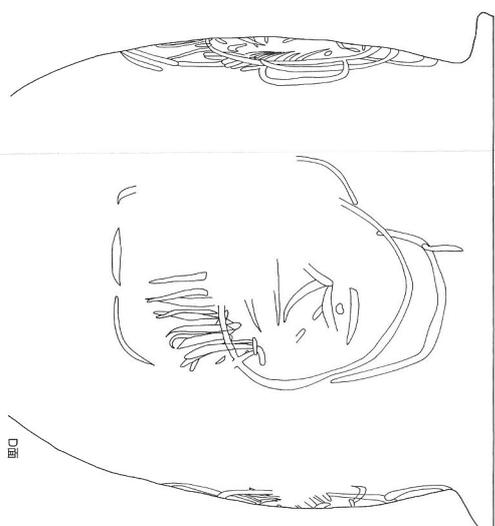
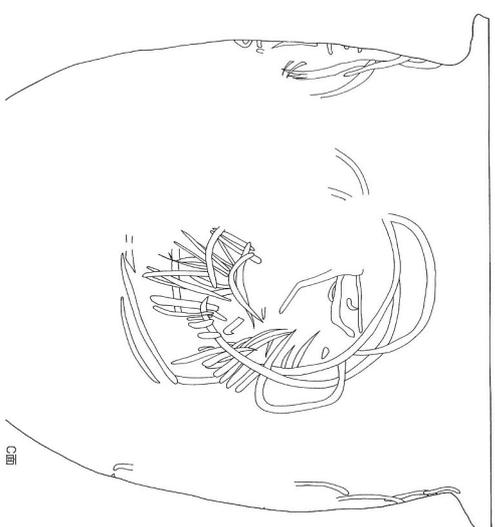
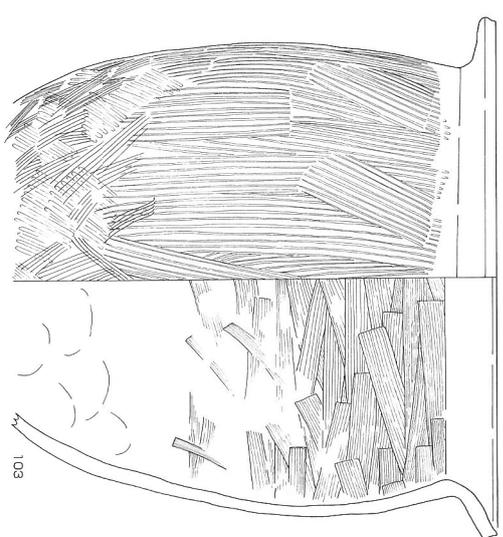
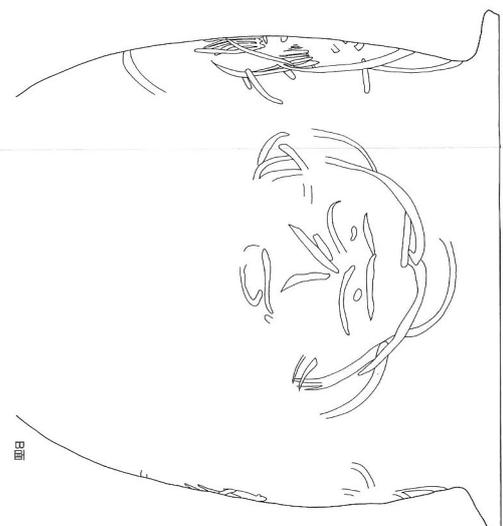
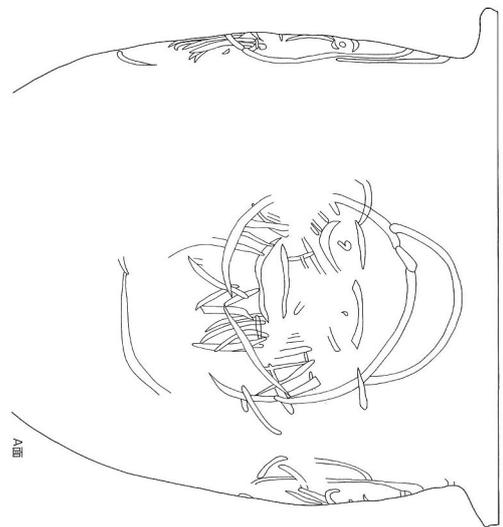
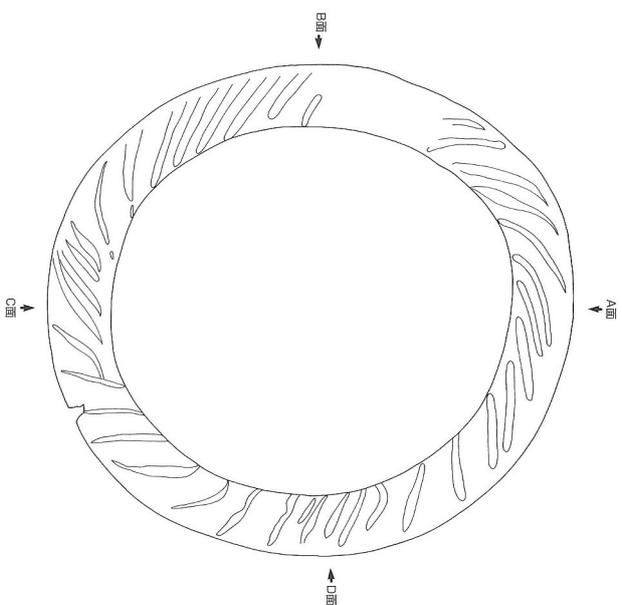
B面

C面

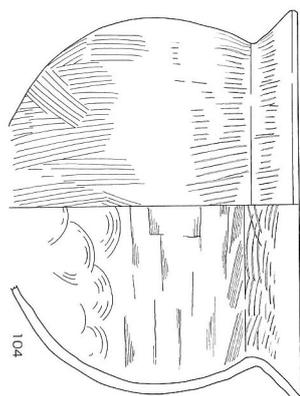
第29図 20流路出土遺物 人面墨書土器〔5〕



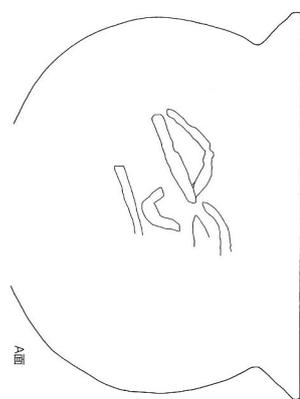
第30図 20流路出土遺物 人面墨書土器〔6〕



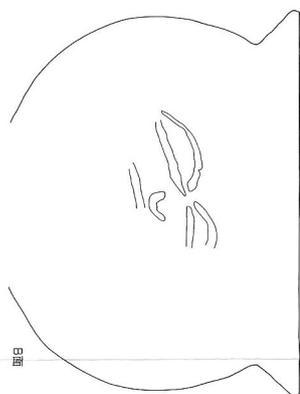
第31图 20流路出土遺物 人面墨書土器 (7)



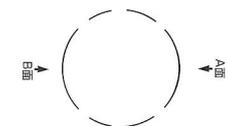
104



A面

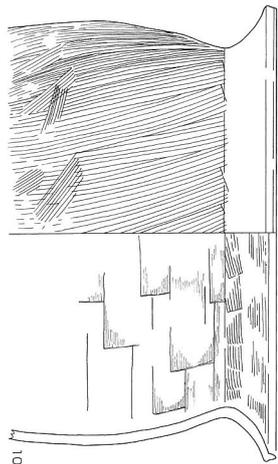


B面

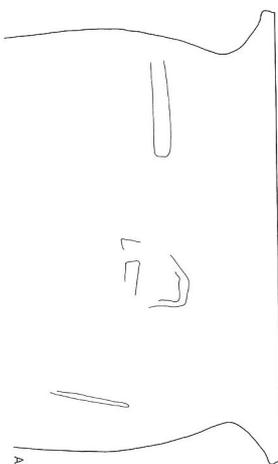


A面

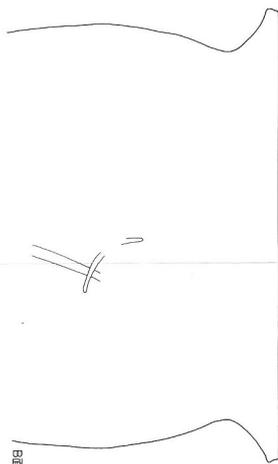
B面



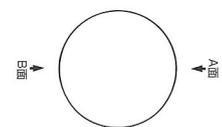
105



A面

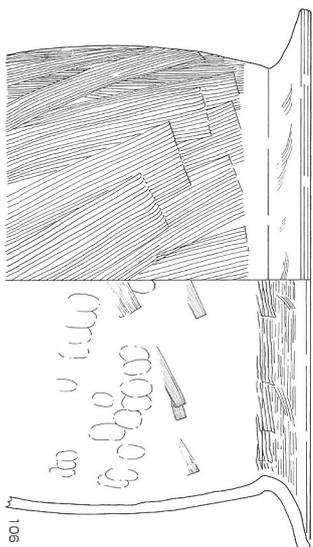


B面

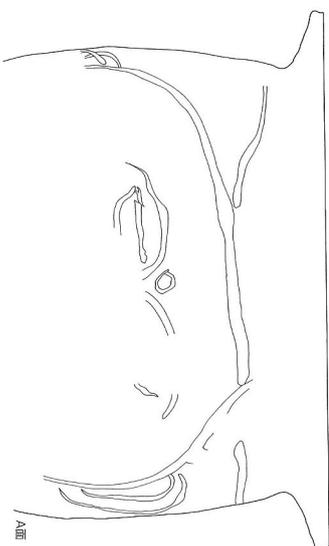


A面

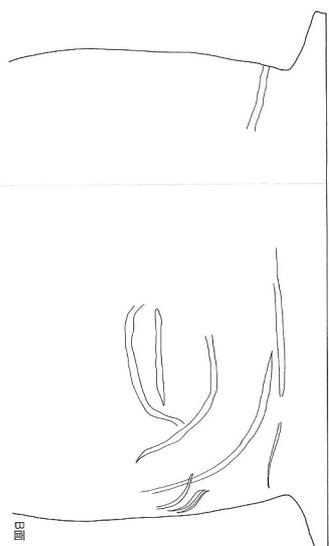
B面



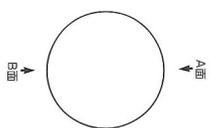
106



A面



B面



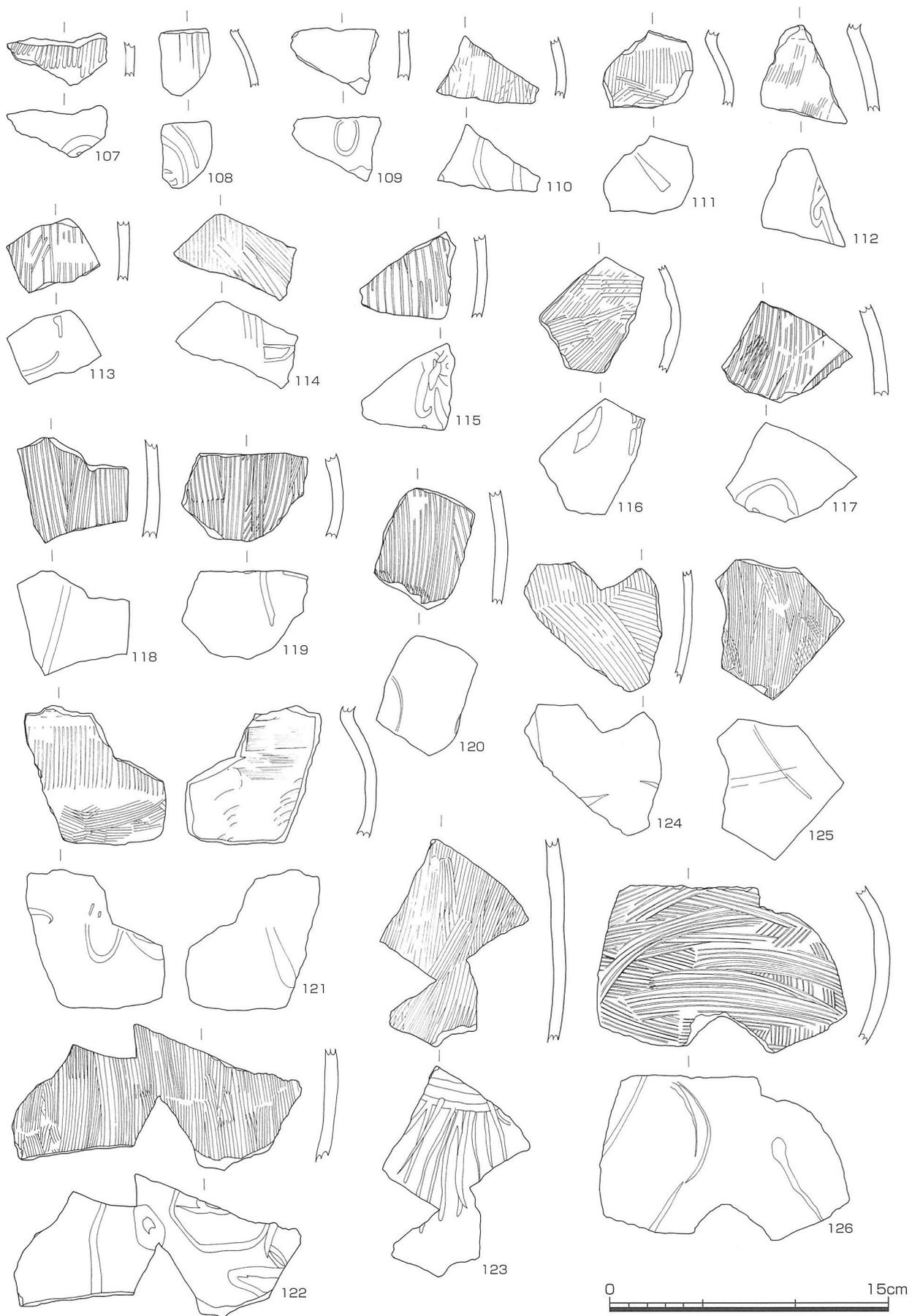
A面

B面



1.5cm

第32图 20流路出土遺物 人面墨書土器 (8)



第33图 20流路出土遺物 人面墨書土器〔9〕

ないため、単なる墨書面として報告する。

(第31図-103)は長胴の甕である。体部外面に4面の人面墨書、口縁部内面に線描きの墨書が認められる。人面は均等に割付けられており、他の個体に比較して綿密に描き込まれているのが特徴である。顔の輪郭、点で黒目を表現する目、ハの字に開く鼻筋、口と豊かな顎鬚は4面ともに共通する表現法である。頭部上方には、頭髪あるいは被り物を表したものと思われる円弧が描かれている。また、輪郭の両脇には耳の表現か束ねた頭髪と思われる円弧が縦に描かれる。口縁部内面は斜めの直線が規則的にほぼ平行に描かれている。

(第32図-104)は球胴の甕である。口径21.4cmと球胴甕では最大であり、唯一分類枠から外れる個体である。残存率は接合しない2片で約3割である。人面墨書はそれぞれの破片に1面ずつ、計2面認められる。人面は目、鼻、口のみでシンプルに表現されており、右上がりに描かれているのが特徴である。

(第32図-105)は長胴の甕である。体部外面に直線と円弧状の墨書が認められる。墨書面は表裏の2面を設定しているが、これは単に墨書の認められる部分が2面にまとまっただけに過ぎず、描画の単位ではない。確認しうる限りの描画では、人面とは考えにくい、何を表現したものかは不明である。

(第32図-106)は長胴の甕である。体部外面に2面の人面墨書が認められる。人面は顔の輪郭を円形に大きく描き、両脇には耳の表現と思われる縦方向の2重の円弧が認められる。内部には眉と目尻がやや吊り上った目が描かれる。A面の眉間には白毫を思わせる小さな円が描かれており、この個体の大きな特徴となっている。仏を表したものであろうか。鼻から下部に関しては残存しないため不明である。

#### 墨書破片 (第33図)

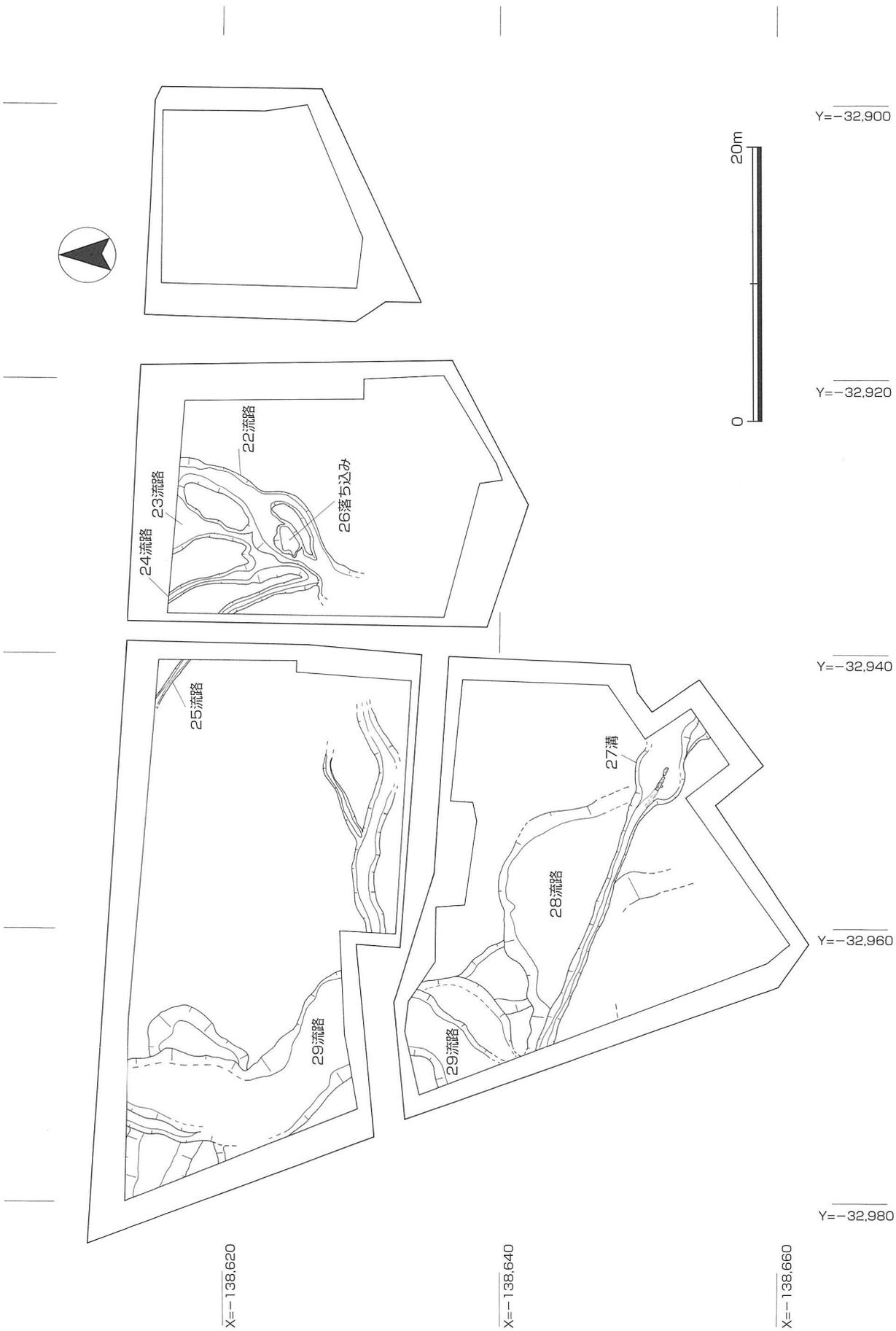
墨書が認められる土器片は20点以上を数え、器種は全て土師器甕である。刷毛目の方向から向きを推測した。(107・108・117)は小さめの円弧が認められ、目あるいは眉であると思われる。縦方向の刷毛目が主体となっていることから体部上方の破片と思われる。(112・115)の縦方向の墨書は耳の表現であると思われる。(121)は外面の刷毛目方向の変化と、内面の横方向の刷毛目とタタキ当て具痕から、体部中央の破片であると思われる。内面に墨書が認められるのが特徴であるが、体部内面に墨書が認められるのはこの破片のみであることから、描画目的によるものとは考えにくく、口縁部内面への描画の際に墨汁が飛んだものであろうと推測される。(122)は顔の輪郭と目、鼻、口の墨書が認められ、明確に人面と判断できる。(123)は口と髭を表現したものである。

#### \*21溝

21溝は20流路の約1m西側に位置し、流路と平行する軸を持つ。幅45～90cm、深さは30cmを測る。埋土は上下2層に分かれるが、上層は細礫を含む灰色シルト混じり細砂、下層は黄灰色細砂であり、共に砂質が強い。埋土下層の状況から溝には流れがあったものと考えられる。

溝の南東端からは土師器の杯(第21・22図-69)が出土している。胎土は粗く砂粒が目立ち、内外面ともヨコナデを施す。この遺物から、20流路と21溝は併存していたものと判断した。

溝の性格としては20流路との関連が強いものと考えられる。近接し、さらに軸を同じくすることから密接に関係していたことは間違いないと、下流においてシガラミが検出されていることも合わせて考慮すると、水量調節や取水など20流路の側溝的役割を担っていた可能性が考えられる。



X=-138,620

X=-138,640

X=-138,660

Y=-32,900

Y=-32,920

Y=-32,940

Y=-32,960

Y=-32,980

第34図 第6面平面図

## 第6遺構面（第34図）

第6面の検出遺構は自然流路・溝・落ち込みである。確実に人為的な遺構と考えられるものは5区南東から北西に向けて直線的に伸びる27溝のみである。この溝は讚良郡条里遺跡（その3）で検出された溝23に繋がるものとみられる。

遺構内の遺物は、出土量に差が認められる。3区（東）で検出した22・23流路、26落ち込み、27溝から弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての遺物が多く出土した。また、木製品として腰掛の座板や導水管とみられる木樋が出土している。

## 第6面遺構（第35図）

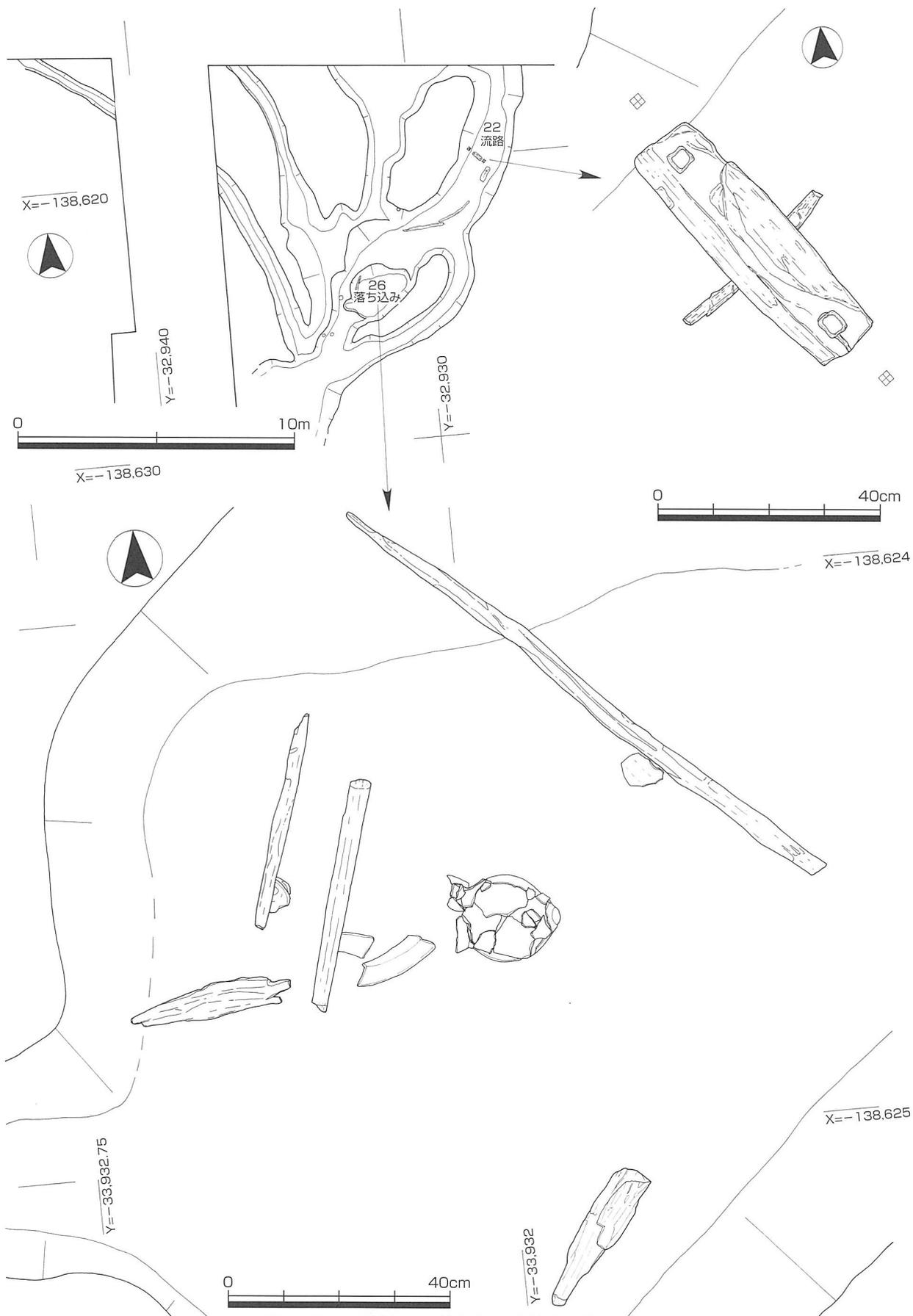
### \*22・23流路

3区で検出した22・23流路は南から北方向に流れを持つ自然流路である。北側は第5面20流路に切られるため、流れ込んできた方向は不明である。深さは22流路の方が深く、最深部で80cmを測る。検出状況からは2本の流路の埋土に違いはみられず、切り合い関係は判明しなかった。細礫を多く含む細砂～粗砂が主な埋土であり、ラミナが顕著に確認できることから、強い流れがあったものと考えられる。22流路は3区（東）北端部では西方に曲がっており再び23流路と合流する。

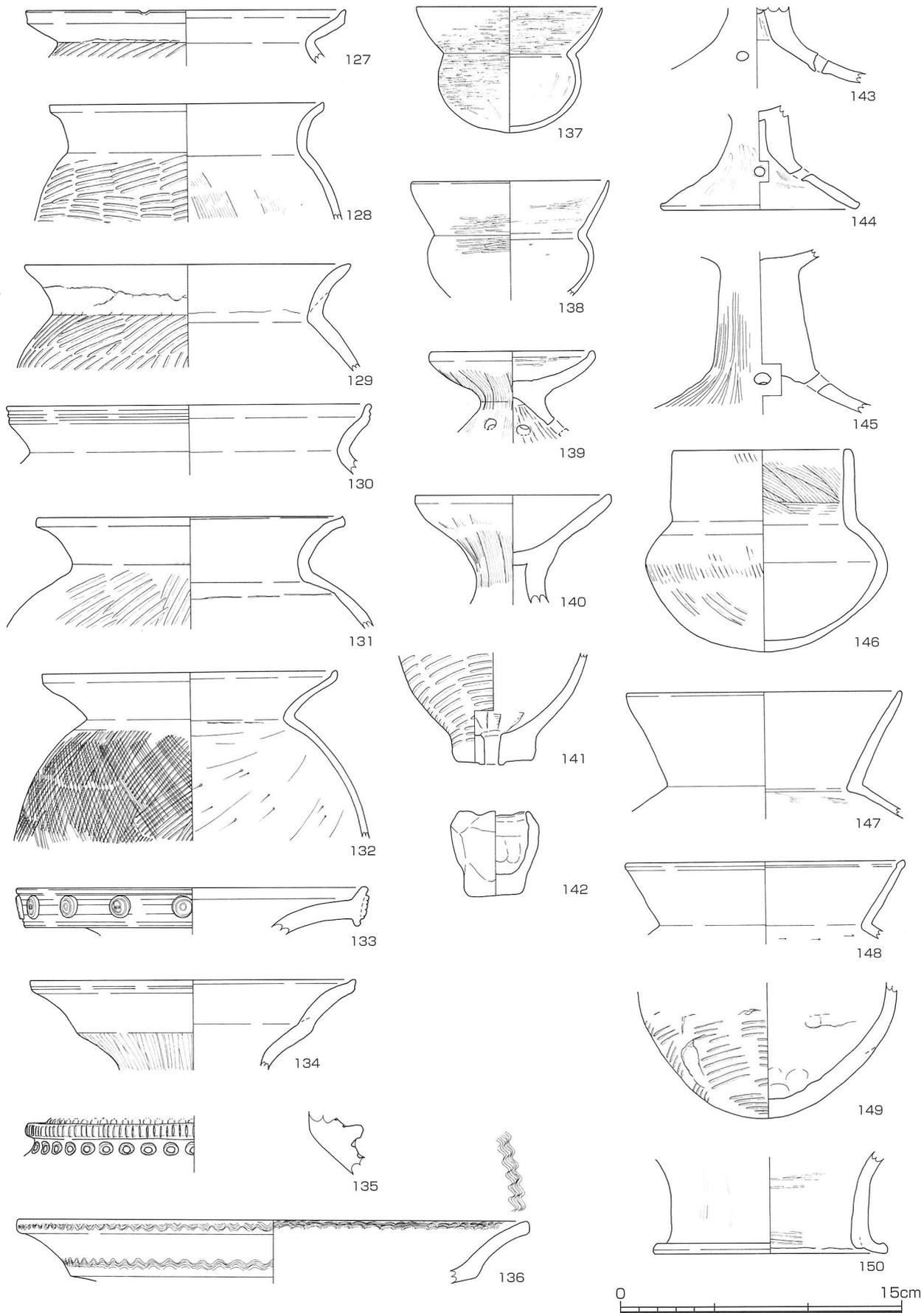
## 22・23流路出土遺物（第36・37図）

22・23流路からの出土遺物は、土器、木製品、石器であり、出土量は整理箱3箱である。時期は、弥生時代末～古墳時代前期であり、庄内期～布留期にかけての古式土師器が多く出土している。器種は甕が最も多く、次いで壺が多い。また、特筆すべき遺物として、祭祀関連遺物と考えられる小形精製土器やミニチュア土器も出土している。

（第36図-127～131）は甕である。体部に右上がりの単位の粗い平行タタキが認められ、やや長胴になることからV様式系の甕であると思われる。127は口縁端部に棒を押し付けたような小さな凹みが認められる。131は頸部の屈曲が強く、体部は他個体と比較して球胴化が進んでおり、新しい様相を呈する。（第36図-132）は庄内式甕である。体部外面は右上がりの極細のタタキを施し、後に斜め方向の刷毛目調整を施す。内面は頸部屈曲部から体部にかけて横から斜め方向にヘラケズリを行い、器壁を薄く削り上げる。口縁部はやや外反気味に立ち上がり端部をつまみ上げている。胎土には角閃石、黒雲母を多く含む。（第36図-133）は広口壺の口縁部である。外面に円形竹管浮文を貼り付ける。（第36図-135）は加飾された壺の肩部と思われる。細かい刻みを持つ突帯を水平に巡らし、突帯に沿って竹管文を上下に施文する。上の竹管文は半裁竹管文を2つ組み合わせて円形にしている。（第36図-137・138）は小形丸底壺である。内外面ともに横方向に丁寧なヘラミガキを施す。器壁は薄く、精製された胎土を持つ。（第36図-139）は小形器台である。外面は縦方向の刷毛目調整が認められ、脚部には透孔を穿つ。内面は横方向のヘラミガキを施す。（第36図-141）は有孔鉢である。外面は右上がりの平行タタキ、底部内面には刷毛目調整が認められる。底部中央に焼成前の穿孔がみられ、外面に盛り上がっていることから内側から穿孔したのと考えられる。（第36図-142）は完形のミニチュア土器である。手捏ねで粗く造られており、指頭圧痕が明瞭に認められる。（第36図-143～145）は高杯の脚部である。143は脚端部まで残存していないが、裾が大きく広がる椀形高杯であると思われる。144・145には縦方向のヘラミガキが認められる。（第36図-146・147）は直口壺である。146の体部外面には上半部が縦方向の刷毛目調整、下半部から丸底



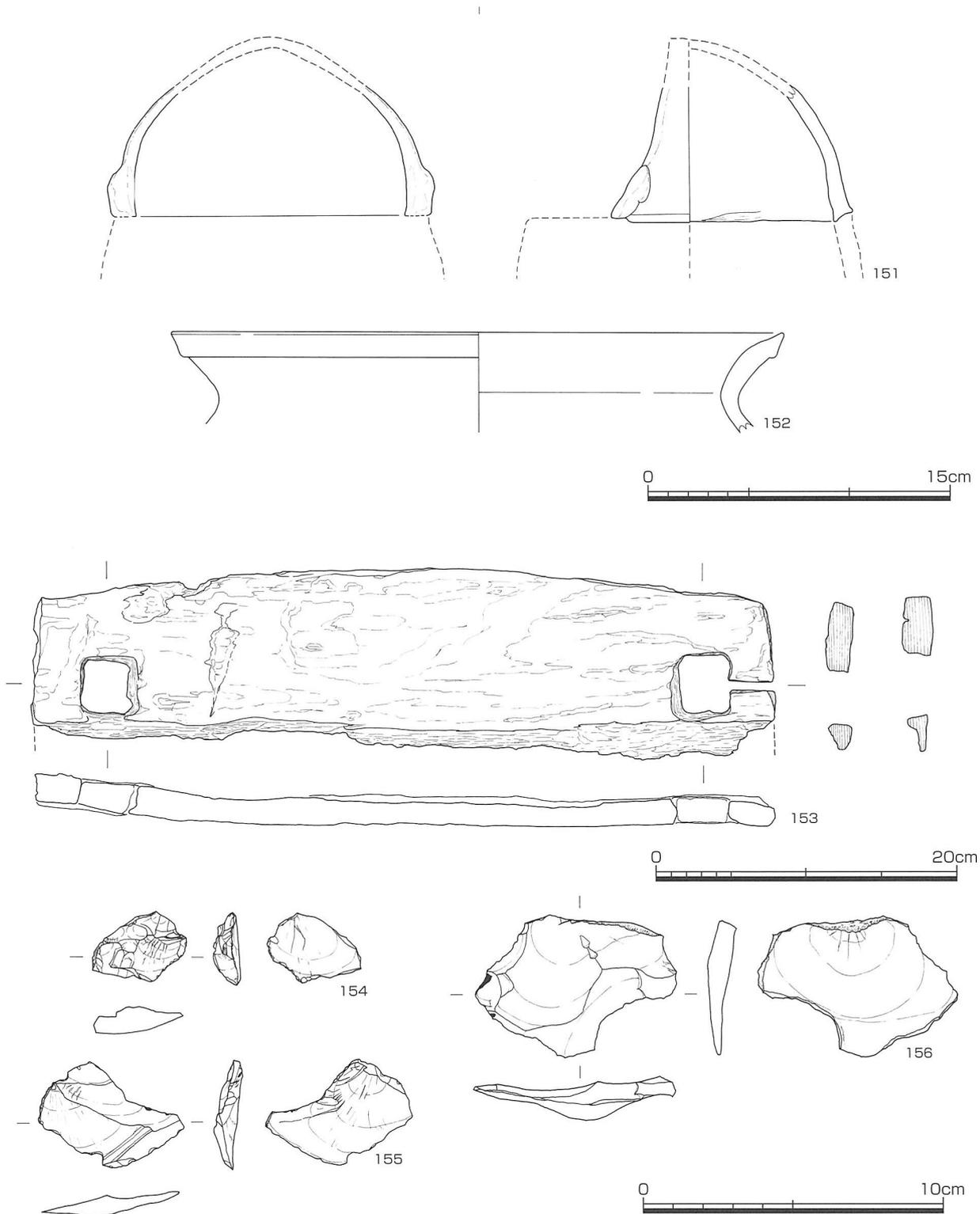
第35図 22流路・26落ち込み遺物出土状況図



第36図 22・23流路出土遺物〔1〕

の底部にかけてはヘラケズリが認められる。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は水平な面取りがなされる。内面は横から斜め方向の刷毛目調整が認められる。全体的に丁寧な作りの壺である。(第36図-148)は布留式甕である。頸部から体部にかけての内面に横方向のヘラケズリが認められ、口縁端部は内側に肥厚する。

(第37図-151)は手焙形土器の覆い部であると思われる。(第37図-153)は木製品である。腰掛の座板



第37図 22・23流路出土遺物 [2]

であると思われる。表面の摩滅が激しく面取り等の加工痕は認められなかった。長方形の板材を使用し両側縁は外湾する。両端部には正方形の穿孔がなされており、脚部を組み合わせるためのほぞ穴と思われる。向かって右側のほぞ穴には切り欠きが認められる。木目に対して直交していることから意図的に加工されたものと思われるが、この切り欠きの役割は不明である。

(第37図-154～156) はサヌカイト剥片である。

**\*24・25流路 (第34図)**

24・25流路は共に22・23流路に切られる溝である。微砂～細砂が主な埋土である。遺物が出土していないため時期は不明である。

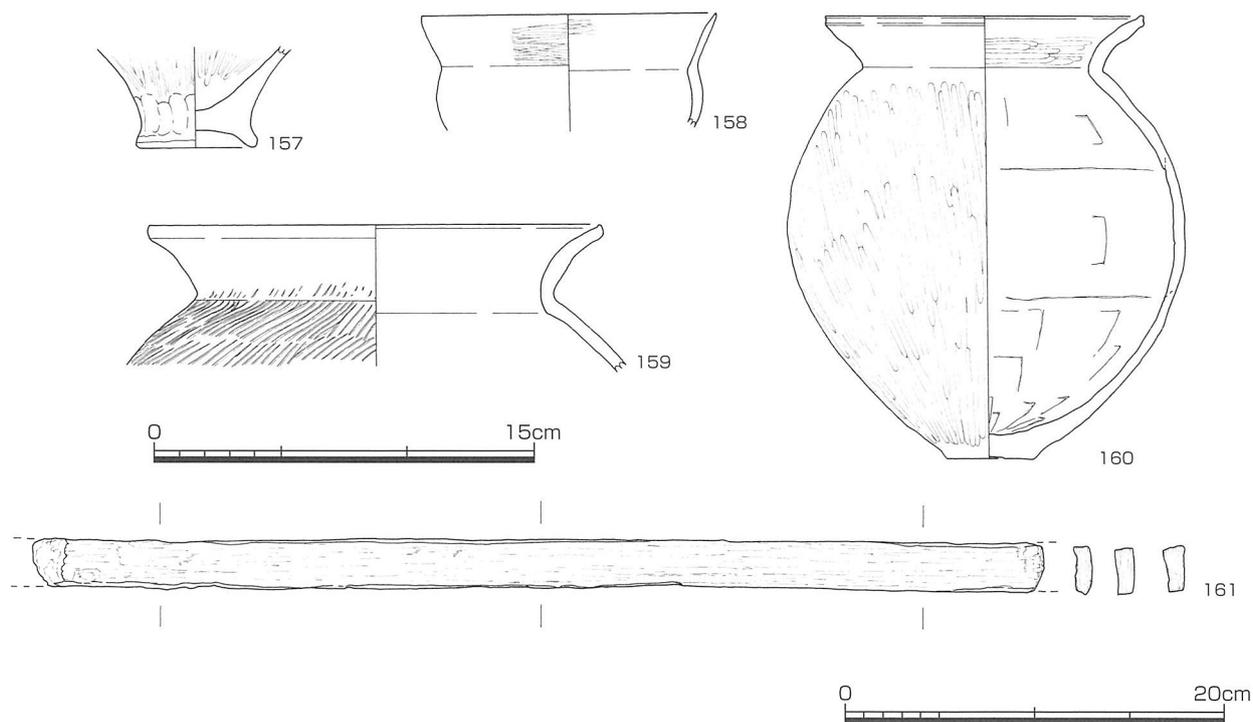
**\*26落ち込み (第35図)**

26落ち込みは22流路内の遺構である。流路底において、細礫を含んだ粗砂の広がりを検出したため、落ち込みとして区別した。長径2.7m、短径1.8mのほぼ楕円形で、深さは60cmを測る。

出土遺物は土師器と木片であり、時期は古墳時代前期である。埋土の状況や出土遺物から考えて、22流路との時期差は無いものと思われ、22流路と26落ち込みは一連の遺構であると考えられる。

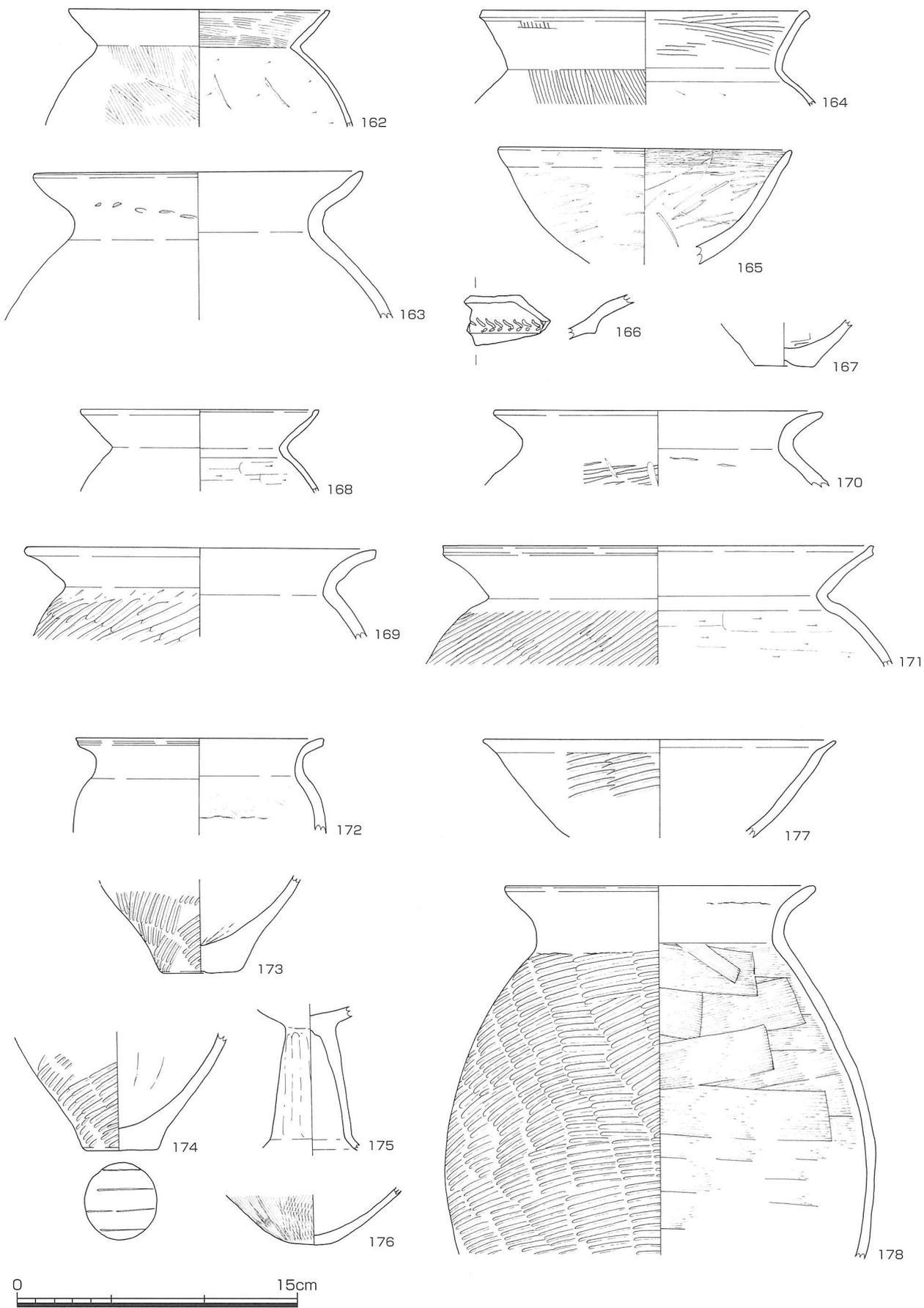
**26落ち込み出土遺物 (第38図)**

(第38図-157) は土師器の鉢底部である。内外面とも縦方向のヘラミガキを施す。(第38図-158) は土師器の小形丸底壺である。体部は摩滅が激しいが、口縁部の内外面に横方向のヘラミガキが確認できる。(第38図-159) は土師器の甕である。体部に右上がりのタタキを施し、胎土に角閃石を含む生駒西麓産の土器である。(第38図-160) はほぼ完形の土師器の甕である。外面は底部から頸部にかけて縦方向のヘラ



第38図 26落ち込み出土遺物





第40図 27溝出土遺物

ロ・ハは一方の端が鋭くなっている板状の材で、ロの側面においては面取り痕が確認できた。イの南側面を支えているような状態で出土しており、イを固定する目的で打たれた木杭である可能性がある。

ニ・ホは共に後部の樋本体である。ニの断面は逆U字型であり板状材であるホに覆い被さるような状態で出土した。ニの取り上げ時に割れた側面の一部と思われる破片がすぐ脇から数点出土しており、頭頂部の高さもイに較べ7 cm程低いことから、ニは土圧により押し潰されたものと思われる。樹種鑑定の結果イ・ロ・ハはクリ、ニ・ホはヤブツバキであった。

溝と木樋の続きを確認する為に、5区を一部拡張して追加調査を実施した。溝の延長方向に池状の広がりを検出したが、溝本体と木樋の続きは確認できなかった。上流側で木樋に接続する溝を検出できなかったことから、真っ直ぐに掘り込まれる溝は木樋を起点とするものと思われる。このことから考えると、木樋の周辺の広がりは存在しなかった可能性がある。基盤層も砂であったため間違えた検出を行い、大きく掘り過ぎた可能性が考えられる。一方、木樋より南東部の広がりは、基盤層がシルト層であったため正確に検出することができた。広い溝幅を保ちながら拡張区北東壁にかかっており、さらに南東方向に続いている。拡張区の池部からは、溝部と比較して多くの遺物が出土している。

以上のように27溝は、木樋を挟んで上流側が池状を、下流側が溝状を呈する。池部はさらに上流から流れ込んできた水を溜める役割、溝部は北西側へ水を供給するための水路であったと思われ、木樋は池と溝とを隔てながら接続する役割を果たしていたものと推察される。

## 27溝出土遺物（第40図）

出土遺物は土器、木製品であり、時期は弥生時代末～古墳時代前期である。器種は大半が甕であるが、少数ながら高杯や鉢も存在する。

(162・168)は布留式甕である。168は精良な胎土を持つ。頸部から体部にかけては内面に横方向のヘラケズリにより、器壁を薄く削り上げる。頸部は特に強く削られるため明瞭な段が残る。口縁部は内湾気味に立ち上がり口縁端部は内側に肥厚する。(163)は甕である。内外面とも摩滅が激しく調整は確認できないが、口縁部外面に爪形と思われる圧痕が認められる。圧痕は横向きに並んでおり、口縁部の成形時の痕跡と推測される。

(165・177)は小形鉢である。内湾しながら立ち上がり、口縁端部から約1 cmのところで弱く屈曲し、外側に開く。165は摩滅が激しいものの、内外面にヘラミガキが認められる。内面は、口縁端部の近くで横方向のヘラミガキが密になる。

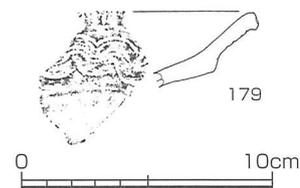
(171)は庄内式甕である。体部外面は右上がりの極細のタタキを施す。内面は頸部屈曲部から体部にかけて、横方向にヘラケズリを行い、器壁を薄く削り上げる。口縁部はやや外反気味に立ち上がり端部をつまみ上げる。つまみ上げにより外面には面が形成され、中央に凹線状の凹みが巡る。胎土には角閃石、黒雲母を多く含む。(175)は高杯の脚部である。脚柱は中空で薄く外面は縦方向のヘラナデによる面取りが認められる。(176)は庄内式甕の底部である。刷毛目調整により底部は尖底気味の丸底を呈し、胎土には角閃石を含む。外面には煤の付着が顕著である。煮沸容器として使用され、繰り返し火にかけられていたことが窺われる。

## \*28・29流路（第34図）

28・29流路は5区北側から4区（北）に蛇行しながら北流する流路である。28流路は5区北部で大き

く西へ曲がり、調査区外へ出る。そのすぐ北側には29流路があり、4区（北）を通過して北に抜ける。この2本の流路は、埋土の状況が酷似することから、同じ流路が流れを変えたものと考えられる。しかし、連続せず直接の切り合いも持たないため関係は判然としない。しかし、調査区内で同類とみられる流路が複数切り合っており、一連の流路群が蛇行を繰り返していたことがわかる。また、28流路は木樋の出土した27溝に切られており、より古い段階の遺構である。

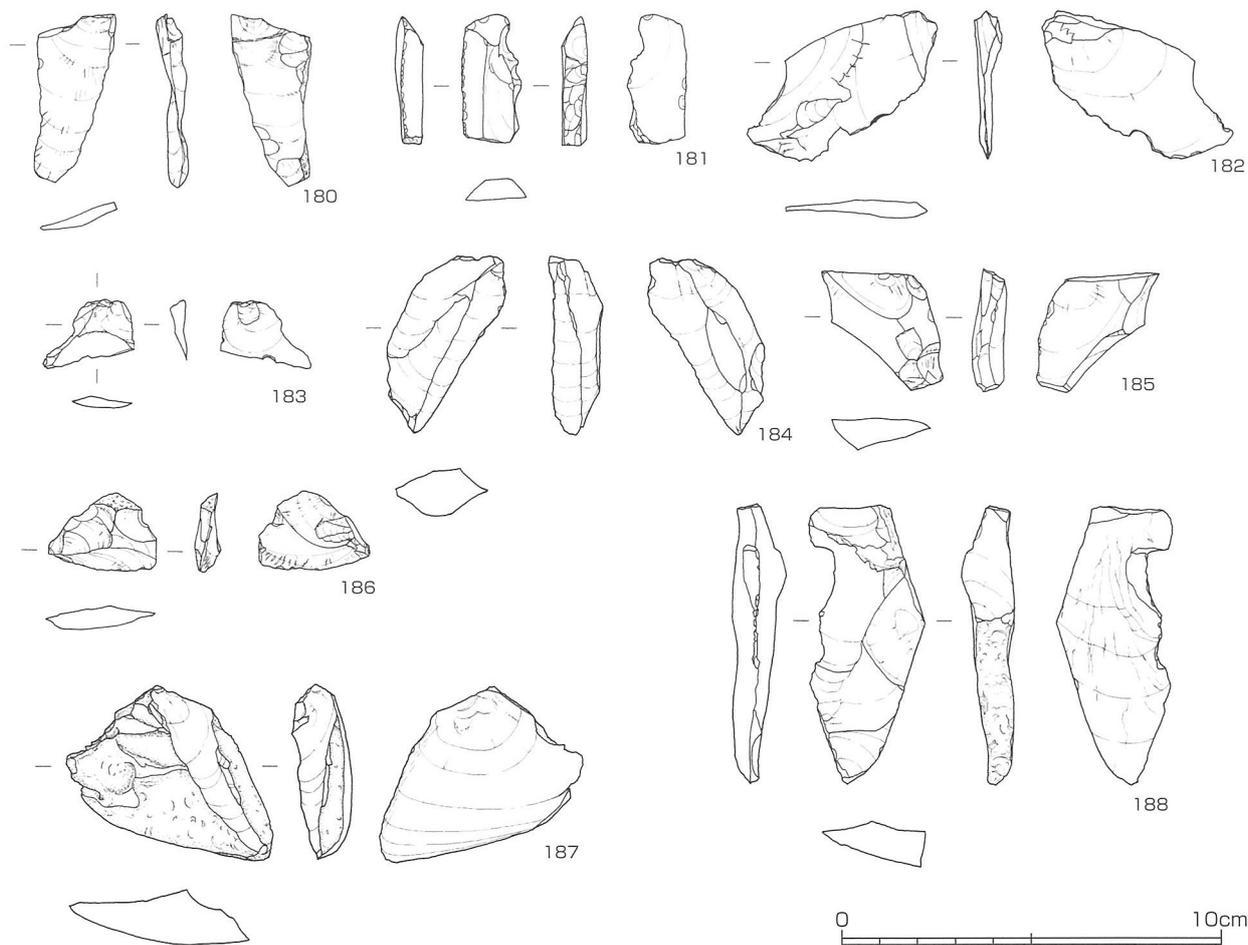
28流路からは土器、石器、木片が出土している。(第41図-179)は高杯か複合口縁壺の口縁部と思われる。口縁端部外側に縦方向の刻み目が認められ、外面に特徴的な櫛回転文を施文している。4本の歯を持つ櫛状の原体を90度ずつ、上端と下端を中心とし、交互に回転させて施文している。その他には外面に極細のタタキが認められ、角閃石を含む胎土を持つ庄内式甕の体部破片が出土している。



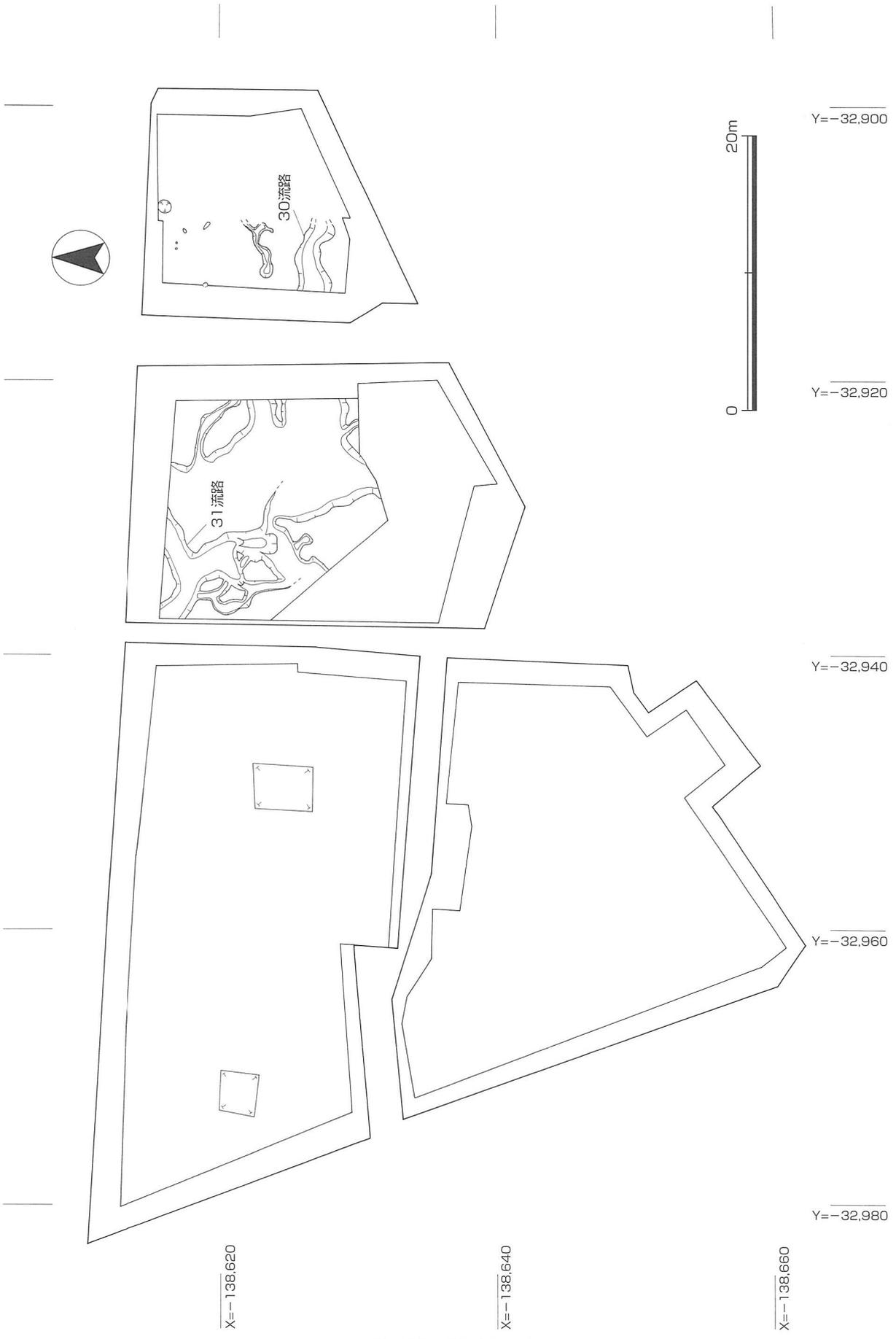
第41図 28流路出土遺物

石器はすべてサヌカイト製であり、大半が剥片である。(第42図-181)は加工痕のある剥片である。1方の側縁に剥離加工が認められ、ナイフ形石器の可能性もある。(第42図-186)は1次剥離後の加工が認められる。

29流路の出土遺物は土器、石器、木片であるが、遺物量は28流路に比較してはるかに少ない。土器は全て縄文土器であり、基盤層から洗い出された遺物である可能性が高い。出土遺物からは29流路の方が28流路より古いものと考えられる。



第42図 28・29流路出土石器



第43図 第7面平面図

## 第7遺構面（第43図・写真1）

第7面は2-2区と3区東においてのみ調査を行った。検出遺構は流路、ピットであるが、いずれにも人為的な形跡は認められない。

ピットは2-2区において西壁側溝にかかる形で検出した。暗色の埋土であるが、基盤層との土質に大差がない。また、肩近くが染みのように広がり不明瞭である。第7面のピットはこれ1基のみであり、遺物は出土していない。

30・31流路は検出状況からそれぞれ流入方向が異なるように思われる。高宮の丘陵地から流れ込んでくる31流路と、第5面の古代流路のように生駒山地西麓から南東～北西方向にかけて流れたと考えられる30流路の2本を確認した。流路の最下層からは縄文土器片が少量ながら出土しているが、この場所に設定した下層確認トレンチからも同様の土器が出土していることから、流れにより基盤層から洗い出されたものである可能性が高いと考える。

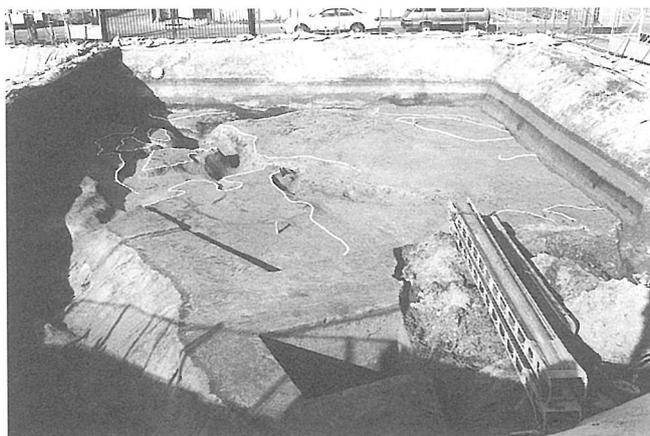


写真1 3区（東）第7面 全景（南から）

## 下層確認トレンチの調査（第44図）

小路遺跡（その2）では、第1～7面まで計7面の面調査を行った。出土遺物中には縄文土器や石器が散見される。20・28・29・30・31流路など、基盤層を深くまで抉り込む流路からの出土数が多く、これらの遺物は基盤層から洗い出されたものと考えられる。

上記のことから各調査区で最終面調査が終了した後、下層確認のためのトレンチを設定し1.5m程度の掘削を実施した。トレンチ数は11箇所を数える。砂とシルトの互層の堆積が至るところで認められ、流路が激しく流れ替えていたものと考えられる。

トレンチからは多数の縄文土器や石器が出土しており、流路内からの出土遺物が大半を占める。縄文土器は40点余り出土し、晩期の滋賀里式から前期の北白川下層Ⅱa式にかけて広い時期幅が認められる。前期の土器は残存状態が良好で文様も明瞭に確認でき、摩滅もほとんど受けていないことから、近隣に帰属するものと推測できる。数量的にも最も充実しており、北白川下層Ⅲ式が15点、北白川下層Ⅱ式が7点を数える。これに対して中期以降の土器は細片が多く、激しく摩滅したものが多い。

遺物はその時期と形式から、晩期～前期末（大歳山式以降）、前期末（北白川下層Ⅲ式）、前期（北白川下層Ⅱ式）の3種に分類して掲載した。また、上面の遺構から出土した縄文土器も本項にまとめて分類している。

## 晩期～前期末（大歳山式以降）（第45図）

(189・194) は晩期に属する深鉢である。共にミガキ、ナデ調整が認められる。

(190) は後期に属する深鉢である。外面にミガキ調整が認められ、沈線を横方向に2条平行に巡らせている。下部には湾曲しながらハの字状に開く沈線が認められるが途中で切れており、先の文様は不明である。

(191～193) は後期、中津式に属するとみられる深鉢である。LR・RL縄文を地文とし、凹線を巡ら

せた後、縄文を摩り消す。

(198～201)は中期、北白川C式に属するとみられる深鉢の口縁部である。198は沈線と透かし穴が認められる。199は口縁形状に沿って凹線を巡らせる。200は波状口縁を持ち、口縁形状に沿って沈線を巡らせる。201は沈線に加えて、刺突文が認められる。

(203)は前期末～中期初頭、鷹島式に属するとみられる深鉢である。RL斜縄文を施す。

(202・204)は前期末、大歳山式に属するとみられる深鉢である。204はRL縄文を地文とし、V字状の工具による、 $\Sigma$ 状の押し引き凸帯が認められる。内面は指頭圧痕、爪圧痕が、ナデにより丁寧に消されている。

#### 前期末（北白川下層Ⅲ式）（第46図）

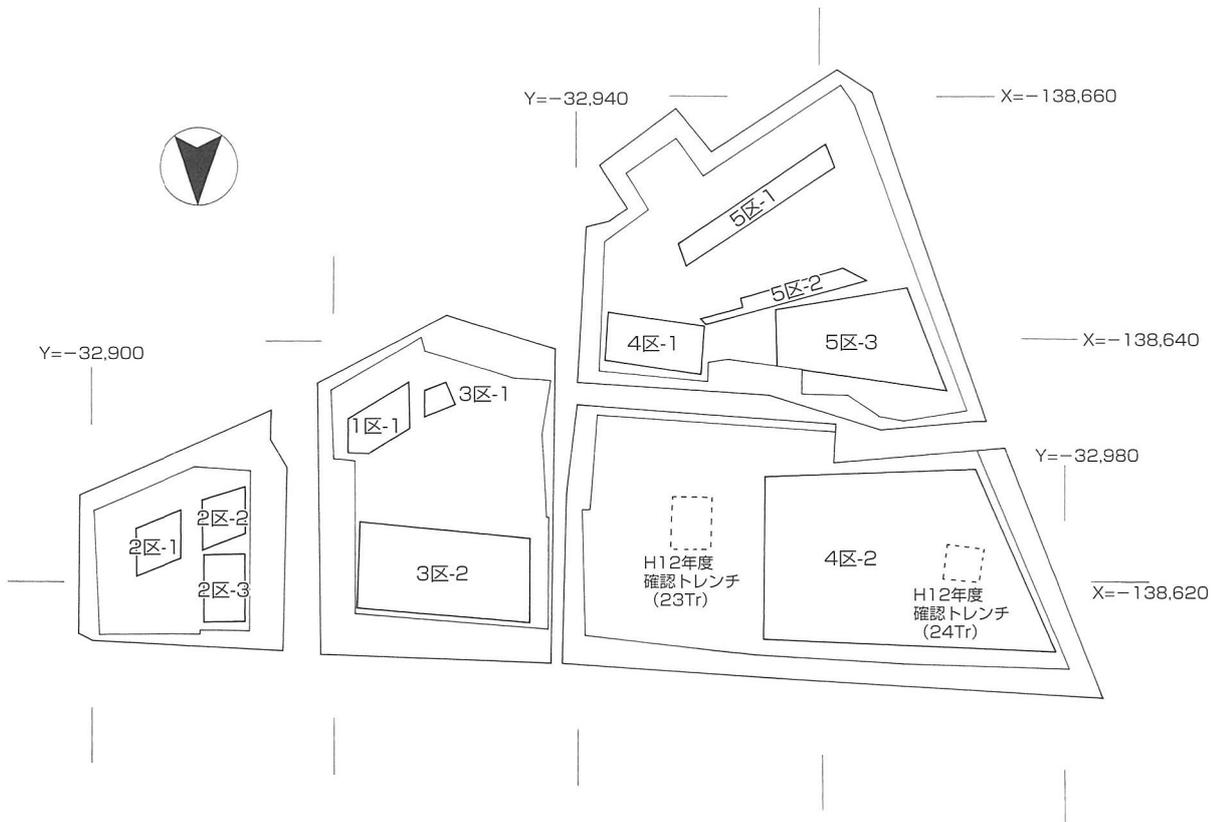
北白川下層Ⅲ式は、LR・RL縄文を地文とし、貼り付け凸帯上半を半裁竹管で押し引く特徴を持つ。貼り付け凸帯上半を凸帯幅よりも狭い竹管で押し引くため、凸帯側縁には線状に胎土のはみ出しが生じる。

(205)は深鉢の口縁部である。外面はRL縄文を地文とし、竹管押し引き凸帯が認められる。口縁端部から外面にかけて短い凸帯を縦方向に貼り付け、上面を竹管で撫でる。内面には爪圧痕が認められる。

(206)は深鉢の口縁部である。LR・RL縄文を地文とする。口縁端部を内側に面取りし、LR縄文を施す。

(207)は深鉢の胴部である。RL縄文を地文とし、竹管押し引き凸帯が3条認められる。

(208)は深鉢の胴部である。LR縄文を地文とし、平行な3条の貼り付け凸帯が認められる。中央の凸帯上にRあるいはRL縄文を施す。



第44図 下層確認トレンチ配置図

(209) は深鉢の胴部である。LR・RL縄文を地文とし、平行な3条の竹管押し引き凸帯が認められる。

(210) は深鉢の胴部である。地文は摩滅のため不明である。平行な3条の竹管押し引き凸帯が認められる。内面は指頭圧痕が顕著に認められる。

(211) は深鉢の口縁～胴部である。比較的大きな破片であり、キャリパー形の口縁形状を確認できる。外面はLR縄文を地文とし、竹管押し引き凸帯が6条認められる。3条で1単位を形成しており、上部3条は平行であるが、下部3条は連弧文を描く。口縁部内面には煤の付着が認められる。

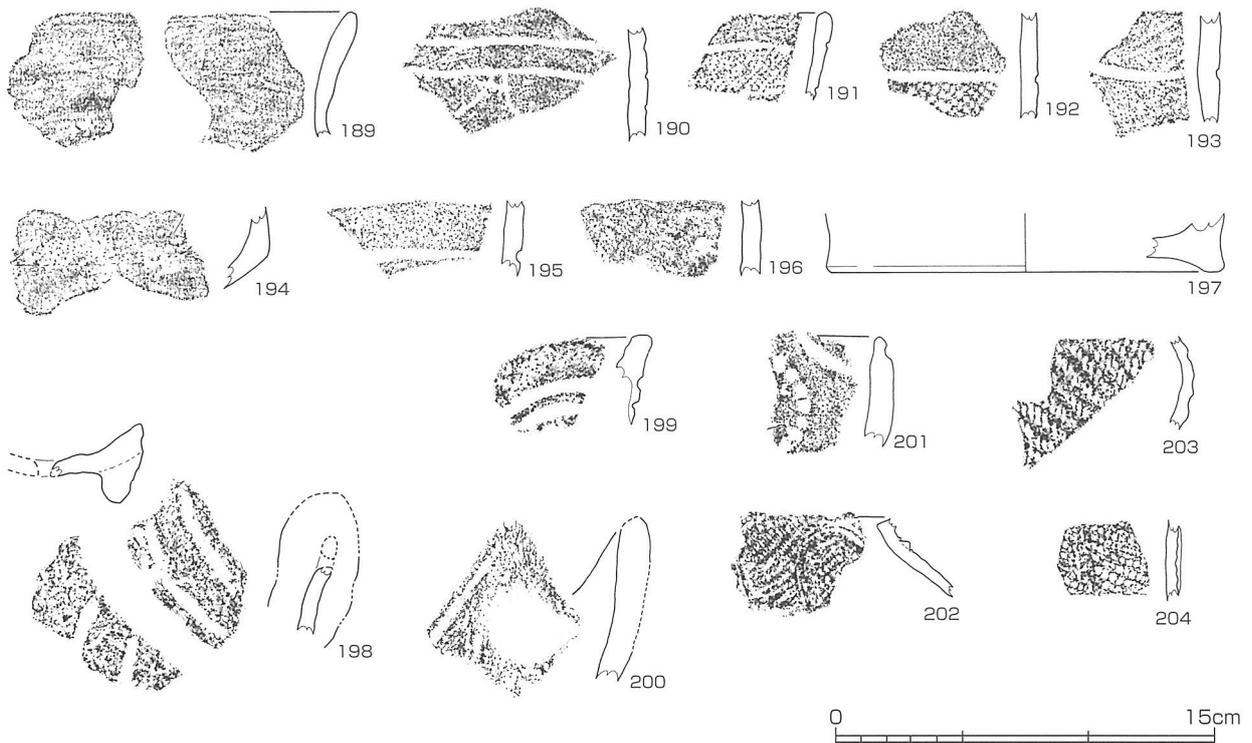
(212) は深鉢の底部である。中央部がやや持ち上がる平底で、側面は上方になるにつれ徐々に開く。外面はLR縄文を地文とし、内面は指頭圧痕が顕著に認められる。特徴的なのは底部に抉りを入れる点であり、底部のシルエットは菊花状を呈する。抉りは押圧によるもので、破片から6箇所確認できるが、全体では8～9箇所には抉りが入れられていたものと推定される。この抉りは深く、内面にも凹凸が現れている。特筆すべきは、底部の形状に沿うように内面に植物が敷かれたような状態で出土していることである。底部破片での出土のために植物遺体が自然に入り込んだのか、意図的に敷かれていたのかは判然としないが、特異な事例であると考えられる。

(213) は深鉢の胴部である。外面はLR縄文の地文とし、竹管押し引き凸帯で連弧文を描く。

(214) は深鉢の胴部である。地文は摩滅のため不明である。凸帯も摩滅のため判然としないが、屈曲部が認められることから連弧文を描いたものと思われる。

(215) は深鉢の口縁部である。LR縄文を地文とし、竹管押し引き凸帯が3条認められる。口縁端部を内側に面取りし、LR縄文を施す。口縁端部外面に押し引き痕が認められることから、口縁端部に沿う形で凸帯を巡らせていたものと思われる。

(216) は深鉢の口縁部である。外面は部分的にRL縄文を施す。口縁端部を内側に面取りし、RL縄文を施す。口縁端部から外面にかけて短い凸帯を縦方向に貼り付け、上面を竹管で撫でる。内面には指頭



第45図 下層確認トレンチ他出土縄文土器（晩期～前期末）



第46図 下層確認トレンチ他出土縄文土器（前期末）

圧痕が認められる。

(217) は深鉢の口縁部である。外面はLR縄文を施し、口縁端部に刻み目が認められる。内面は爪圧痕が顕著に認められる。

(218) は深鉢の底部である。212と同様の挟り込みが5箇所認められ、底部は菊花状を呈する。全体では7箇所挟りが入れられていたものと推定される。この挟りは浅く、内面形状に影響は及ぼさない。

(219・220) は深鉢の胴部である。219は羽状縄文が認められる。220はRL縄文が認められる。

#### 前期（北白川下層Ⅱ式）（第47図）

北白川下層Ⅱ式は、0段多条のLR・RL縄文を地文とするのが特徴である。下層Ⅲ式に比較して、土器内面のナデ調整は丁寧であり、密な胎土を持つ。また、焼成も良好である。

(221) は下層Ⅱb式に属するとみられる深鉢口縁部である。外面はLR縄文の地文を持ち、内面は丁寧なナデ調整が認められる。

(222) は下層Ⅱb式に属するとみられる深鉢口縁部である。外面はRL縄文を地文に持ち、内面は丁寧なナデ調整が認められる。

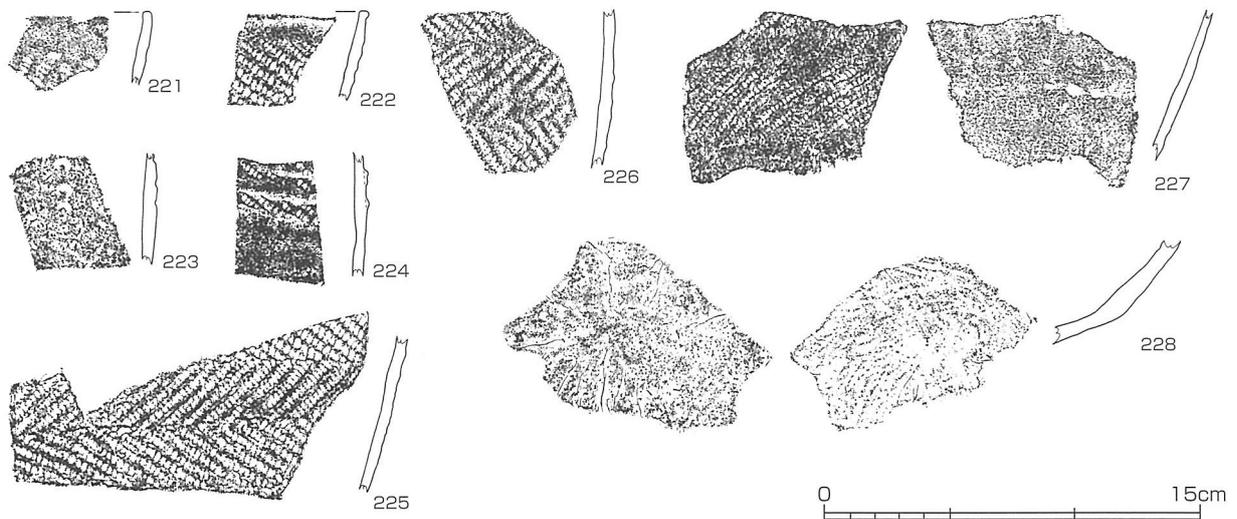
(223) は下層Ⅱa～Ⅱb式に属するとみられる深鉢である。外面に竹管によるC字形爪形文を縦に連続して施文する。

(224) は下層Ⅱc式に属するとみられる深鉢である。外面は平行な2条の貼り付け凸帯が認められ、凸帯上にRL縄文を施す。

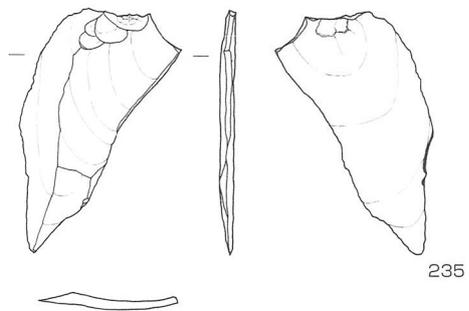
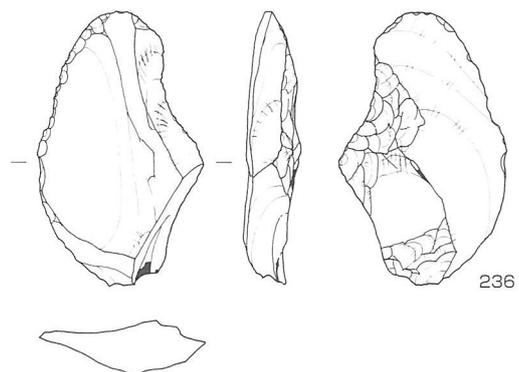
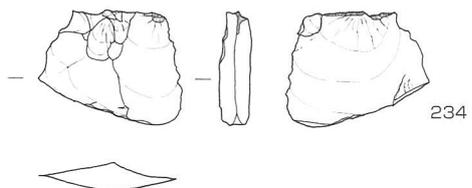
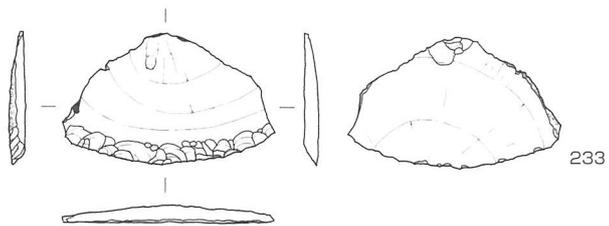
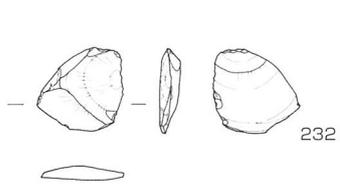
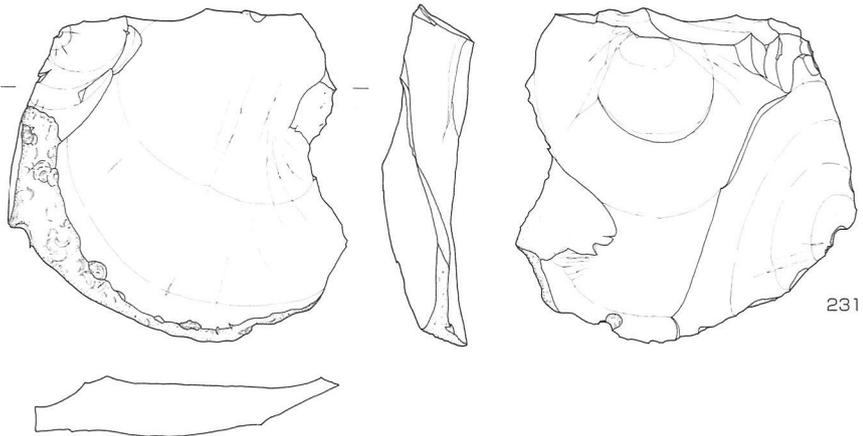
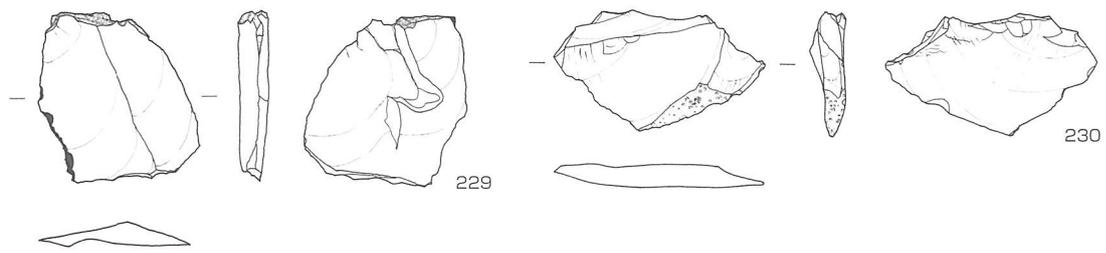
(225・226) は下層Ⅱb～Ⅱc式に属するとみられる深鉢である。外面には0段3本撚りの原体を用いた縄文原体を重複して転がして施文した羽状縄文が認められる。内面は丁寧なナデ調整が認められる。

(227) は深鉢である。間隔の開いたLR縄文が認められる。

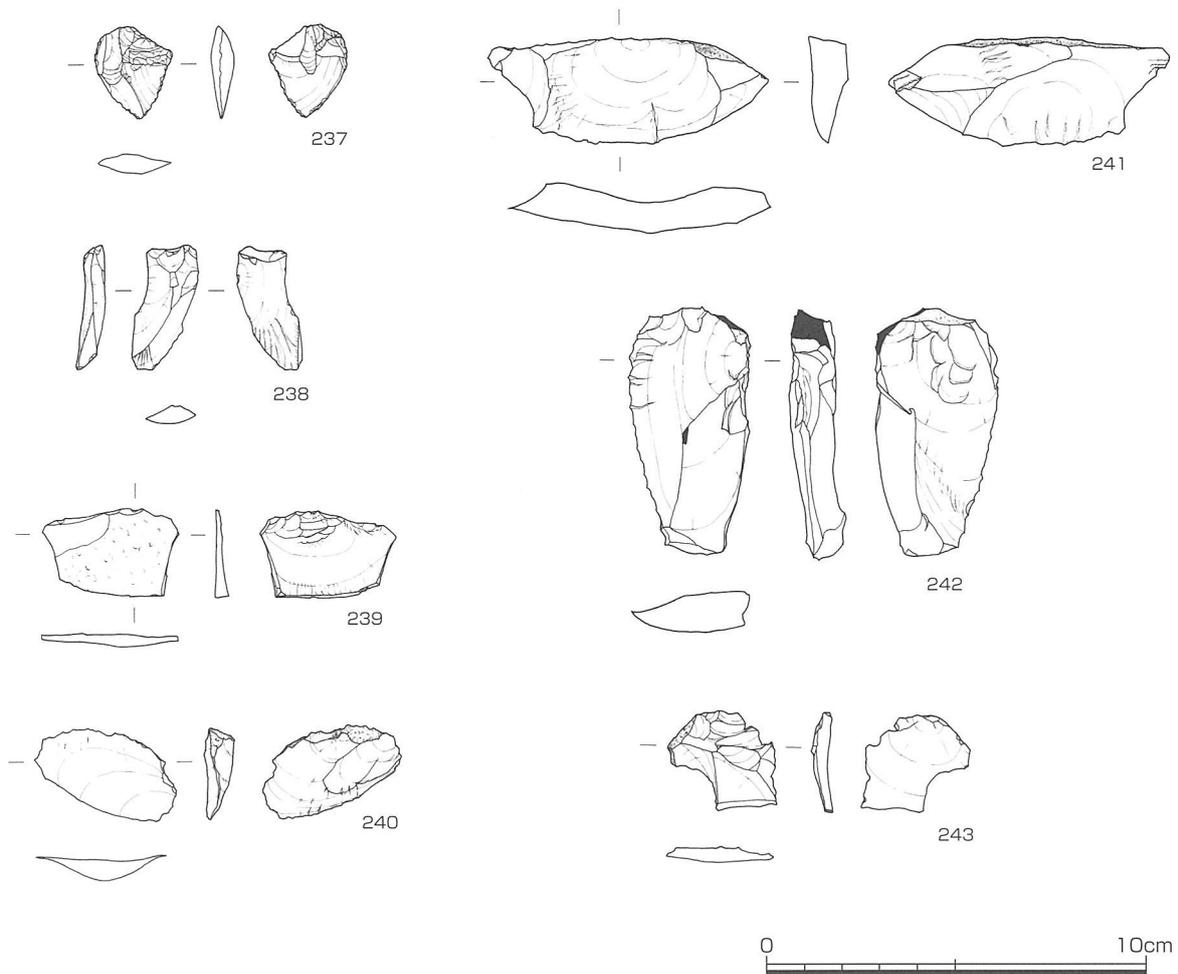
(228) は深鉢の底部付近である。内外面とも条痕が認められる。北白川下層Ⅱ式では無い可能性が考えられるが、前期に属する遺物とみられるため本項に分類した。



第47図 下層確認トレンチ他出土縄文土器（前期）



第48図 下層確認トレンチ他出土石器〔1〕



第49図 下層確認トレンチ他出土石器〔2〕

石器類（第48・49図）

石器類は剥片が大半である。加工痕が見られるなど特徴的な個体のみについて記述を行う。

（231）サヌカイト製の石核である。大型であり、母岩から剥離した段階に近い素材剥片であると思われる。腹面右端部に右方向からの打点があり、これは剥片を割り取った剥離痕と思われる。

（233）はサヌカイト製の搔器である。長軸上の端部に刃部を作り出しており、微細剥離による加工が認められる。

（236）は加工痕が認められるサヌカイト製の剥片である。両側縁に剥離加工がなされ、一方に急斜度調整、逆側は微細剥離が認められる。ナイフ形石器の可能性はある。

（237）はチャート製の剥片である。サヌカイト以外の石器はこの1点のみである。

（241）はサヌカイト製の石核である。剥片を割り取ったとみられる剥離痕が多数認められ、剥片を取り尽した後に廃棄された残核であると思われる。

遺物観察表 (1)

図録番号	掲載番号	器種	残存状態 部位 %	法量 (cm)	調整・施文等	特徴	時期	出土層位、遺構
第100回	1	陶器 碗	口縁 7% 底部 45%	口径: 10.0 高台径: 4.6	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ 外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 底面: 削り出し高台 内: 磨蝕	磨蝕	近世	第3層
第100回	2	陶器 碗	口縁 10%	口径: 11.8	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 内: 磨蝕	磨蝕	近世	第3層
第100回	3	瓦器 筒 (大形)	口縁 10%	口径: 12.2	外: 磨蝕、損傷1箇所 内: 次線1条、磨蝕		13c	第3層
第100回	4	瓦器 筒 (大形)	口縁 8%	口径: 13.2	外: 磨蝕 内: 次線1条、磨蝕へラ削り		13c	第3層
第100回	5	瓦器 筒 (大形)	口縁 70%	口径: 14.2	外: ヨコナズ、磨蝕 内: 次線1条、磨蝕へラ削り			第3層
第100回	6	瓦器 筒	口縁 5%	口径: 13.9	外: 磨蝕 内: 次線1条、磨蝕			第3層
第100回	7	瓦器 筒	口縁 30%	口径: 14.8	外: ヨコナズ、ナズ 内: 次線1条、ヨコナズ、ナズ		9c~(得安京Ⅱ?)	第3層
第100回	8	土師器 杯A	口縁 40%	口径: 11.8 高台径: 4.0	外: 磨蝕、回転ナズ 底面: 削り出し高台 内面: 磨蝕、回転ナズ	磨蝕、削り出し高台、磨蝕	近世 (17c)	第3層
第100回	9	陶器 鉢	口縁 5%	口径: 13.7	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 内: 磨蝕		8c	第3層
第100回	11	須臾器 杯B	口縁 10%	口径: 17.1	外: 磨蝕、回転ナズ、ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c	第3層
第100回	12	須臾器 杯B	底部 15%	高台径: 11.8	外: 磨蝕、回転ナズ、ナズ 内: 磨蝕へラ削り、磨蝕、回転ナズ			第3層
第100回	13	須臾器 杯B	底部 5%	高台径: 8.0	外: (磨蝕)、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ			第3層
第100回	14	須臾器 杯B	口縁 13%	口径: 9.2	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c?	第3層
第100回	15	須臾器 杯B	口縁 10%	口径: 10.8	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 内: 磨蝕、回転ナズ		TK-20B (1-3)	第3層
第100回	16	青磁 碗	口縁 10%	口径: 7.1	外: 磨蝕 内: 磨蝕			第3層
第100回	17	台皿	口縁 10%	口径: 7.1	外: 磨蝕 内: 磨蝕			第3層
第100回	18	須臾器 皿	底部 20%	口径: 6.8	外: 磨蝕、回転ナズ 底面: 削り出し高台 内: 磨蝕、回転ナズ	磨蝕、削り出し高台、磨蝕	10c初?	第3層
第100回	19	須臾器 皿	底部 15%	口径: 8.9	外: 磨蝕、回転ナズ 底面: 削り出し高台 内: 磨蝕、回転ナズ	磨蝕、削り出し高台、磨蝕	9c?	第3層
第100回	20	須臾器 皿	底部 15%	口径: 10.8	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c	第3層
第100回	21	須臾器 杯B	底部 15%	口径: 11.0	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り (磨→) 内: 磨蝕、回転ナズ			第3層
第100回	22	須臾器 皿	口縁 15%	口径: 12.3 高台径: (11.9)	外: 磨蝕、ナズ 内: 磨蝕、ナズ			第3層
第100回	23	土師器 皿	口縁 5%	口径: 31.0	外: 磨蝕、回転ナズ	片口花筒?	中世	第3層
第100回	24	須臾器 杯	口縁 5%	口径: 15.6	外: ヨコナズ 内: ヨコナズ、へラ削り		布留	第3層
第100回	25	土師器 葉	瓦当 5%	口径: 6.3	内面: 糸切刃、布目 外面: 糸切刃、磨目叩き	瓦	近世	第3層
第100回	26	軒丸瓦	口縁 30%	口径: 9.4	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		平安	第3層
第100回	27	平瓦	底部 35%	口径: 6.2	外: 磨蝕 内: 磨蝕		13c?	第4層
第100回	28	須臾器 葉	底部 12.5%	高台径: 10.4	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c	第4層
第100回	29	陶器 碗	底部 9%	高台径: 10.6	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ			第4層
第100回	30	瓦器 椀	口縁 15%	口径: 9.5	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ			第4層
第100回	31	須臾器 杯B	底部 20%	口径: 27.0	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		9c~?	第4層
第100回	32	須臾器 杯B	底部 60%	口径: 16.2	外: 磨蝕、回転ナズ (磨→) 内: 磨蝕、回転ナズ			第4層
第100回	33	須臾器 杯B	底部 90%	口径: 10.8	外: 磨蝕、通孔 内: 磨蝕		庄内-布留	第4層
第100回	34	須臾器 葉	口縁 25%	口径: 2.0	内面: 磨蝕、凸面、磨目叩き			第4層
第100回	35	須臾器 葉	口縁 25%	口径: 2.8	内面: ナズ、へラ削り? 凸面: 磨目叩き			第4層
第100回	36	須臾器 葉	口縁 25%	口径: 2.2	内面: 布目 凸面: 磨蝕			第4層
第100回	37	須臾器 葉	口縁 25%	口径: 2.2	内面: 布目 凸面: 磨蝕			第4層
第100回	38	土師器 高杯	口縁 25%	口径: 6.0	外: 磨蝕、磨蝕による花文? 内: 磨蝕、回転ナズ	磨蝕、磨蝕による花文?	8c	第4層
第100回	39	土師器 小形鉢	口縁 25%	口径: 10.8	外: 磨蝕 内: 磨蝕、磨蝕、磨蝕	磨蝕、磨蝕?	8c	第4層
第100回	40	平瓦	口縁 25%	口径: 6.0	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		15c? 15c?	第4層
第100回	41	丸瓦	口縁 25%	口径: 7.8	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		14c? 14c?	第4層
第100回	42	平瓦	口縁 25%	口径: 15.2	外: 磨蝕、ナズ? 内: ナズ		8c	第5層
第100回	43	平瓦	口縁 15%	口径: 14.8 高台径: 3.6	外: ヨコナズ 内: ヨコナズ		8c	第5層
第100回	44	青白磁 合子蓋	口縁 21%	口径: 8.3	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c	第5層
第100回	45	黒色土師器 椀	口縁 10%	口径: 11.0	外: 磨蝕、回転ナズ、ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c (平城宮Ⅲ~Ⅳ)	第5層
第100回	46	安山石 硯	口縁 15%	口径: 11.6	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 内: 磨蝕、回転ナズ		8c (平城宮Ⅲ~Ⅳ)	第5層
第100回	47	須臾器 杯B	口縁 15%	口径: 16.6	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 内: 磨蝕、回転ナズ		8c (平城宮Ⅲ~Ⅳ)	第5層
第100回	48	土師器 皿	口縁 15%	口径: 16.2	外: 磨蝕、回転ナズ、磨蝕へラ削り 内: 磨蝕、回転ナズ		8c (平城宮Ⅲ~Ⅳ)	第5層
第100回	49	土師器 台付皿	口縁 15%	口径: 13.5 高台径: (4.1)	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c	第5層
第100回	50	須臾器 杯B	口縁 15%	口径: 14.3 高台径: 4.1	外: ヨコナズ、ナズ、へラ削り? (磨→)	粗い粘土	8c	第5層
第100回	51	須臾器 杯B	口縁 15%	口径: 9.8	底面: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c	第5層
第100回	52	須臾器 杯B	口縁 20%	口径: 9.0	底面: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c?	第5層
第100回	53	須臾器 杯B	口縁 15%	口径: 13.9	外: 磨蝕、回転ナズ、ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ		8c後半~?	第5層
第100回	54	須臾器 杯B	口縁 12%	口径: 13.5 高台径: 9.2 高台径: 3.8	外: 磨蝕、回転ナズ 内: 磨蝕、回転ナズ			第5層

遺物観察表 (2)

図録番号	相職番号	器種	残存状態	法量 (cm)	調整・施文等	特徴	時期	出土層位・遺構
第22回	60	土師器 杯A	口縁 10%	口径: 15.6	外: ヨコナテ、ナテ 内: ヨコナテ、ナテ	黒褐色胎土	8c (半城宮Ⅰ)	20流階
第22回	61	土師器 杯A	口縁 30%	口径: 19.0	外: ヨコナテ 内: 斜め放射状模文	黒褐色胎土	8c (半城宮Ⅰ)	20流階
第22回	62	土師器 杯A	口縁 100%	口径: 20.2 高さ: 3.6	外: ヨコナテ 外底: ヘラ形D 内: 斜め放射状模文 見込み: 線状模文	黒褐色胎土	8c?	20流階
第22回	63	須置器 灰口壺	頸部以下	動大径: 22.3 動小径: 15.6	外: 回転ナテ、回転ヘラ削り 内: 回転ナテ	外周・内面底部に自然釉	9c中?	20流階
第22回	64	須置器 壺	口縁 12.5%	口径: 25.4	外: 回転ナテ、ヨコナテ 内: 回転ナテ、ヨコナテ	外周に滑く自然釉		20流階
第22回	65	須置器 壺	口縁 40%	口径: 27.4	外: ヨコナテ、ハケム 内: ハケム (ハケナテ)	片口を持つ		20流階
第22回	66	不明	不明	残存長: 17.2 動大径: 5.7 動小径: 0.6	裏面と内面底部で滑いたよう6痕			20流階
第22回	67	木製品 曲物	底部 60%	径: 17.6 動大径: 0.6				20流階
第22回	68	平瓦	破片		凹面: 布目 凸面: 摩滅		8c	21溝
第22回	69	土師器 杯or椀		口径: 13.3 高さ: 4.1	外: ヨコナテ、ナテ 内: ヨコナテ、ナテ	粗い胎土		20流階
第23回	70	土師器 移動式壺	炊き口		外: ナテ、ハケム 内: ナテ		TK-43 (II-4-5)	20流階
第23回	71	須置器 杯身	口縁 12.5%	口径: 12.4	外: 回転ナテ、回転ヘラ削り (砂-) 内: 回転ナテ		TK-43 (II-4-5)	20流階
第23回	72	須置器 杯身	口縁 15%	口径: 13.2	外: 回転ナテ、回転ヘラ削り 内: 回転ナテ	布留		20流階
第23回	73	土師器 有段口罌鉢	口縁 10%	口径: 16.6	外: 摩滅 内: ヨコヘラミガキ、摩滅	底面: ヲコナテ		20流階
第23回	74	土師器 有段口罌鉢	底部	口径: 3.6	外: 半行タタキ 底面: ナテ 内: ハケム			20流階
第23回	75	ササカイト 罌片		長: 3.0 幅: 3.3 厚: 0.3 重さ: 3g				20流階
第23回	76	ササカイト 罌片		長: 3.3 幅: 3.4 厚: 0.6 重さ: 1.9g				20流階
第23回	77	ササカイト 罌片		長: 6.3 幅: 4.3 厚: 0.6 重さ: 1.7g				20流階
第23回	78	ササカイト 加工痕のある罌片		長: 4.3 幅: 3.5 厚: 1.8 重さ: 1.9g				20流階
第23回	79	ササカイト 石核		長: 4.2 幅: 3.1 厚: 0.8 重さ: 1.0g				20流階
第23回	80	ササカイト 加工痕のある罌片 (編織?)		長: 4.8 幅: 4.4 厚: 1.15 重さ: 2.7g				20流階
第23回	81	ササカイト 石核		長: 8.6 幅: 4.2 厚: 3.2 重さ: 1.98g				20流階 (隼土内表層)
第24回	82	土師器 壺	口縁 10%	口径: 13.8	外: ヨコナテ、ナテ、ハケム、半行タタキ 内: ヨコナテ、ハケム、ナテ		8c~	20流階
第24回	83	土師器 壺	口縁 20%	口径: 15.0	外: ヨコナテ、ナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、ナテ、指頭圧痕		8c~	20流階
第24回	84	土師器 壺	口縁 85%	口径: 15.4 高さ: 13.4	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕 底部: 痕成線の穿孔		8c~	20流階
第24回	85	土師器 壺	口縁 25%	口径: 16.6	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第24回	86	土師器 壺	口縁	口径: 17.9	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、ヘラナテ		8c~	20流階
第24回	87	土師器 壺	口縁 15%	口径: 23.2	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ナテ		8c~	20流階
第24回	88	土師器 壺	口縁 25%	口径: 28.4	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム		8c~	20流階
第24回	89	土師器 壺	口縁 18%	口径: 28.9	外: ヨコナテ、ナテ、指頭圧痕 内: ヨコナテ、ナテ		8c~	20流階
第24回	90	土師器 壺C (遺棄)	口縁 12.5%	口径: 9.5	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム		8c~	20流階
第24回	91	土師器 壺 (遺棄)	口縁 15%	口径: 18.8	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム		8c~	20流階
第24回	92	土師器 壺 (遺棄)	口縁 20%	口径: 17.3	外: ヨコナテ、ナテ 内: ヨコナテ、ナテ		8c~	20流階
第24回	93	土師器 壺 (遺棄)	口縁 8%	口径: 19.3	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ、ナテ		8c~	20流階
第24回	94	土師器 壺 (遺棄)	瓶形	口径: 16.2 高さ: 12.1	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、ナテ、指頭圧痕 底部: 痕成線の穿孔		8c~	20流階
第26回	95	土師器 壺 (遺棄)		口径: 19.8 高さ: (17.0)	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第27回	96	土師器 壺 (遺棄)		口径: 18.8 高さ: 17.8	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第29回	97	土師器 壺 (遺棄)		口径: 14.8	外: ヨコナテ、ナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第29回	98	土師器 壺 (遺棄)		口径: 14.9 高さ: 13.2	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第29回	99	土師器 壺 (遺棄)	2片	口径: 15.0 高さ: (13.4)	外: ヨコナテ、ハケム		8c~	20流階
第30回	100	土師器 壺 (遺棄)	口縁	口径: 15.3	外: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕、指頭圧痕		8c~	20流階
第30回	101	土師器 壺 (遺棄)	口縁 6%	口径: 19.0	外: ヨコナテ、ハケム、半行タタキ		8c~	20流階
第30回	102	土師器 壺 (遺棄)	口縁 70%	口径: 18.6 高さ: 14.7	外: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第31回	103	土師器 壺 (遺棄)	口縁 65%	口径: 29.0-27.3	外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、ナテ		8c~	20流階
第32回	104	土師器 壺 (遺棄)	口縁 30%	口径: 21.4	外: ヨコナテ、ナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ナテ、指頭圧痕		8c~	20流階
第32回	105	土師器 壺 (遺棄)	口縁 50%	口径: 25.0	外: ヨコナテ、ハケム、タタキ 内: ヨコナテ、ハケム、ナテ、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第32回	106	土師器 壺 (遺棄)	口縁 35%	口径: 29.9	外: ヨコナテ、ナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、タタキ当て具痕		8c~	20流階
第33回	107	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ヨコナテ、ハケム 内: ヨコナテ、ハケム、ナテ			20流階
第33回	108	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム、ナテ 内: ナテ			20流階
第33回	109	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	110	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	111	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	112	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	113	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	114	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	115	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	116	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ナテ、ハケム			20流階
第33回	117	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ハケム			20流階
第33回	118	土師器 壺 (遺棄)	底部 破片		外: ハケム 内: ナテ、タタキ当て具痕			20流階

遺物観察表 (3)

図録番号	掲載番号	器種	残存状態		法量 (cm)	調整・施文等	特徴	時期	出土層位、遺構
			部位	%					
第33回	119	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:ハケム	埋		20階層	
第33回	120	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム ナテ 内:ナテ	埋		20階層	
第33回	121	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:ハケム、タテ半当て具	埋		20階層 (備内)	
第33回	122	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:ハケム、ナテ	埋		20階層	
第33回	123	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:ハケム	埋		20階層	
第33回	124	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:タテ半当て具	埋		20階層	
第33回	125	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:ハケム	埋		20階層	
第33回	126	土師器 甕 (埋)	底部	破片	外:ハケム 内:ハケム	埋		20階層	
第36回	127	土師器 甕	口縁	10%	口径:16.9	口縁上に棒?による圧痕		弥生V米~区内	
第36回	128	土師器 甕	口縁	20%	口径:14.4	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ナテ		弥生V米~区内	
第36回	129	土師器 甕	口縁	20%	口径:17.0	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ナテ		弥生V米~区内?	
第36回	130	土師器 甕	口縁	12%	口径:19.0	外:四脚足、ヨコナテ 内:ヨコナテ		弥生V米~区内	
第36回	131	土師器 甕	口縁	25%	口径:16.2	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ナテ		区内	
第36回	132	土師器 甕	口縁	25%	口径:15.6	外:ヨコナテ、ハケム、平行タテキ 内:ヨコナテ、ヘラ削り		区内	
第36回	133	土師器 甕	口縁	12.5%	口径:18.4	外:内形有管浮文、縦四脚、ヨコナテ 内:ヨコナテ		区内?	
第36回	134	土師器 複合口縁甕	口縁	40%	高台径:17.0	外:ヨコナテ、タテヘタミガキ 内:厚減、ナテ		弥生V米~区内	
第36回	135	土師器 複合口縁甕	口縁	わすか	口径:17.0	外:粗目版付凸部、竹管文、半線竹管文、内:ナテ		22・23階層	
第36回	136	土師器 複合口縁甕or高杯	口縁	わすか	口径:27.0	外:波状文、厚減 内:波状文、厚減		22階層	
第36回	137	土師器 小形丸底甕	口縁	60%	口径:9.8 器高:6.8	外:ヨコヘタミガキ、タテヘタミガキ (希薄) 内:ヨコヘタミガキ、タテヘタミガキ (希薄)		22・23階層	
第36回	138	土師器 小形丸底甕	口縁	20%	口径:10.4	外:ヨコヘタミガキ 内:ヨコヘタミガキ、ヘラ削り		23階層	
第36回	139	土師器 小形丸底甕	口縁	50%	口径:8.6	外:ヨコナテ、ハケム、透孔 内:ヨコヘタミガキ、シボリ目		22・23階層	
第36回	140	土師器 柳形高杯or小形器台	口縁	60%	口径:10.3	外:ヨコナテ、ハケム 内:厚減		22・23階層	
第36回	141	土師器 有孔鉢	底部	わすか	底径:3.8	外:平行タテキ 内:ナテ、ハケ		22階層	
第36回	142	ミニチュア土器	底部	完全	口径:3.6 底径:2.7 器高:4.6	外:ナテ 内:コビヤウエ		22階層	
第36回	143	土師器 柳形高杯	底部	完全	脚柱径:3.4~4.5	外:厚減、透孔 内:厚減、シボリ目		22・23階層	
第36回	144	土師器 柳形高杯	底部	70%	脚柱径:10.1	外:タテヘタミガキ、透孔 内:ハケム		22・23階層	
第36回	145	土師器 高杯	底部	70%	脚柱径:4.1~5.4	外:タテヘタミガキ、透孔 内:ナテ		22・23階層	
第36回	146	土師器 面口甕	口縁	70%	口径:9.6 器高:10.8	外:ヨコナテ、ハケム、ナテ、タテキ、ヘラ削り 内:ヨコナテ、ハケム、ナテ		22・23階層	
第36回	147	土師器 面口甕	口縁	25%	口径:14.6	外:厚減、ヨコナテ 内:厚減、ハケム		22階層	
第36回	148	土師器 甕	口縁	20%	口径:14.6	外:ヨコナテ 内:ヨコナテ、ヘラ削り		22・23階層	
第36回	149	土師器 製塩土器?	底部	完全	口径:30.2	外:ナテ、厚減 内:厚減 (ヨコヘタミガキ)、ナテ		22階層	
第37回	151	手形形土器	底部	15%	口径:30.2	外:ナテ、厚減 内:ナテ、コビヤウエ、		22階層	
第37回	152	土師器 甕?	口縁	15%	口径:14.6	外:ナテ、厚減 内:ナテ、厚減		22・23階層	
第37回	153	木製品 膠掛	底版	70%	長さ:49.5 幅:11.9 最大厚:2.0	厚減のため面取り等の加工痕は確認できない		22階層	
第37回	154	ヤヌカイト 剥片			長さ:2.4 幅:3.1 厚:1.09 重量:5.6g		22・23階層		
第37回	155	ヤヌカイト 剥片			長さ:4.8 幅:3.6 厚:0.7 重量:7.6g		22階層		
第37回	156	ヤヌカイト 剥片			長さ:4.7 幅:6.7 厚:0.8 重量:20.6g		22階層		
第38回	157	土師器 小形鉢	底部	完全	底径:4.5	外:タテヘタミガキ、コビヤウエ、ナテ 内:タテヘタミガキ、ナテ		26階5cのみ	
第38回	158	土師器 小形丸底甕	口縁	20%	口径:10.8	外:ヨコヘタミガキ、厚減 内:ヨコヘタミガキ、厚減		26階5cのみ	
第38回	159	土師器 甕	口縁	30%	口径:17.5	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ		26階5cのみ	
第38回	160	土師器 甕	口縁	90%	口径:12.5 底径:3.4 器高:17.6	外:ヨコナテ、タテヘタミガキ 内:ヨコナテ、ヨコヘタミガキ、板ナテ		26階5cのみ	
第38回	161	木製品 膠材	不明		幅:15.0 最大幅:2.6 最大厚:1.0	側面に面取りの痕跡が確認できる		26階5cのみ	
第40回	162	土師器 甕	口縁	30%	口径:14.0	外:ヨコナテ、ハケム 内:ハケム、ヘラ削り		27階	
第40回	163	土師器 甕	口縁	30%	口径:17.6	外:厚減、爪痕? 内:厚減、ナテ		27階	
第40回	164	土師器 甕	口縁	6%	口径:17.3	外:ヨコナテ、ナテ、ハケム 内:ハケム、ヘラ削り		27階	
第40回	165	小形鉢	口縁	20%	口径:15.7	外:厚減 (ヨコヘタミガキ)、ナテ 内:ヘタミガキ		27階	
第40回	166	高杯or複合口縁甕	わすか			外:扇形紋、ナテ		27階	
第40回	167	土師器 底部	底部	完全	底径:3.2	外:ナテ 内:板ナテ?		27階	
第40回	168	土師器 甕	口縁	16%	口径:12.7	外:ヨコナテ 内:ヨコナテ、ヘラ削り (砂-)		27階	
第40回	169	土師器 甕	口縁	わすか	口径:18.4	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ナテ		27階	
第40回	170	土師器 甕	口縁	15%	口径:17.4	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ヘラ削り?		27階	
第40回	171	土師器 甕	口縁	6%	口径:22.9	外:波線凸部、ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ヘラ削り (砂-)		27階	
第40回	172	土師器 甕	口縁	15%	口径:13.1	外:ヨコナテ、ナテ 内:ヨコナテ、ハケム		27階	
第40回	173	土師器 甕	底部	完全	底径:4.0	外:ナテ、平行タテキ 内:ナテ、板ナテ		27階	
第40回	174	土師器 甕	底部	完全	脚柱径:2.7~4.5	外:ナテ、平行タテキ 内:ナテ		27階	
第40回	175	土師器 高杯	底部	完全	脚柱径:1.8	外:ハケム 内:厚減不明		27階	
第40回	176	土師器 甕 (室内式)	底部	完全	底径:1.8	外:ヨコナテ、ハケム 内:ヨコナテ、厚減		27階	
第40回	177	土師器 小形鉢	口縁	わすか	口径:17.0	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ハケム		27階	
第40回	178	土師器 甕	口縁	70%	口径:16.2	外:ヨコナテ、平行タテキ 内:ヨコナテ、ハケム		27階	

遺物観察表 (4)

図録番号	撮影番号	器 種	保存状態	法 量 (cm)	調整、施文等	特 徴	時 期	出土層位、遺構
第41回	179	土師器 高杯or高合口罎	口縁	外：幅：2.0 厚：0.5 重さ：3g	外：刷目、刷目施文？ 内：ナテ	透孔した刷目施文		2B深溝
第42回	180	サカカイト 刷片	ワサカ	長：3.5 幅：1.6 厚：0.6 重さ：4g				2B深溝
第42回	181	サカカイト 刷片 (加工痕のある刷片 (ナイフ型石器？))		長：4.0 幅：5.0 厚：0.7 重さ：5g				2B深溝
第42回	182	サカカイト 刷片		長：1.5 幅：2.4 厚：0.4 重さ：1.6以下				2B深溝
第42回	184	サカカイト 石版		長：6.7 幅：3.15 厚：1.4 重さ：14g				2B深溝
第42回	185	サカカイト 刷片		長：2.8 幅：3.2 厚：0.8 重さ：7g				2B深溝
第42回	186	サカカイト 刷片 (加工痕のある刷片)		長：2.1 幅：2.9 厚：0.65 重さ：2g				2B深溝
第42回	187	サカカイト 刷片		長：4.7 幅：5.4 厚：1.6 重さ：30g				2B深溝
第42回	188	サカカイト 刷片		長：7.45 幅：3.1 厚：1.35 重さ：23g				2B深溝
第45回	189	縄文 深鉢	破片		外：ミガキ(深痕?) 内：ミガキ(深痕?)	縄文後期? 凝結痕? 5区確認トレンチ3		5区確認トレンチ3
第45回	190	縄文 深鉢	破片		外：深痕、ミガキ 内：ナテ	縄文後期?		2B深溝
第45回	191	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、LR施文(彫刻施文) 内：ナテ	縄文後期 中津式		2B深溝
第45回	192	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、RL施文(彫刻施文) 内：ナテ	縄文後期 中津式		4区確認トレンチ2
第45回	193	縄文 深鉢?	破片		外：凹縁、彫刻施文? 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	194	縄文 深鉢?	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 凝結痕? 19井目層と判り		2B深溝
第45回	195	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	196	縄文 深鉢	破片		外：ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	197	縄文 深鉢	底部		外：深痕、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	198	縄文 深鉢	口縁付近		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	199	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	200	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	201	縄文 深鉢	口縁?		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	202	縄文 深鉢	口縁一隅		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	203	縄文 深鉢?	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第45回	204	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	205	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	206	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	207	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	208	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	209	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	210	縄文 深鉢	底部		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	211	縄文 深鉢	口縁一隅		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	212	縄文 深鉢	底部	底径：12.1	外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	213	縄文 深鉢	底部		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	214	縄文 深鉢	底部		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	215	縄文 深鉢	口縁付近		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	216	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	217	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	218	縄文 深鉢	底部	底径：9.6	外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	219	縄文 深鉢	底部		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第46回	220	縄文 深鉢	底部		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	221	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	222	縄文 深鉢	口縁		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	223	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	224	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	225	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	226	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	227	縄文 深鉢	破片		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第47回	228	縄文 深鉢	底部付近		外：凹縁、ナテ 内：ナテ	縄文後期 中津式?		2B深溝
第48回	229	サカカイト 刷片	破片	長：4.6 幅：4.2 厚：0.7 重さ：11g	外：刷目、ナテ 内：ナテ			2区確認トレンチ1
第48回	230	サカカイト 刷片	破片	長：3.3 幅：5.6 厚：0.6 重さ：11g	外：刷目、ナテ 内：ナテ			2区確認トレンチ1
第48回	231	サカカイト 石核?		長：9.6 幅：9.7 厚：1.8 重さ：140g		石核状態のものか。		2区確認トレンチ3
第48回	232	サカカイト 刷片		長：2.3 幅：2.3 厚：0.55 重さ：2g				3区確認トレンチ2
第48回	233	サカカイト 擦器	90%	長：3.5 幅：5.6 厚：0.5 重さ：9g		刃にぼけみられる、使用痕か?		3区確認トレンチ2
第48回	234	サカカイト 刷片		長：3.7 幅：3.0 厚：0.8 重さ：7g				3区確認トレンチ2
第48回	235	サカカイト 刷片		長：6.5 幅：4.2 厚：0.35 重さ：7g				3区確認トレンチ2
第48回	236	サカカイト 刷片 (加工痕のある刷片 (ナイフ型石器?))		長：7.3 幅：4.4 厚：1.25 重さ：34g				3区確認トレンチ2
第49回	237	チークト 刷片		長：2.45 幅：2.05 厚：0.55 重さ：2g				4区確認トレンチ2
第49回	238	サカカイト 刷片		長：3.3 幅：1.4 厚：0.5 重さ：3g				4区確認トレンチ2
第49回	239	サカカイト 刷片		長：2.95 幅：3.6 厚：0.95 重さ：3g				4区確認トレンチ2
第49回	240	サカカイト 刷片		長：3.7 幅：2.3 厚：0.65 重さ：5g				第5層
第49回	241	サカカイト 石核(採集)		長：2.6 幅：7.4 厚：1.3 重さ：29g				4区確認トレンチ2
第49回	242	サカカイト 刷片		長：6.6 幅：3.2 厚：1.5 重さ：29g				4区確認トレンチ2
第49回	243	サカカイト 刷片		長：2.7 幅：2.9 厚：0.55 重さ：2g				5区確認トレンチ1
第39回	244	木製品 柄						5区27溝

## 第Ⅳ章 自然科学分析

### 第1節 小路遺跡（その2）の花粉化石群集

新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

小路遺跡（その2）の調査では、3区（東）の北壁断面と下層確認トレンチ内で植生環境を復元する試料を得るために、花粉化石群集の自然科学分析を実施した。

#### 2. 試料

花粉化石群集の検討は、調査区北壁断面より採取された7試料（試料1～7）および下層確認トレンチ断面より採取された28試料（試料8～30）の合計35試料について行った。各試料についての簡単な記載は、分析試料対応表に示したが、試料1～17が概ね灰色の粘土、試料18～22が概ね灰色ないしオリーブ黒色の砂を主体とした堆積物、試料23～30が概ね灰オリーブ色ないしオリーブ黒色の粘土である。時代については、若い番号ほど上位の堆積物であり、新しい時期を示す。なお、N-9採取地点付近では、縄文土器が出土した。

第1表 分析試料対応表

試料番号	試料名			試料の簡単な記載
	N-	S-	E-	
1	1			灰色砂混じりシルト質粘土。褐鉄鉱が認められる。
2	2			灰色～灰オリーブ色粘土。砂礫が混じり、褐鉄鉱が認められる。
3	3			灰色砂(礫)混じり粘土。褐鉄鉱が認められる。
4	4			灰色砂質・粘土質シルト。小礫が混じる。褐鉄鉱が認められる。
5	5			灰色シルト質・粘土質砂。小礫が混じる。褐鉄鉱が認められる。
6	6			オリーブ黒色粘土質砂。
7	7			灰オリーブ色砂混じり粘土。褐鉄鉱が認められる。
8		1		オリーブ黒色粘土質細砂。
9		2		灰色～灰オリーブ色粘土。
10		3		灰色砂(礫)混じり粘土。炭化物片が多く混じる。
11	8			灰色砂礫混じり粘土。褐鉄鉱が認められる。
12	9	4		灰色(シルト質)粘土。N-9は褐鉄鉱が認められる。N-9付近縄文土器出土。
13	10	5		灰色砂(礫)混じり粘土。N-10は褐鉄鉱が認められる。
14	16	10		N-16:灰色細砂。S-10:暗緑灰色細砂混じり粘土。草本遺体(葎?)含む。
15		9		灰色砂質粘土。
16	17			灰色粘土質細砂。
17		7		灰色粘土。褐鉄鉱が認められる。
18	11	6		オリーブ黒色小礫混じり砂質シルト。
19	12			灰色粘土混じり細砂。
20	13			灰色粘土混じり砂。
21	14			灰色粘土質細砂。
22	15			オリーブ黒色礫混じり砂質シルト。
23			1	オリーブ黒色砂質粘土。
24	18			灰色粘土質砂。
25			2	オリーブ黒色砂礫混じり粘土。
26	19	8		N-19:黄灰色粘土質シルト。S-8:灰オリーブ色砂礫混じり粘土。
27			3	灰色砂混じり粘土。褐鉄鉱が認められる。
28	20			灰オリーブ色小礫混じり粘土。
29			4	灰オリーブ色砂礫混じり粘土。
30			5	灰オリーブ色砂混じり粘土。

### 3. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3 gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

### 4. 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉29、草本花粉17、形態分類を含むシダ植物胞子3である。以下に、各断面の花粉化石群集の記載を示す。

#### [北壁断面試料 (N-番号)]

N-3、N-9以外は、全くないし殆ど花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。N-3は、樹木花粉の占める割合は、約40%である。その中で、マツ属複維管束亜属が約45%と非常に高率である。次いで、コナラ亜属（約12%）、アカガシ亜属（約11%）が比較的高率であり、ツガ属、カバノキ属、ハンノキ属が3～6%で出現する。草本花粉では、イネ科が約50%と高率であり、他は、ソバ属、キカシグサ属、サンショウモなどが1%以下で出現する。N-9は、樹木花粉の占める割合は、約60%である。その中で、コナラ亜属が約27%と最も高率であり、次いで、アカガシ亜属（約24%）、シイノキ属（約18%）が高率である。他では、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、ニレ属－ケヤキ属などが約5～6%で出現する。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属のみが1%未満～3%未満で出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が約34%を占める。

#### [南壁断面試料 (S-番号)]

S-3、S-5以外は、全くないし殆ど花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。S-3は、樹木花粉の占める割合は、約54%である。その中で、コナラ亜属が約45%と最も高率であり、次いで、シイノキ属が約19%で出現する。他では、アカガシ亜属（約10%）、マツ属（約8%）が比較的高率であり、モミ属、スギ属なども5～6%で出現する。草本花粉では、イネ科が約9%と若干目立つ程度であり、他は、カヤツリグサ科、ヨモギ属のみが低率で出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が約33%を占める。S-5は、樹木花粉の占める割合は、約68%である。その中で、アカガシ亜属とシイノキ属が約31%と最も高率である。他では、コナラ亜属（約10%）、トチノキ属（約7%）などが比較的目標立つ。草本花粉は、イネ科のみが1%以下で出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が25%を占める。

#### [東壁断面試料 (E-番号)]

E-5以外は、全くないし殆ど花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。E-5は、樹木花粉の占める割合は、約15%と非常に低率である。その中で、ハンノキ属が約70%と非常に高率である。他では、ツガ属（約10%）、ハシバミ属（約10%）、カエデ属（約4%）が比較的目標立つ。草本花粉では、イネ科（約4%）、他のキク亜科（約7%）が若干目立ち、フウロソウ属、ツリフネソウ

第2表 花粉化石産出一覧表1

和名	学名	N-1	N-2	N-3	N-4	N-5	N-6	N-7	N-8	N-9	N-10	N-11	N-12	N-13	N-14	N-15	N-16	N-17	N-18	N-19	N-20	
樹木																						
モミ属	<i>Abies</i>																					
ツガ属	<i>Tsuga</i>		1	4						4												
マツ属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyion</i>																					
単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyion</i>			48																		
複維管束亜属	<i>Pinus</i> (Unknown)		2	14																		
マツ属 (不明)	<i>Sciadopitys</i>						2															
コウヤマキ属	<i>Cryptomeria</i>			3																		
スキ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>						1															
クマシデ属-アサダ属	<i>Betula</i>			6																		
カバノキ属	<i>Alnus</i>			4																		
ハンノキ属	<i>Fagus</i>									1												
ブナ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		2	13			2			32												
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>			12						28												
コナラ属-アカガシ亜属	<i>Castanea</i>									1												
クリ属	<i>Castanopsis</i>																					
シイノキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>									21												
ニレ属-ケヤキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>									6												
エノキ属-ムクノキ属	<i>Zanthoxylum</i>			1						4												
サンシヨウ属	<i>Cornus</i>																					
ミズキ属										1												
草本																						
イネ科	Gramineae		4	135	2		3															
カヤツリグサ科	Cyperaceae			1						1												
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>																					
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1																				
アブラナ科	Cruciferae			1																		
キカシグサ属	<i>Rotula</i>			1																		
セリ科	Umbelliferae									2												
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>			5			1															
他のキク亜科	other Tubuliflorae			4			2															
タンポポ亜科	Liguliflorae			5																		
シダ植物																						
サンシヨウモ	<i>Salvinia natans</i>			1																		
単葉型胞子	Monolete spore			1	6		3	1		68												
三条型胞子	Trilete spore			6	1		1	1		3												
樹木花粉	Arboreal pollen	0	5	107	0	0	7	0	0	117	0	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	1	4	153	2	1	8	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ植物胞子	Spores	0	0	8	7	0	3	2	0	71	0	0	1	0	0	0	2	2	0	1	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1	9	268	9	1	18	2	0	198	0	0	2	0	0	0	3	5	0	1	0	0
不明花粉	Unknown pollen	1	1	12	3	0	2	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

属などが1%以下で出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が約72%と非常に高率である。

## 5. 考察

検討した結果、十分な花粉化石を産出したのは、N-3、S-3、N-9、S-5、E-5のみであった。この5試料から遺跡周辺の植生変遷について述べる。

### [E-5の古植生]

付近には、ハンノキ属から成る湿地林がみられたと予想される。周辺の森林の主要な要素としては、針葉樹のツガ属、落葉のハシバミ属、カエデ属などがみられたであろう。草本類は、イネ科、他のキク亜科を主体にフウロソウ属などが混じる草地在り、幾分湿った場所にはツリフネソウ属が、乾き気味の場所にはカラマツソウ属などもみられたであろう。多産するシダ植物胞子については、ハンノキ属湿地林の林床などに多くみられたのかもしれない。

### [S-5の古植生]

常緑のアカガシ亜属とシイノキ属から成る照葉樹林が発達していたと予想される。他に、針葉樹のモ

第3表 花粉化石産出一覧表2

和名	学名	E-1	E-2	E-3	E-4	E-5
<b>樹木</b>						
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	11
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	-	-	-	-	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	-	1
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	-	-	2
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	-	1
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	-	-	11
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	-	80
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	9	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	5
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	1
<b>草本</b>						
イネ科	Gramineae	2	-	-	-	30
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	-	-	1
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	1	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	1
他のキンボウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	-	-	-
フウロソウ属	<i>Geranium</i>	-	-	-	-	6
トウダイグサ属	<i>Euphorbia</i>	-	-	-	-	1
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	1
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	1	-	-	-	6
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	-	51
<b>シダ植物</b>						
単条型胞子	Monolete spore	1	185	2	-	537
<b>樹木花粉</b>						
樹木花粉	Arboreal pollen	12	0	0	0	115
草本花粉	Nonarboreal pollen	4	2	0	0	98
シダ植物胞子	Spores	1	185	2	0	537
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	17	187	2	0	750
<b>不明花粉</b>						
不明花粉	Unknown pollen	1	0	0	0	34

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

ミ属、マツ属、落葉のクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、トチノキ属なども混じていたであろう。

[N-9 の古植生]

引き続き、アカガシ亜属、シイノキ属から成る照葉樹林が成立していたが、幾分林分を縮小し、代わって落葉のコナラ亜属が林分を拡大したようである。他に、針葉樹のモミ属、マツ属複雑管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、落葉のニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属なども混じていたであろう。

[S-3 の古植生]

コナラ亜属が更に林分を拡大し、卓越するようになった。また、引き続き、照葉樹林もみられたが、アカガシ亜属は、大幅に林分を縮小したようである。他では、モミ属、マツ属、スギ属といった針葉樹やユズリハ属も照葉樹林要素として混じていたであろう。

[N-3 の古植生]

針葉樹のマツ属複雑管束亜属が急増して卓越するようになった。逆に、これまで卓越していたコナラ亜属は、大幅に林分を縮小したようである。また、照葉樹林を構成していたシイノキ属も殆どみられないような状況になったと思われる。他では、針葉樹のツガ属、スギ属、落葉のカバノキ属、ハンノキ属なども混じていたであろう。付近には、水生植物（抽水植物）のキカシグサ属や水生シダ植物のサンショウモが生育するような水位の低い湿地ないし水溜りが存在していたことが予想されるが、キカシグサ属、サンショウモはいわゆる水田雑草であり、イネ科の高率出現も考慮すると、水田が存在していた可能性も考えられる。また、ソバ属の出現から、ソバ栽培が行われていたと思われる。

第4表 花粉化石産出一覧表3

和名	学名	S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	S-6	S-7	S-8	S-9	S-10
樹木											
モミ属	<i>Abies</i>	-	1	5	-	4	-	-	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	8	-	6	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	1	45	2	10	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	1	10	-	32	-	-	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	19	3	32	1	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	1	-	7	-	-	-	1	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ティカカスラ属	<i>Trachelospermum</i>	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-
草本											
イネ科	Gramineae	-	-	16	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シダ植物											
単条型孢子	Monolete spore	-	-	62	7	38	-	-	-	2	-
三条型孢子	Trilete spore	-	-	4	2	9	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	0	3	101	5	104	1	0	0	1	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	0	0	21	0	1	0	0	0	0	0
シダ植物孢子	Spores	0	0	66	9	47	0	0	0	2	0
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	0	3	188	14	152	1	0	0	3	0
不明花粉	Unknown pollen	0	3	33	4	34	0	2	0	0	2

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



## 第2節 小路遺跡（その2）堆積物中の珪藻化石群集

藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

珪藻は、10～500  $\mu\text{m}$ ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、小路遺跡（その2）の堆積物について珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

### 2. 試料の処理方法

試料は、粘土やシルトあるいは砂などの堆積物である。試料1～17の堆積物は概ね粘土からなる堆積物、試料18～22の堆積物が概ね砂が卓越した堆積物、試料23～30が概ね粘土からなる堆積物である。

これらの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

(1) 湿潤重量約1～6 g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。なお、200個体に満たない試料は、プレパラート全面を精査した。

### 3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群 (A)] : 塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群 (B)] : 塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群 (C1)] : 塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群 (D1)] : 塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が

生活する。

[海水泥質干潟指標種群 (E1)] : 塩分濃度が12~30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群 (C2)] : 塩分濃度が4~12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群 (D2)] : 塩分濃度が5~26パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群 (E2)] : 塩分濃度が2~12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群 (J)] : 上流部の溪谷部に集中して出現する種群である。これらには *Achnanthes* 属が多く含まれるが、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中~下流性河川指標種群 (K)] : 中~下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群 (L)] : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)] : 水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)] : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

#### 4. 珪藻化石の特徴とその堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水~汽水種が11分類群11属8種、淡水種が54分類群22属40種2亜種それぞれ検出された。これらの珪藻化石からは、海水~汽水種が2環境指標種群、淡水種4環境指標種群に分類された(第5表)。

全体的に珪藻化石が少なく、全く検出されない試料もある(試料N8・N10・N16・N18・E5)。珪藻化石が50個体以上検出された試料N1、N12、S4、E1、E2の5試料である。

ここでは、これら5試料に関して珪藻化石の特徴と堆積環境について述べる。これらの試料は、珪藻化石群集の出現傾向から2珪藻帯が設定された。

第5表 堆積物中の珪藻化石産出表1 (種群は、小杉(1988)および安藤(1990)による)

分類群	種群	N1	N2	N3	N4	N5	N6	N7	N8	N9	N10	N11	N12	N13	N14	N15	N16	N17	N18
<i>Campylodiscus</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Coscinodiscus</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Grammatophora macilenta</i>	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia cocconeiformis</i>	E1	-	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2	-
<i>Amphora</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Biddulphia aurita</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella stylonum</i>	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis smithii</i>	E1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia littoralis</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes brevipes</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula yarrensii</i>	?	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. lauta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>C. minuta</i>	W	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. spp.</i>	?	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-
<i>Diploneis ovalis</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>D. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia turgida</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia biareofera</i>	W	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>E. monodon</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>E. pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. praeurupta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. praeurupta</i> var. <i>bidens</i>	O	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>E. spp.</i>	?	16	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
<i>Frustulia</i> spp.	?	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>G. gracile</i>	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>G. parvulum</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira ambigua</i>	N	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>M. granulata</i>	M	2	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	3	1	-	1	-	3	-
<i>M. roeseana</i>	Q	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>M. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula americana</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. cuspidata</i>	W	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. tokyoensis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Neidium affine</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. iridis</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. borealis</i>	Q	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. brandelii</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. cardinaliculus</i>	W	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. divergens</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. gibba</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>P. hemiptera</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. microstauron</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. nodosa</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. viridis</i>	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. spp.</i>	?	4	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	16	-	-	-	-	4	-
<i>Rhopalodia gibba</i>	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>R. gibberula</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>S. phoenicenteron</i>	O	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella</i> spp.	?	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Synedra ulna</i>	W	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tabellaria fenestrata</i>	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Unknown	?	20	2	-	1	-	20	-	-	1	-	-	18	1	2	1	-	2	-
内 湾 (B)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-
海水泥質干潟 (E1)		-	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2	-
海水不定・不明種 (?)		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
汽水不定・不明種 (?)		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
湖沼浮遊生 (M)		2	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	3	1	-	1	-	3	-
湖沼沼沢湿地 (N)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
沼沢湿地付着生 (O)		6	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-
陸 域 (Q)		3	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-
広 布 (W)		13	6	2	-	1	-	-	-	-	-	-	3	-	-	1	-	2	-
淡水不定・不明種 (?)		47	8	1	1	-	22	1	-	1	-	1	48	1	2	1	-	13	-
珪 藻 数		71	17	3	1	2	30	4	0	1	0	1	77	2	2	4	0	21	0

第6表 堆積物中の珪藻化石産出表2 (種群は、小杉(1988) および安藤(1990)による)

分類群	種群	N19	N20	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	E1	E2	E3	E4	E5
<i>Campylodiscus</i> spp.	?	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Coscinodiscus</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Grammatophora macilenta</i>	B	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Nitzschia cocconeiformis</i>	E1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora</i> spp.	?	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Biddulphia aurita</i>	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella stylonum</i>	B	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis smithii</i>	E1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia littoralis</i>	?	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes brevipes</i>	?	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula yarrensii</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i>	W	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i>	W	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>C. lauta</i>	W	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. minuta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. spp.</i>	?	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	5	4	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
<i>D. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia turgida</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia biareofera</i>	W	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	20	3	-	-	-
<i>E. monodon</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	1	-	-	-
<i>E. praerupta</i>	W	-	-	-	-	-	9	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>E. praerupta</i> var. <i>bidens</i>	O	-	-	1	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. spp.</i>	?	1	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	1	18	1	-	-	-
<i>Frustulia</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>G. gracile</i>	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>G. parvulum</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	?	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	1	-	-	-	-	18	-	-	-	-	-	-	21	2	-	-	-
<i>Melosira ambigua</i>	N	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>M. granulata</i>	M	-	2	-	3	-	4	-	-	-	-	-	2	1	-	1	2	-
<i>M. roeseana</i>	Q	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
<i>M. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula americana</i>	W	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. cuspidata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. tokyoensis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium affine</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. iridis</i>	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	?	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. borealis</i>	Q	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	7	-	-	-
<i>P. brandelii</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. cardinaliculus</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4	-	-	-
<i>P. divergens</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. gibba</i>	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. hemiptera</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. microstauron</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. nodosa</i>	O	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. viridis</i>	O	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>P. spp.</i>	?	-	-	1	-	-	25	2	-	1	-	1	3	10	13	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>R. gibberula</i>	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i>	W	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
<i>S. phoenicenteron</i>	O	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella</i> spp.	?	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tabellaria fenestrata</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Unknown	?	3	2	-	1	3	24	5	1	1	1	5	-	21	19	-	-	-
内 湾 (B)		-	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
海水泥質干潟 (E1)		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海水不定・不明種 (?)		-	-	-	1	-	9	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
汽水不定・不明種 (?)		-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
湖沼浮遊生 (M)		-	2	-	3	-	4	-	-	-	-	-	2	1	-	1	2	-
湖沼沼沢湿地 (N)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
沼沢湿地付着生 (O)		-	-	1	-	-	22	2	-	-	-	-	-	10	1	-	-	-
陸 域 (Q)		1	-	-	-	-	19	-	-	-	-	-	4	23	9	-	-	-
広 布 (W)		7	-	-	-	-	31	1	-	1	-	2	4	29	7	-	-	-
淡水不定・不明種 (?)		6	2	-	3	3	65	7	1	2	1	9	4	54	37	-	-	-
珪 藻 殻 数		14	6	1	8	3	156	10	1	3	1	13	14	118	54	3	2	0

[D I 帯；試料E 1・E 2]

堆積物1g当たりの殻数は $9.98 \times 10^4$ および $2.09 \times 10^4$ 個、完形殻の出現率は約8%と0%である。

珪藻化石は、全体としては破片が多く広布種が目立つ。指標種群では、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*や*Pinnularia borealis*などが特徴的に出現し、沼沢湿地付着生指標種群*Eunotia pectinalis* var.*undulata*などが随伴した。

こうしたことから、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定される。

[D II；試料N 1・N12・S 4]

堆積物1g当たりの殻数は $5.21 \times 10^4$ ～ $1.08 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約9%～20%である。

珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群*Stauroneis phoenicenteron*などが特徴的に多く、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*などが随伴した。

こうしたことから、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。

第7表 堆積物の特徴と堆積環境

	試料No.	堆積物	珪藻分帯	環境
北壁	N 1	シルト質粘土	D II	ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地
	N12	粘土混じり細砂		
南壁	S 4	シルト質粘土		
東壁	E 1	砂質粘土	D I	沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域
	E 2	礫混じり粘土		

## 5. おわりに

遺跡の堆積物中の珪藻化石を調べた結果、全体的に珪藻化石が非常に希薄であった。珪藻は、水成植物であるため水分の少ない乾燥した場所においては生育しないことから、こうした環境であったことが考えられる。

同一の試料で行った花粉化石の検討では、試料N 3、N 9、S 3、S 5、E 5において環境復元を検討できる程度に検出されたが、その他の試料では非常に希薄であった。花粉化石は、明らかな水成堆積物において保存されるが、土壌などでは保存されないことから、比較的乾燥した環境であった可能性が花粉化石から窺える。

なお、堆積物は粘土やシルトあるいは砂などの堆積物であるが、珪藻化石は大きいもので $150 \mu\text{m}$ 程度であることから、粗粒砂堆積物中では堆積当時捕獲されない。

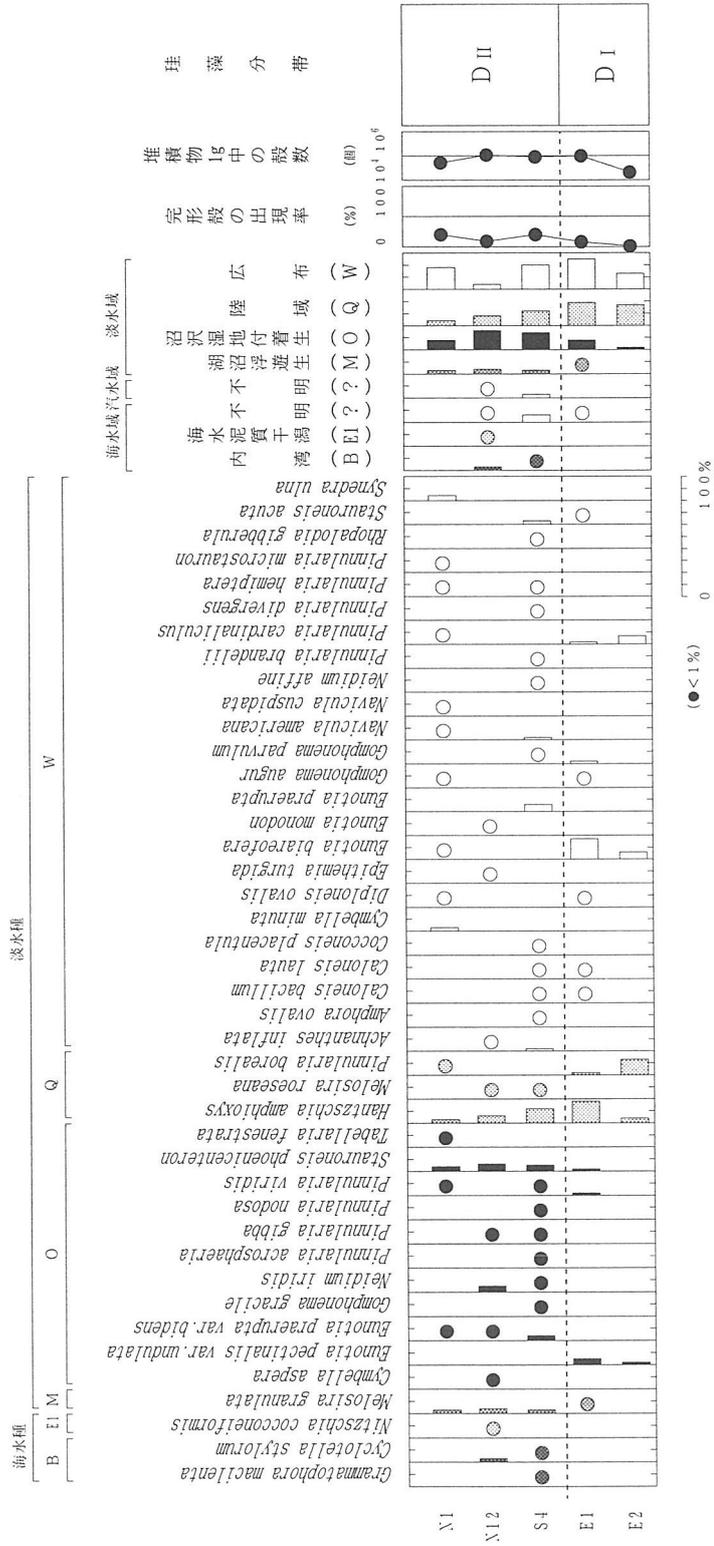
なお、海水種珪藻化石が出現しているが、これら珪藻化石は下位層からの再堆積と考えられる。

## 引用文献

安藤一男 (1990) 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42,73-88.

小杉正人 (1988) 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27,1-20.

第51図 堆積物中の主な珪藻化石分布図 (0.2%以上の分類群を表示)



### 第3節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (株式会社パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

小路遺跡 (その2) より検出された木片の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を実施した。

#### 2. 試料と方法

試料は、3-21東・中1区から出土した木材の外側部分より採取した木片1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

#### 3. 結果

表1に、試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代値 (yrBP) の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

第8表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-1907 (AMS)	木片 3-21東・中1区 I-6-16-G10-C4 流路下層 (灰色砂礫) 62層 No. 204 流木4	-27.0	5130 $\pm$ 80	cal BC 3960	cal BC 3985 - 3900 (52.0%) cal BC 3880 - 3800 (48.0%)

#### \* 暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い (<sup>14</sup>Cの半減期5,730  $\pm$  40年) を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。

なお、暦年代較正值は<sup>14</sup>C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 $\sigma$ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 $\sigma$ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 $\sigma$ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

#### 4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1 $\sigma$ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、3-21東・中1区から出土した木材の外側部分より採取した木片の年代はcal BC 3985–3900年が、より確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の<sup>14</sup>C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended <sup>14</sup>C Database and Revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

## 第V章 展開写真について

### 小路遺跡（その2）出土の人面墨書土器の撮影方法について

片山 彰一

#### 1. はじめに

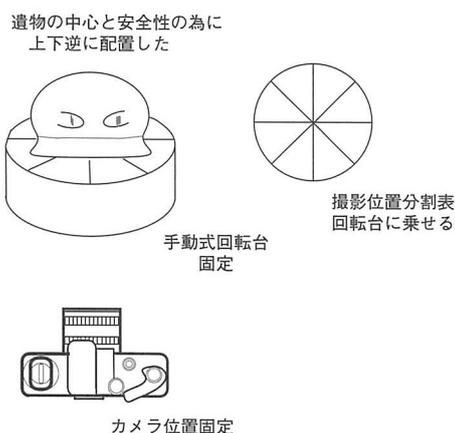
展開を広辞苑で調べると、「立体を一つの切断によって一平面上にひろげること」と書いてある。確かに仕上がりの写真は、円筒形も一つの切断で平面に広がる様子で浮かび上がる。カメラを使用し遺物を展開撮影する方法には、カメラ側を回転・移動する方法と、撮影物を回転・移動する方法が考えられる。今回は安価に仕上がる方法で土器を回転し、カメラで三通りの方法で撮影し展開写真を作成した。

#### 2. 銀塩カメラでの作製方法

被写体回転台、位置を固定したカメラで分割にて撮影しフィルム現像・紙焼き後に紙焼き合成し紙焼き修正作業を経て完成する。完成写真が1枚しか無いため、後の活用に複写し記録に残す。

##### 2.1.必要な機材

- ① 撮影台の上に手動式回転台をテープ等で固定して撮影土器をのせる。
- ② カメラのフィルム・サイズは使用目的により任意に決める。
- ③ 三脚は動かないようテープ等で固定する。
- ④ 撮影用照明機器
- ⑤ 引伸機等暗室機材



##### 2.2.撮影方法

まず始めに8分割表を作成し回転台の上ののせ、土器の安全と中心核に設置するために、天地逆に置き、撮影照明には大型ストロボを使用し、張り付けの際に少しでも張り付け痕がでにくい様に土器にむらの無い照明を与えた。

カメラはニコンF2、レンズはマイクロニッコール105mm F2.8を使用し、フィルムはT-MX100、フィルム現像液D76（1：1）、紙焼きには自動現像機を使用し完成に2日を要した。活用のフィルムは



作図1 写真は米子千智が撮影、7分割を使用し紙焼き張り付けを行った。  
作成紙焼きは7分割を使用して完成した。

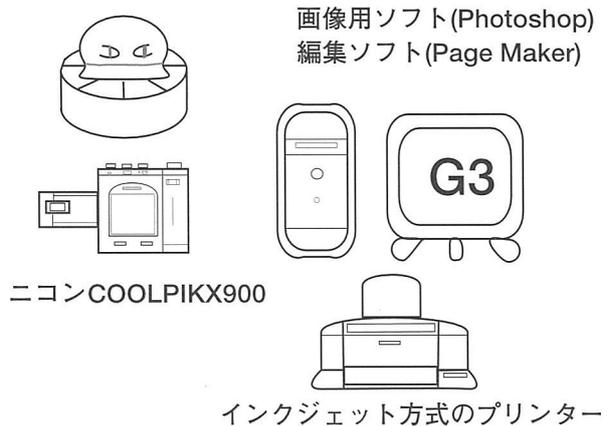
情報量を損なわないため4 X 5 インチフィルムを使用し、複写にて完了した。すべての行程に3日が必要であった。

### 3. デジタルカメラでの作製方法

撮影方法は銀塩カメラと同じ方法でカメラがデジタルカメラに変わる。カメラは日頃メモ写真用に活躍している、私個人のデジタルカメラを使用し、1カットの画素数は80万にて取り込みを行った。

#### 3.1.必要な機材

- ① 手動式回転台
- ② デジタルカメラ
- ③ 三脚
- ④ 撮影用照明機器
- ⑤ コンピュータ&画像用ソフト
- ⑥ プリンター&編集ソフト



#### 3.2.撮影方法

画像ソフトの機能として、レイヤー上に画像ペーストし、レイヤーの不透明度を指定し、独立したレイヤー上で合成(すかし合成)・拡大&縮小・変形・切り抜きツールを用いグレースケール画像に変更



作図2 写真のデジタル合成は奥村弥恵が5分割を使用して完成した。

し、TIFF形式にて保存(882K)プリンターで出力する為に編集用ソフトを使用し原稿サイズに縮小しインクジェット方式のプリンターにてフォトプリント紙(400dpi)にて打ち出し原稿とした。撮影からプリント原稿まで1日で完了する。

### 4. 特殊カメラでの作製方法

電動回転台の上に土器を載せ、回転速度とフィルムの送りスピードが合っていればほぼ正確な記録撮影ができる、スリットカメラを使用し展開写真を作成する事にした。

近接撮影用のスリットカメラは市販されていないため、大関通夫氏の「簡易スリットカメラの作り方」より製作する事にした。スリットカメラの製作は、水取康人が行った。

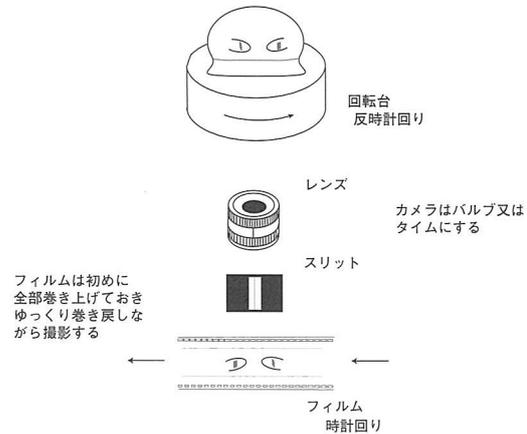
#### 4.1.スリットカメラの作り方

大関通夫氏の作り方を参考に、フィルムの給送速度の微調整部分とスリット幕をカミソリ刃からシャッター幕に変更した以外は同じである。フィルム巻戻しノブがあり、バルブまたはタイムセットのでき

るボディーを有するカメラに適している。

- ① スリット板はフィルムの通るレール内側にピッタリの大きさに作り、使うときにテープで固定する。
- ② 駆動部は田宮工作キット遊星ギヤボックス（減速ギヤとモーターのセット）ギヤ比1：625に組み立てる。1セットは1：16から1：400のため、2セットを必要とする。
- ③ 巻戻しノブの溝に3mmのチョウネジを掛け合せる。
- ④ 電池ボックス 田宮工作キット単3電池ボックススイッチ付きを使用する。
- ⑤ フィルム給送速度を安定させるため、田宮ホーネットスピードコントローラーを使用する。
- ⑥ 駆動部取り付け板。（板厚5mm長さ200mm形状は逆L字形）をクランプで挟んでとり付ける

※注 スリットの幅については、狭いと露出ムラが出やすく、広いとピントが甘くなるので約0.8mmが適当と思われる。製作は模型部品を使用したため工作にはそれ程難しい部分はないので、試作を奨める。



スリット板の制作

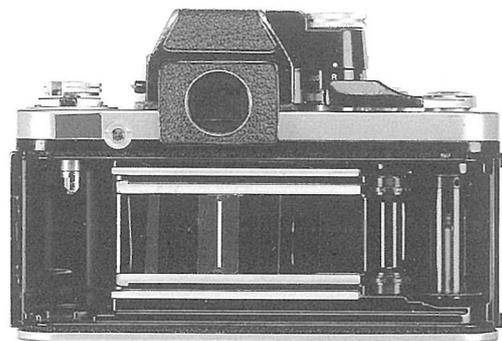
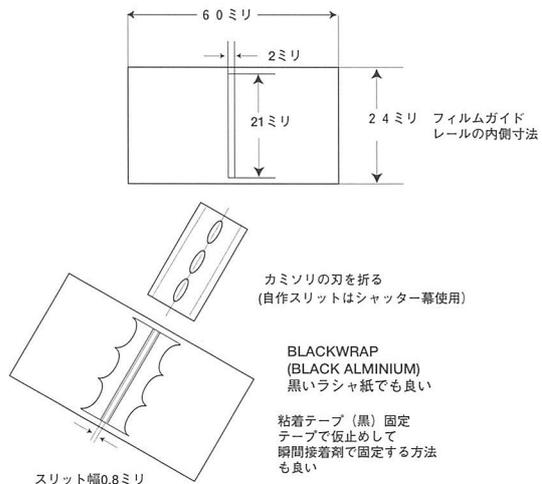
#### 4.2.必要な機材

- ① 自作スリットカメラ
- ② 電動回転台（反時計回り）
- ③ 三脚
- ④ 写真用電球1灯
- ⑤ 引伸機等暗室機材

#### 4.3.実際の撮影方法

- ① レンズキャップをつけ、フィルムを装填し最高シャッター速度で35枚まで巻き上げる。36枚目はタイムで切り、シャッター幕を全開固定する。
- ② モーター駆動部の爪を巻戻しノブに連結させ、取り付け位置を決めクランプで駆動部を固定する。
- ③ フィルム巻き戻し用のIRレバーをセットし、駆動モータースイッチをオンにして1回転ほど作動させ、フィルムの回転を確認し三脚に固定する。
- ④ 電動回転台とフィルムの速度を合わせ撮影する。

撮影照明はスリット幅に写る部分のみの照明で良いため、質感の良い1灯照明を使用した。なお、巻戻しノブにモーターを連結する方式は、フィルム速度が1本の初めと終わりで少しずつ変わるので、1土器に対し1本





作図3 写真は水取康人が撮影し完成に1日半を必要とした。

フィルムを使用し、伸縮の少ない画像部分を使用する。

微動速度調整のできる電動回転台を使用するか、カメラ駆動部のギヤーボックスのギヤー比を変えるか、フィルム給送速度を微調整できる装置を製作するかで大小の土器を撮影できる。

## 5.まとめ

土器の展開写真の作成に、早く仕上がるのはデジタル写真であり次がスリット写真で、一番時間が必要な写真は銀塩の分割撮影仕上げであった。プリントの情報量においては、スリット・銀塩分割撮影・デジタルの順となるが、デジタルに関してはデジタルカメラ等の備品の資本投下（数百万円以上投資）により解像度の良い写真が可能であると思われる。銀塩分割写真に於いては、画像を張り合わせる際に必要接点によっては歪みが生じ、掲載目的によってはデジタル修正を必要とする事が有り得る。スリットカメラに於いては上下に歪みとフィルム送り速度のバラツキにより伸縮が起こる。

製作に比べ撮影方法は、回転台の回転速度とフィルム給送速度を土器の大きさにより微調整を行い、絞り値等の決定の為にテスト撮影を行わなければ本撮影ができないなどマニアックなカメラであり、使いこなす迄には、多くの経験が必要である。

## 第Ⅵ章 まとめ

今回の小路遺跡（その2）発掘調査では、旧石器時代から中・近世に至るまでの幅広い遺構・遺物を確認でき、貴重な資料を得ることができた。中でも良好な遺存状態で出土した縄文時代前期の深鉢や、古代流路内より出土した祭祀関連の遺物が特筆される。しかし、里道や埋設管等の施設によって調査可能範囲が様々な規制を受けた。このため、調査区を小さく8地区に分割して調査せざるをえなかったことや、一部の未調査地を残した点においては残念な結果となった。以下に各々の成果について述べ、小路遺跡の実態と変遷の一端を述べまとめとしたい。

第1・2・3面で検出された遺構は近世から現代の耕作関連のもので、溝（鋤溝）・ピット・土坑・井戸であった。調査地周辺は東から西方向に傾斜する地形で、現在は段状に造成されている。溝は、南北方向を主軸とするものがほとんどであった。溝の中には現在の水路と同軸の方向のものがあり、水路の位置が第3面時から踏襲されていた可能性が考えられた。また、2区と3区以西では、遺構の分布状況に大きな違いがみられた。各層の厚さも変わることから、分断原因となっている里道が何らかの区画的性格を持つものと思われる。このように今回の調査では各地区を分断している施設の内、過去においても影響を与えている部分が少なからずあると考えられるが、未確認のためあくまで推測の域を出ない。

第4面では南北方向の耕作関連溝と、ピット・土坑・井戸を検出した。遺構の密度は少なく、遺物から中世に耕作されていたと考えられる。4区（北）でピットを集中した状態で検出したが、並びに規則性がなく建物は復元できなかった。上位の耕作時に削平され、検出できなかったピットの存在が考えられる。

第5面では、南東から北西方向に走る溝と流路を検出した。溝と流路は、共に奈良時代後半から平安時代前半期の遺物が出土し、同時期に併存していたものと考えられる。特に流路内からは、祭祀遺物である人面墨書土器が多く出土し、他に須恵器・土師器・瓦・木製品・獣骨などが出土した。これらの溝と流路は、讃良郡糸里遺跡（その1）の調査で検出された溝27と同方向で、その上流にあたるものと考えられる。溝27からは、灌漑施設である井堰遺構が検出されている。流路は溝27同様にあまり蛇行の跡が見られず、ほぼ真っ直ぐの流れを維持している。このことは、祭祀を執り行う特別な流路として計画的に護岸を行い、水量と流れを調整していたものと考えられる。流路の西で検出された溝は、取水などの側溝的な目的で作られた可能性が考えられる。

第6面では、溝と自然流路が検出された。流路内からは、弥生時代後期末から古墳時代前期の土器や、腰掛の座板であると思われる木製品が出土した。溝は5区において検出され、南東で木樋を検出した。木樋は2本が検出され、組まれて繋ぎ合わされ、使用されていたと考えられる。木樋の上部は土圧に押し潰されているが、剝り貫きのものであると考えられる。また、この付近を拡張して調査した結果、木樋を挟んで上流（南東）側が池状を、下流側が溝状を呈する事が判明した。このことから、池状の部分に上流から水を溜め、木樋によって溝に水を供給していたと考えられる。

第7面では自然流路を確認した。自然流路は東側の丘陵より流れ込んでくるものと考えられる。流路の最下層より縄文土器の小片が出土しているが、時期を示すものではなく、基盤層から流出したものと思われる。

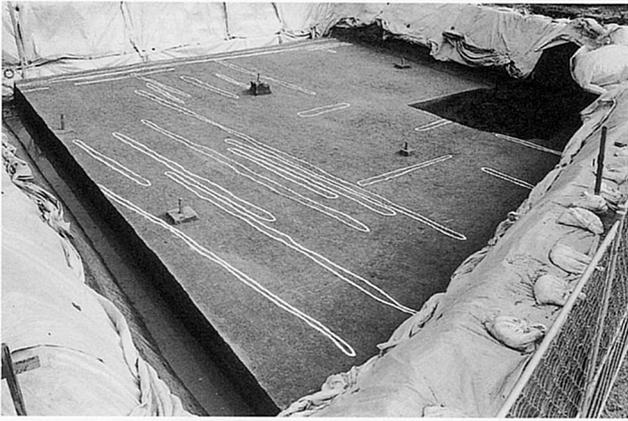
今回の調査では計7面で遺構を検出したが、出土物内に縄文土器や石器がみられた。このため、最終

面の調査終了後に、下層確認のトレンチを設定し掘削した。この結果、砂とシルトの互層が認められ、トレンチ内から多数の縄文土器と石器が出土した。縄文土器は、残存が良く摩滅もほとんどみられず晩期の滋賀里式から前期の北白川下層Ⅱ式にかけて広い時期幅のものが出土した。近隣に帰属するなんらかの生活跡を推測させる。

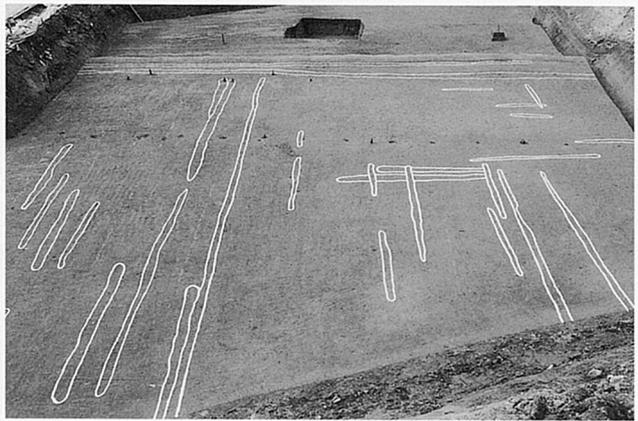
本調査の第5面で検出された溝や流路などと、讚良郡条里遺跡（その1）の灌漑施設である井堰遺構などを総合して考えると、この地で水流を管理しつつ生活が営まれていた様子が窺い知れる。流路はその後完全に埋没し、中世以降に耕作地拡大のための大規模な農地開発が繰り返し行われたのであろう。

今回の調査により得ることができた手掛かりと、高宮遺跡、讚良郡条里遺跡等における調査成果に加え、今後実施される近隣の調査によって、より詳細な土地利用の変遷、景観復元、時期の考察が明らかになると考えられる。

# 写 真 图 版



1. 3区(西)第2面 全景(北西から)



2. 4区(北)第2面 全景(東から)



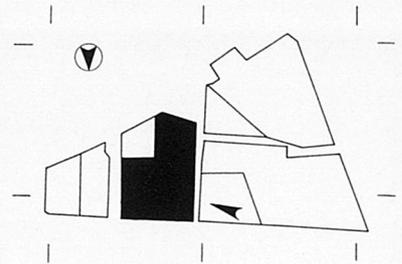
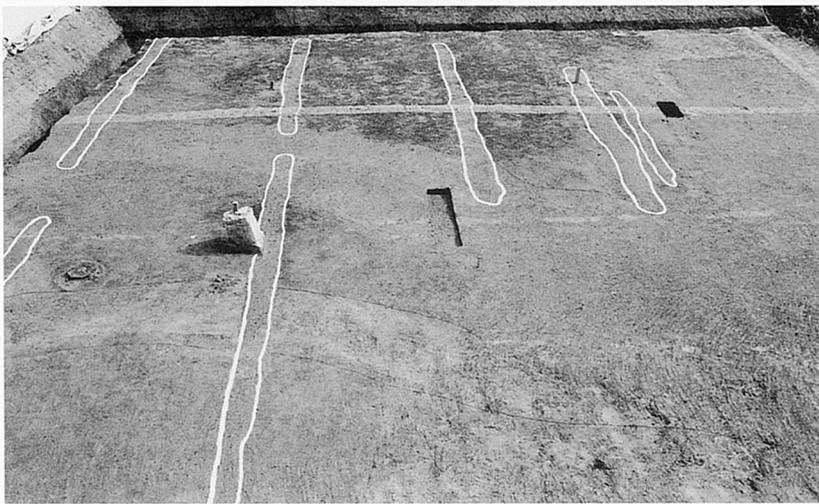
3. 4区 第3・4面 全景(垂直写真)



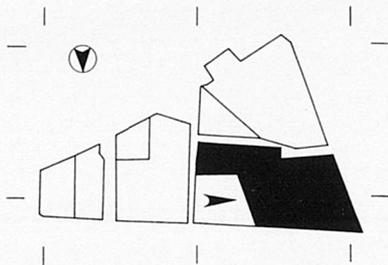
4. 3区(東)第3面 全景(北東から)



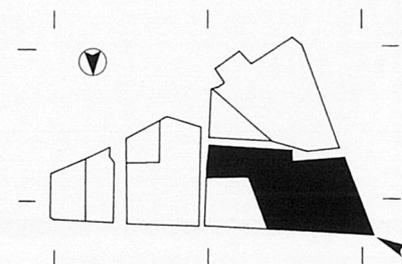
5. 4区(北)第3面 全景(東から)



1. 3区(東)第4面 全景(西から)



2. 4区(北)第4面 全景(東から)



3. 4区(北)第4面 検出状況(北西から)



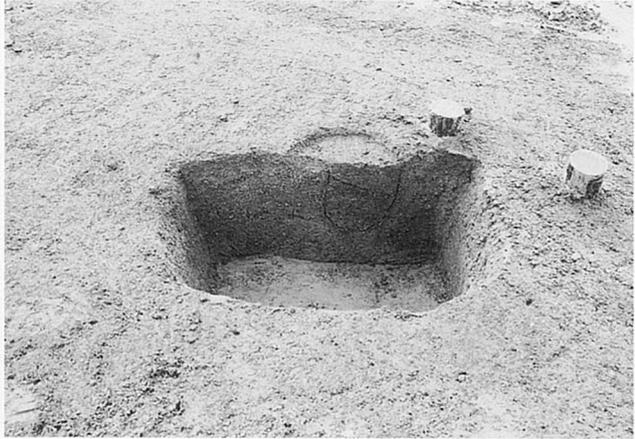
1. 4区(北)第4面 8溝断面(北から)



5. 4区(北)第4面 14ピット断面(北から)



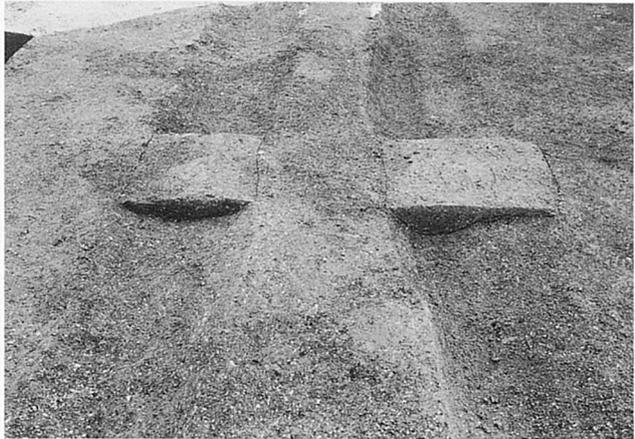
2. 4区(北)第4面 9土坑断面(北から)



6. 4区(北)第4面 15ピット断面(東から)



3. 4区(北)第4面 13溝断面(西セクション)(東から)



7. 4区(北)第4面 17・18溝断面(北から)



4. 4区(北)第4面 10・11・12溝断面(北から)



8. 5区 第4面 19井戸(東から)



1. 3区 第5面 (垂直写真)



2. 3区(東)第5面 20流路 遺物94出土状況(北から) 3. 3区(西)第5面 20流路 遺物102出土状況(西から)



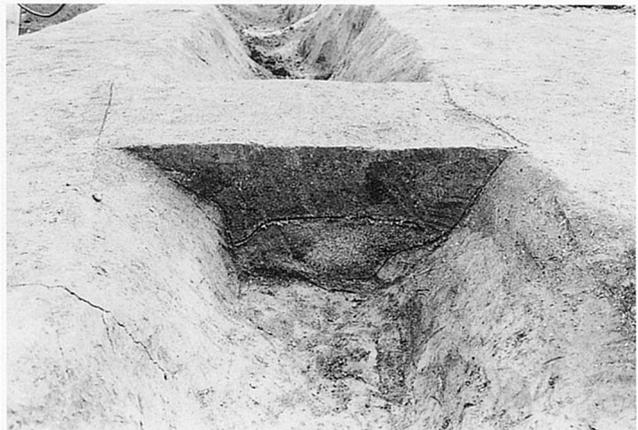
4. 3区(西)第5面 20流路 遺物102出土状況(北西から) 5. 4区(北)第5面 20流路 遺物98出土状況(北から)



1. 3区(西)第5面 20流路 遺物55出土状況(北西から) 2. 4区(北)第5面 20流路 遺物63出土状況(南東から)



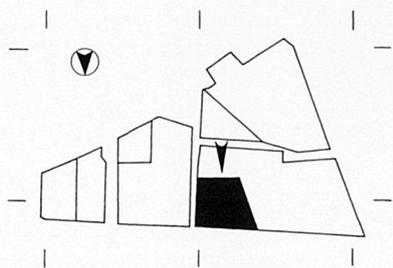
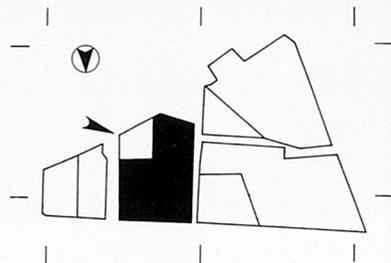
5. 3区(西)第5面 20流路断面(北西から)



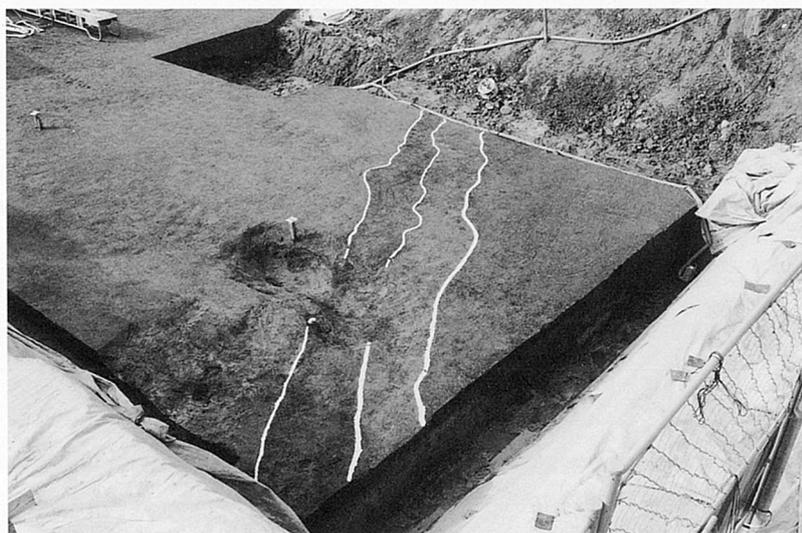
3. 4区(北)第5面 21溝 遺物69出土状況(北東から) 4. 3区(西)第5面 21溝断面(北西から)



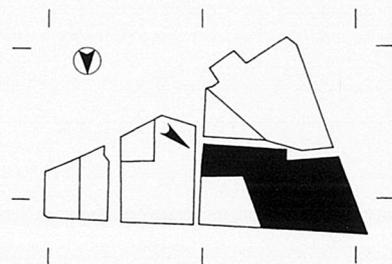
1. 3区(東)第5面 20流路(東から)



2. 3区(西)第5面 20流路(南から)



3. 4区(北)第5面 検出状況(南東から)





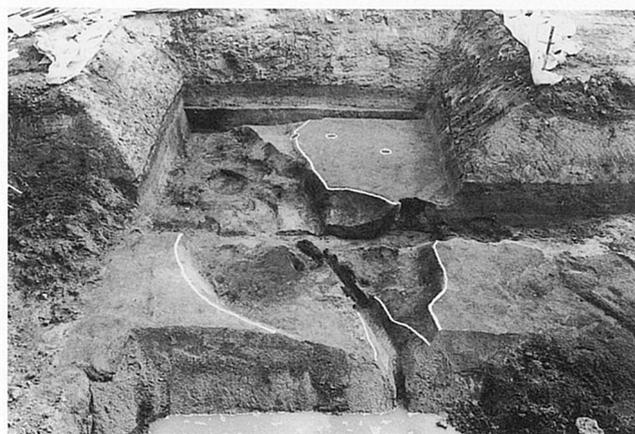
1. 3区(東)第6面 全景(南西から)



2. 4区(北)第6面 29流路(北西から)



3. 5区 第6面 27溝(南東から)



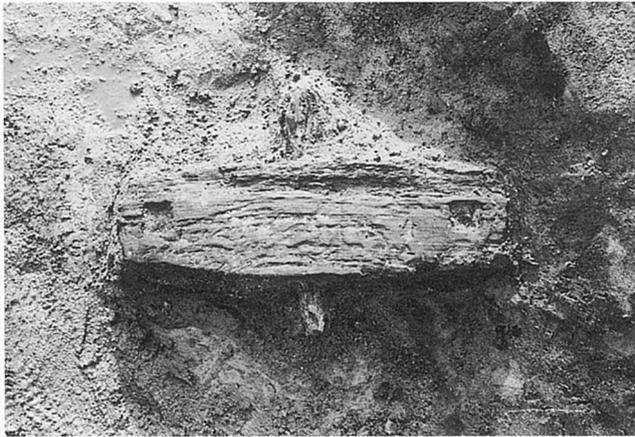
4. 5区拡張 第6面 27溝(北から)



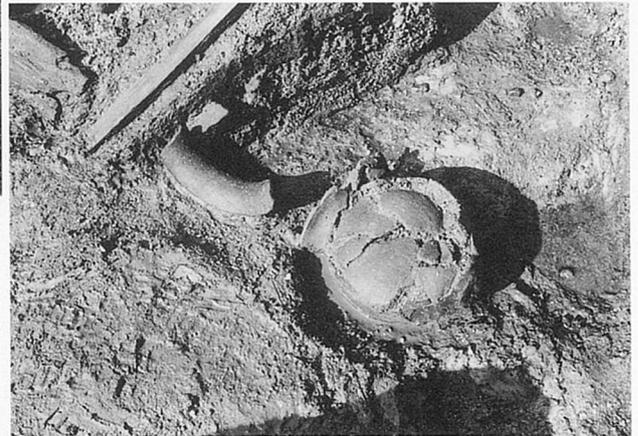
5. 5区 第6面 27溝木桶出土状況(西から)



1. 3区(東)第6面 22流路腰掛座板出土状況(南から)



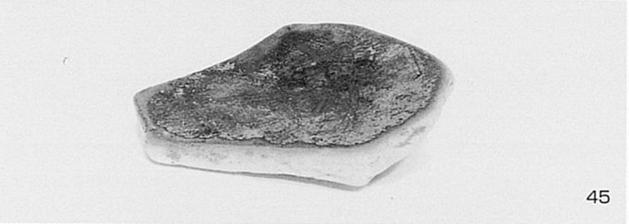
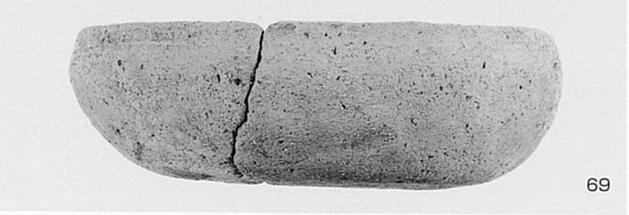
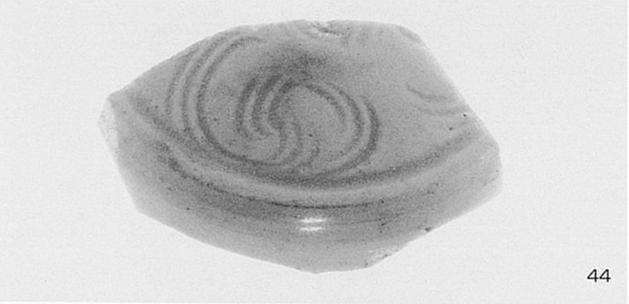
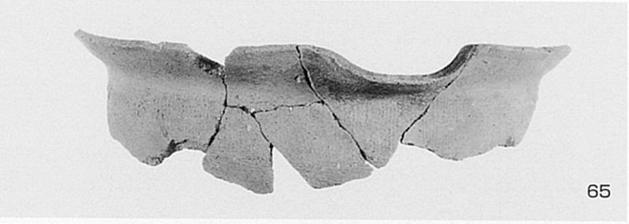
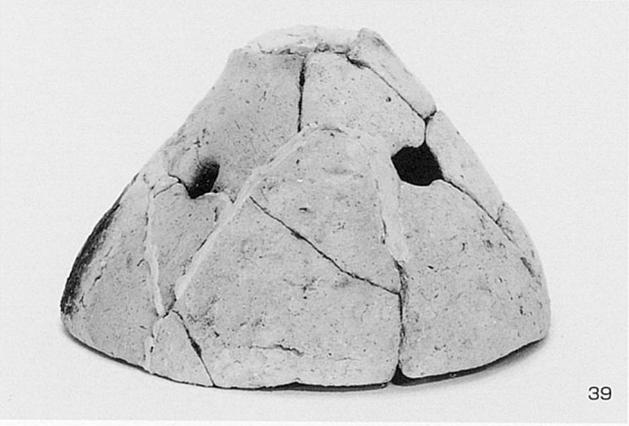
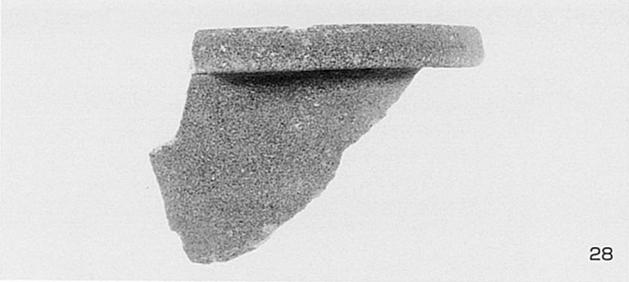
2. 3区(東)第6面 22流路腰掛座板出土状況(北東から)



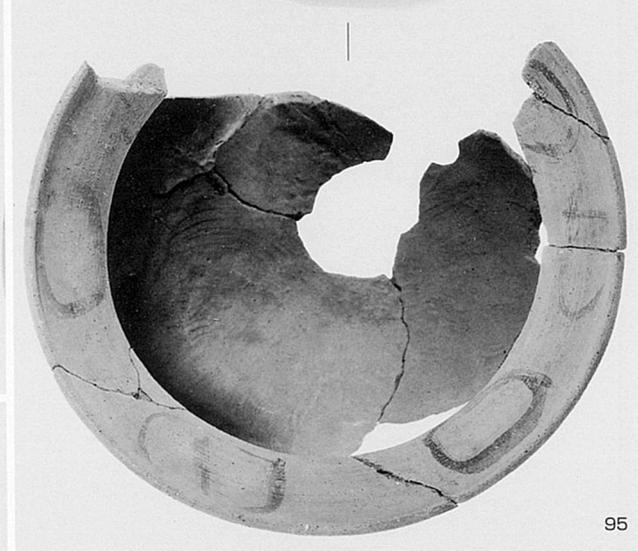
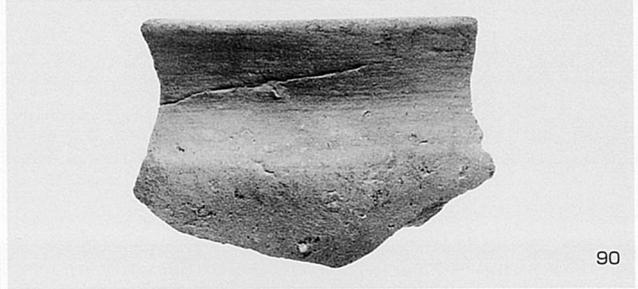
4. 3区(東)第6面  
26落ち込み遺物出土状況(南から)

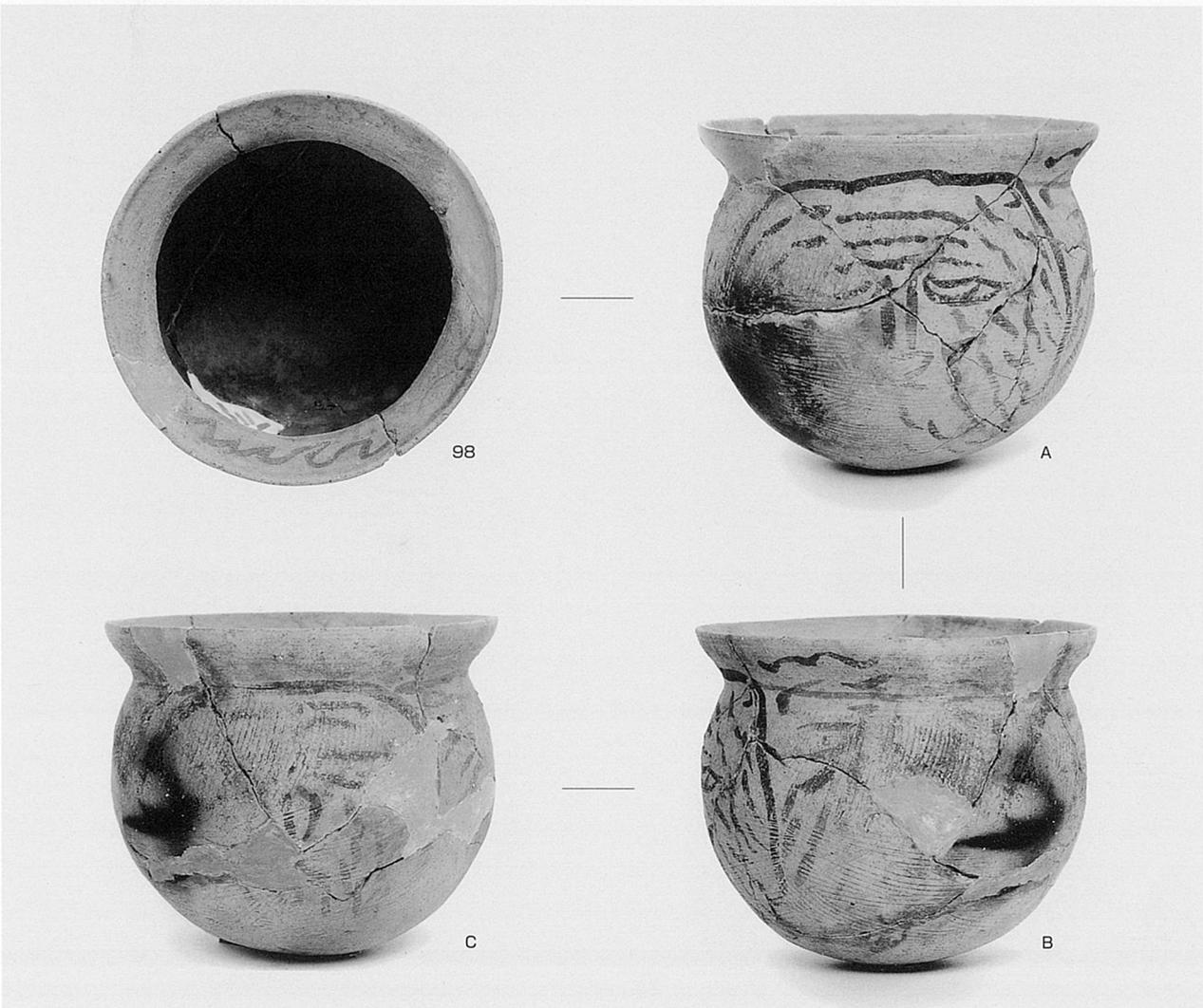
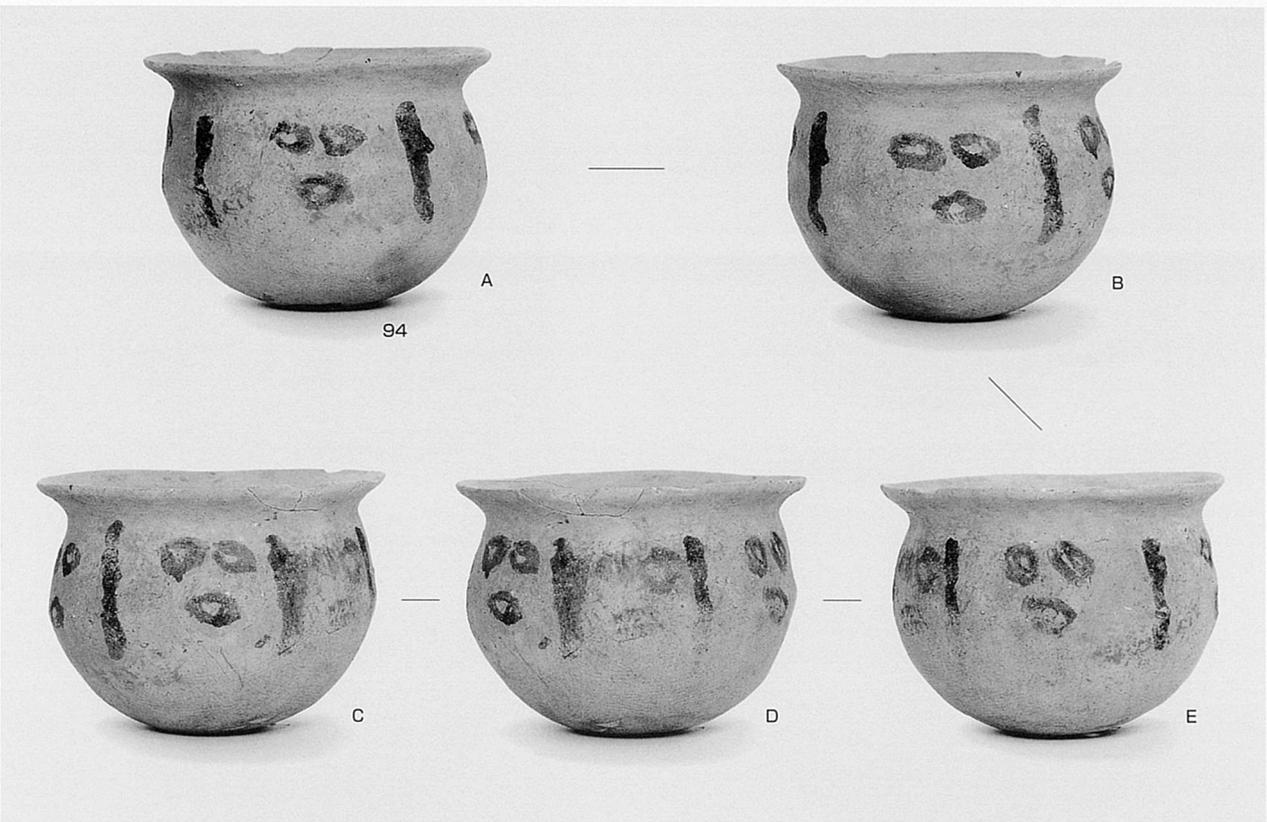


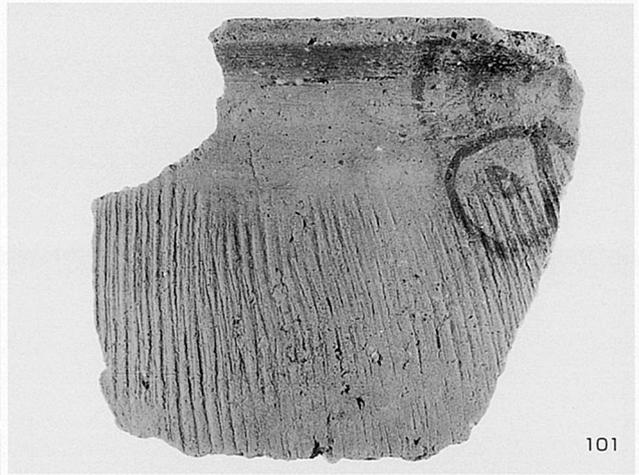
3. 3区(東)第6面 26落ち込み(東から)

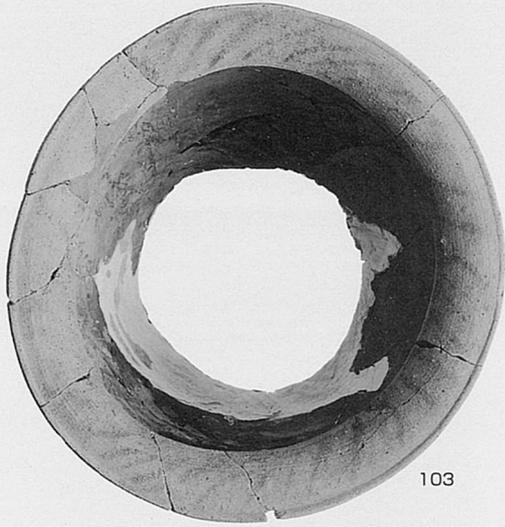


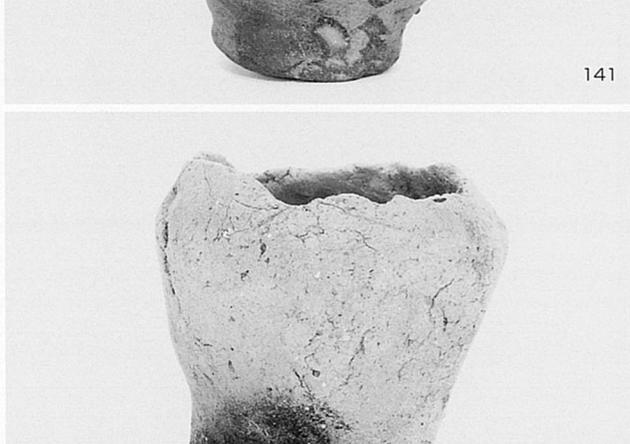
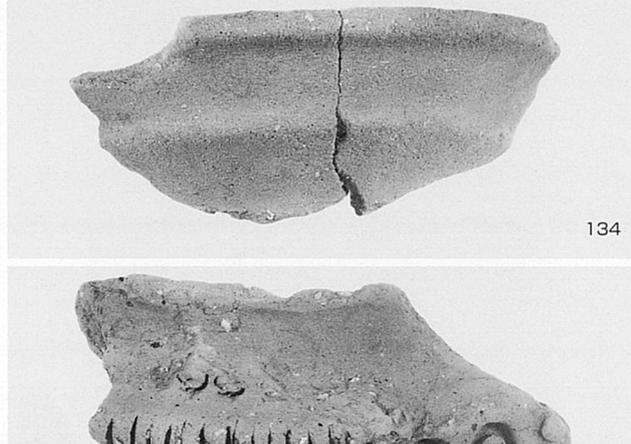
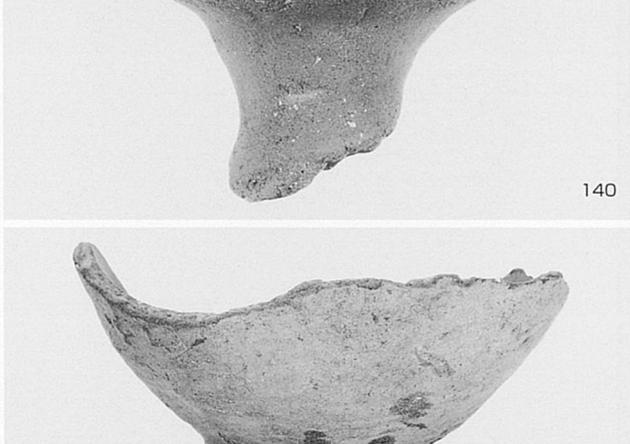
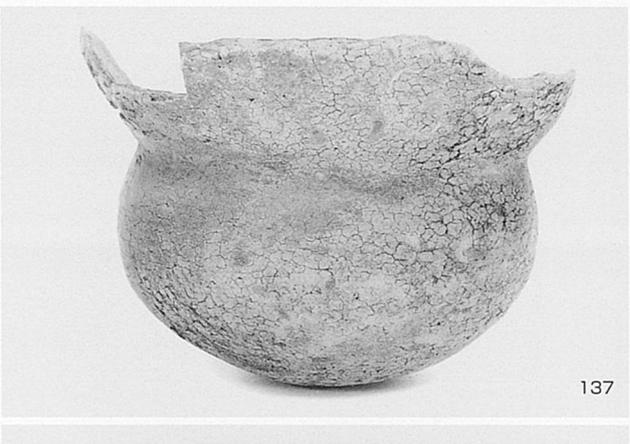
写真図版10  
出土遺物

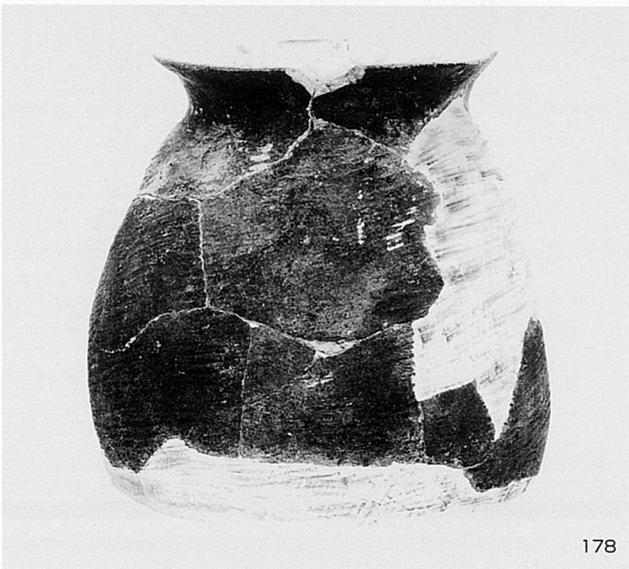
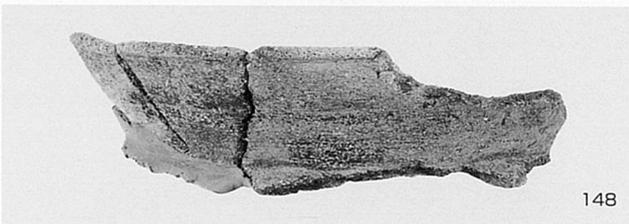
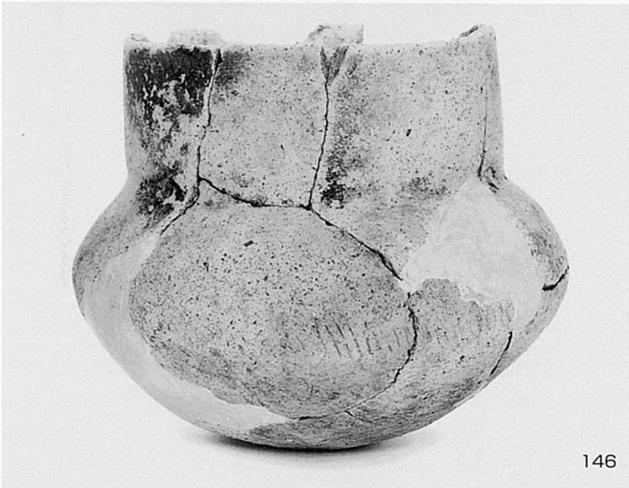
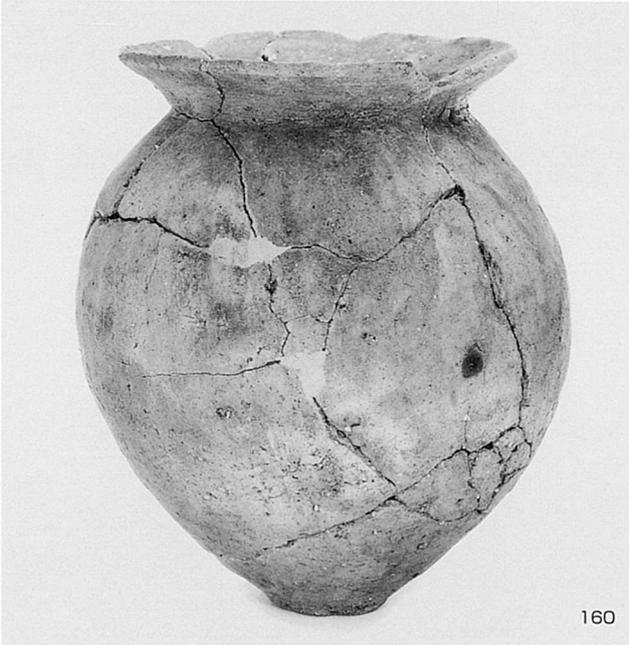
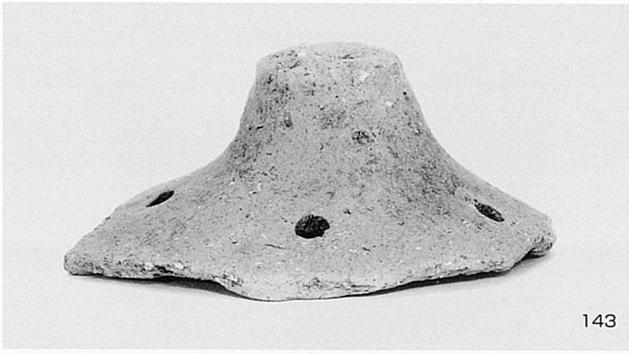


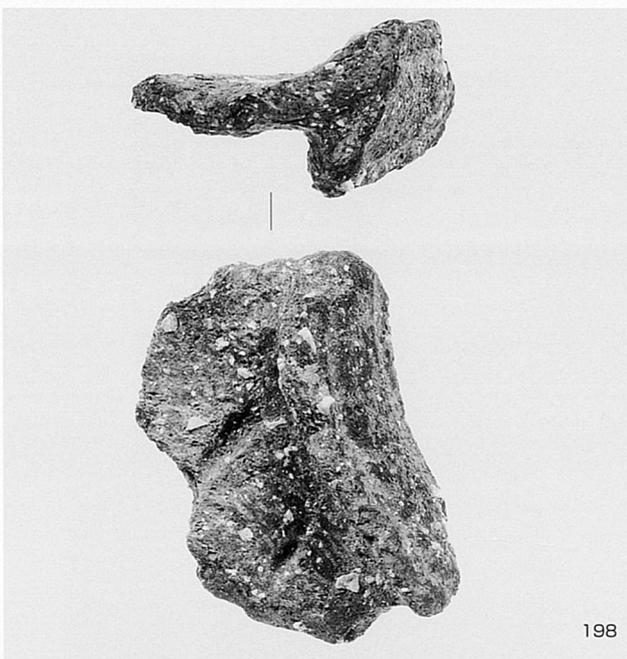




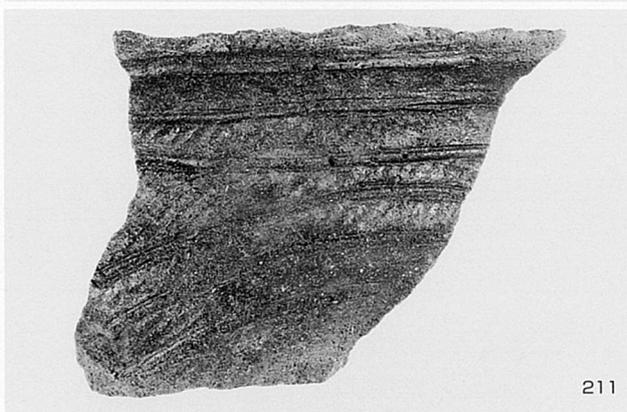








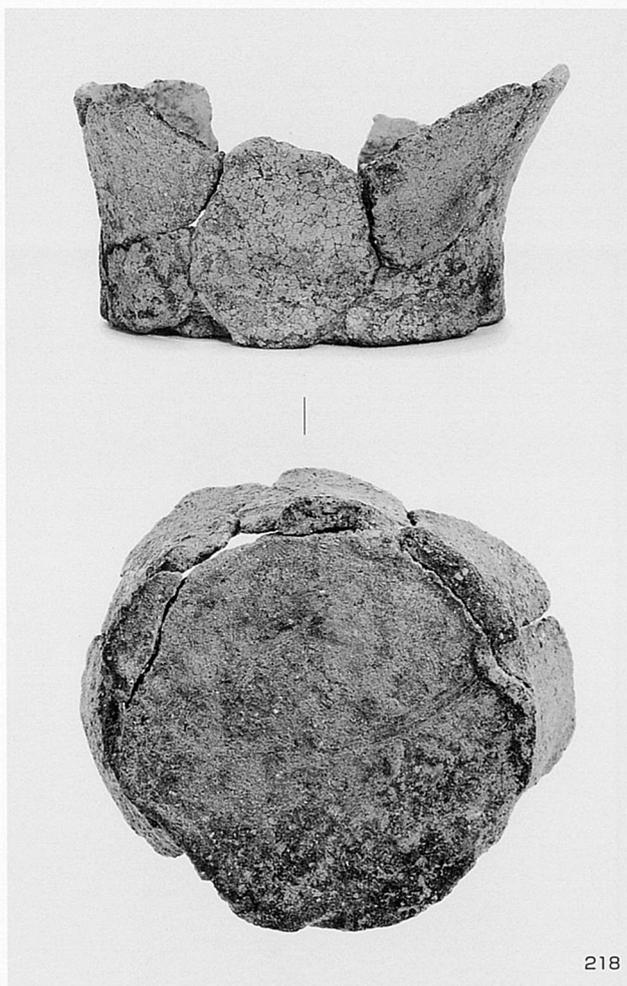
198



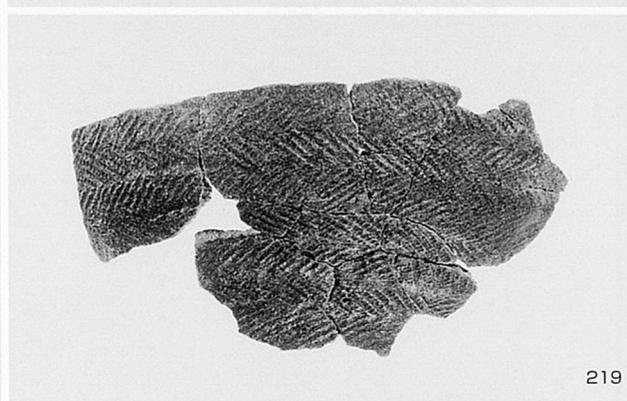
211



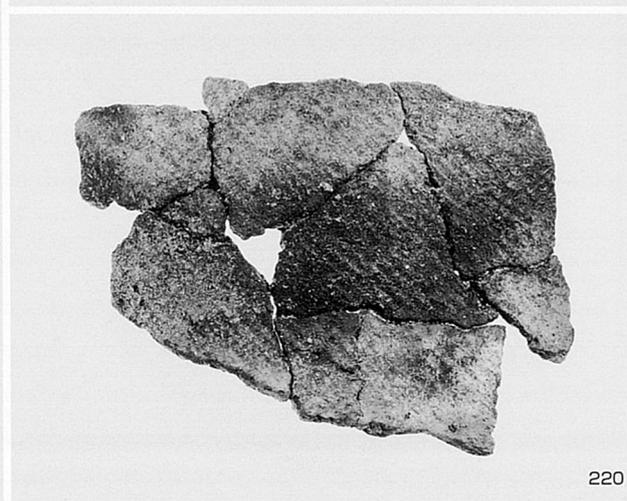
212



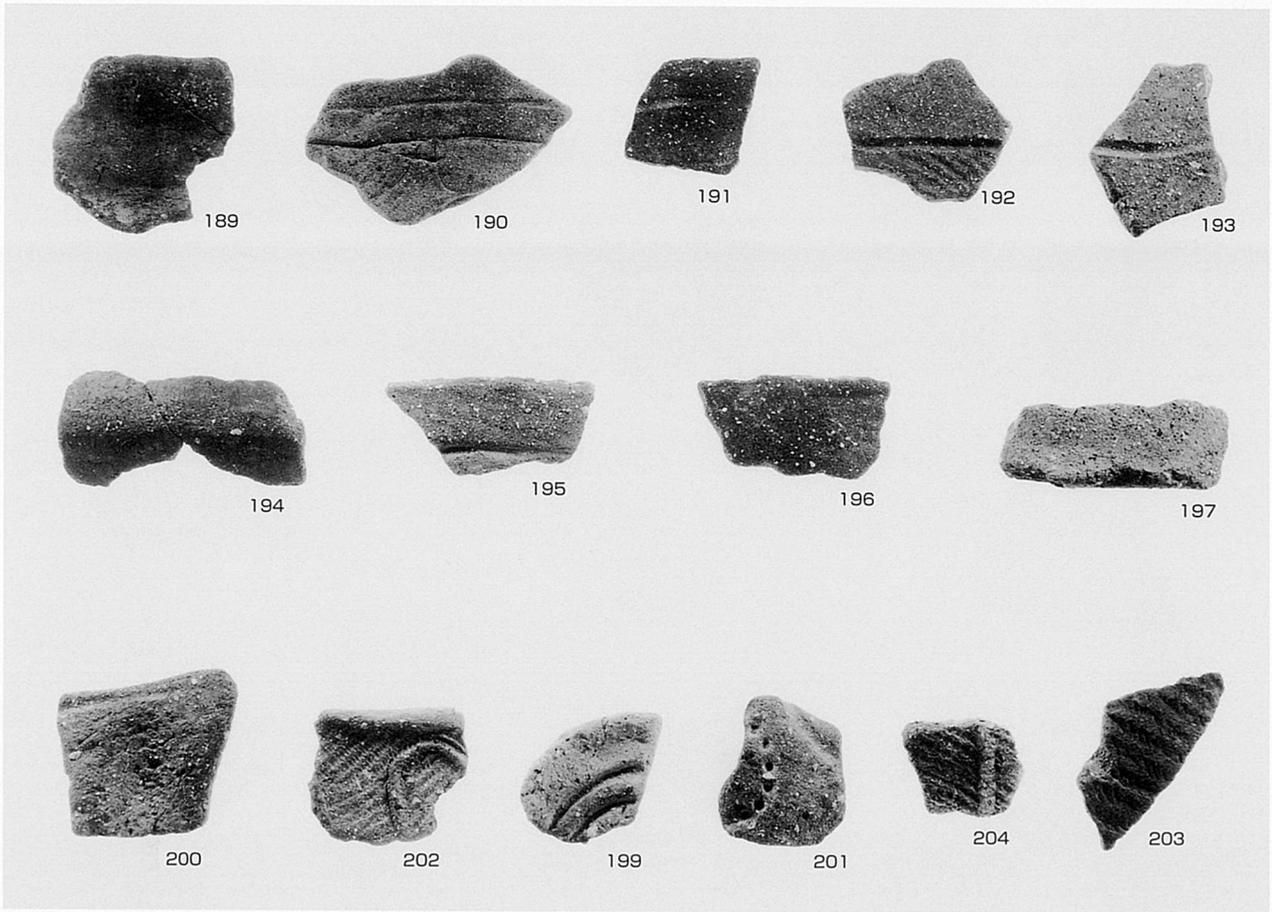
218



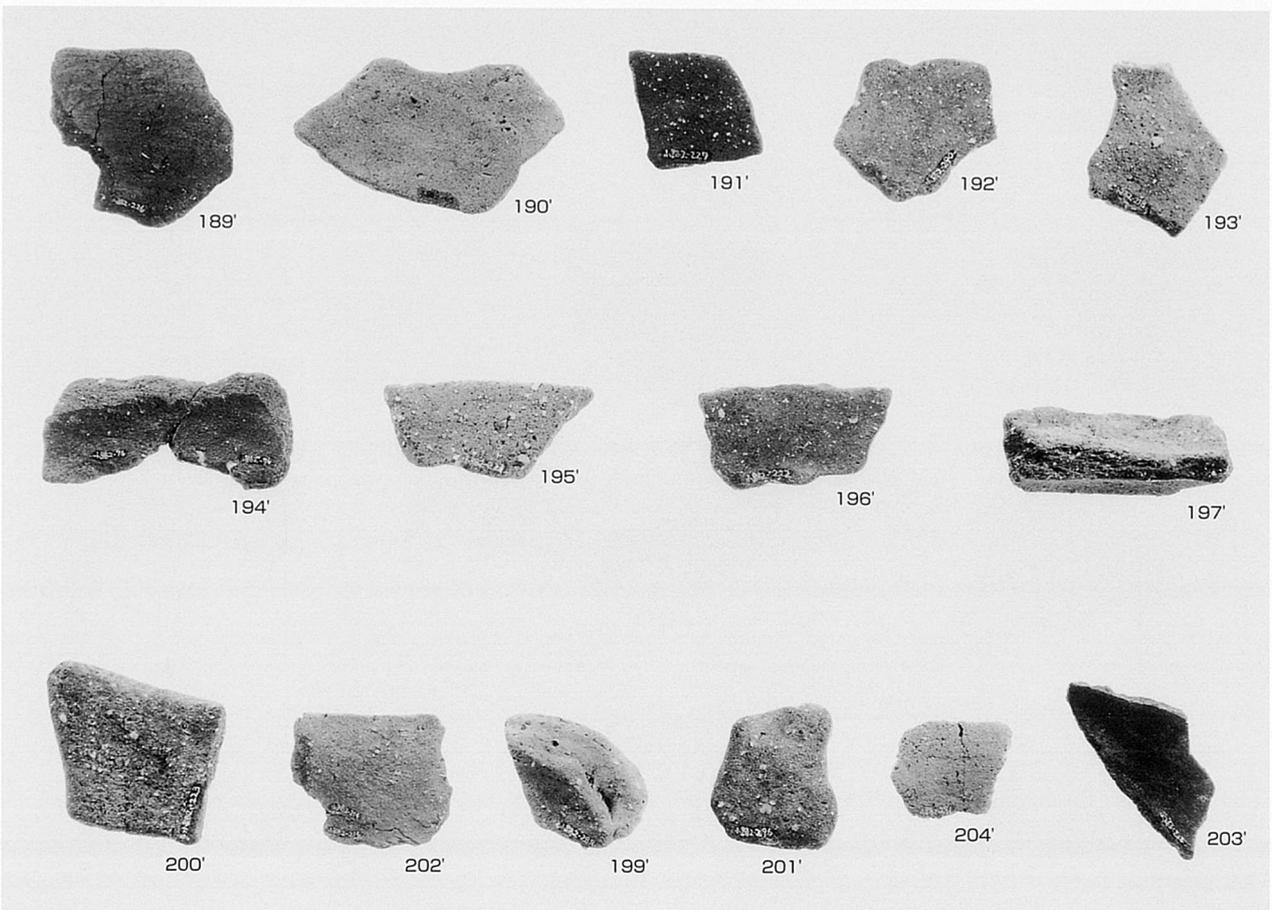
219



220

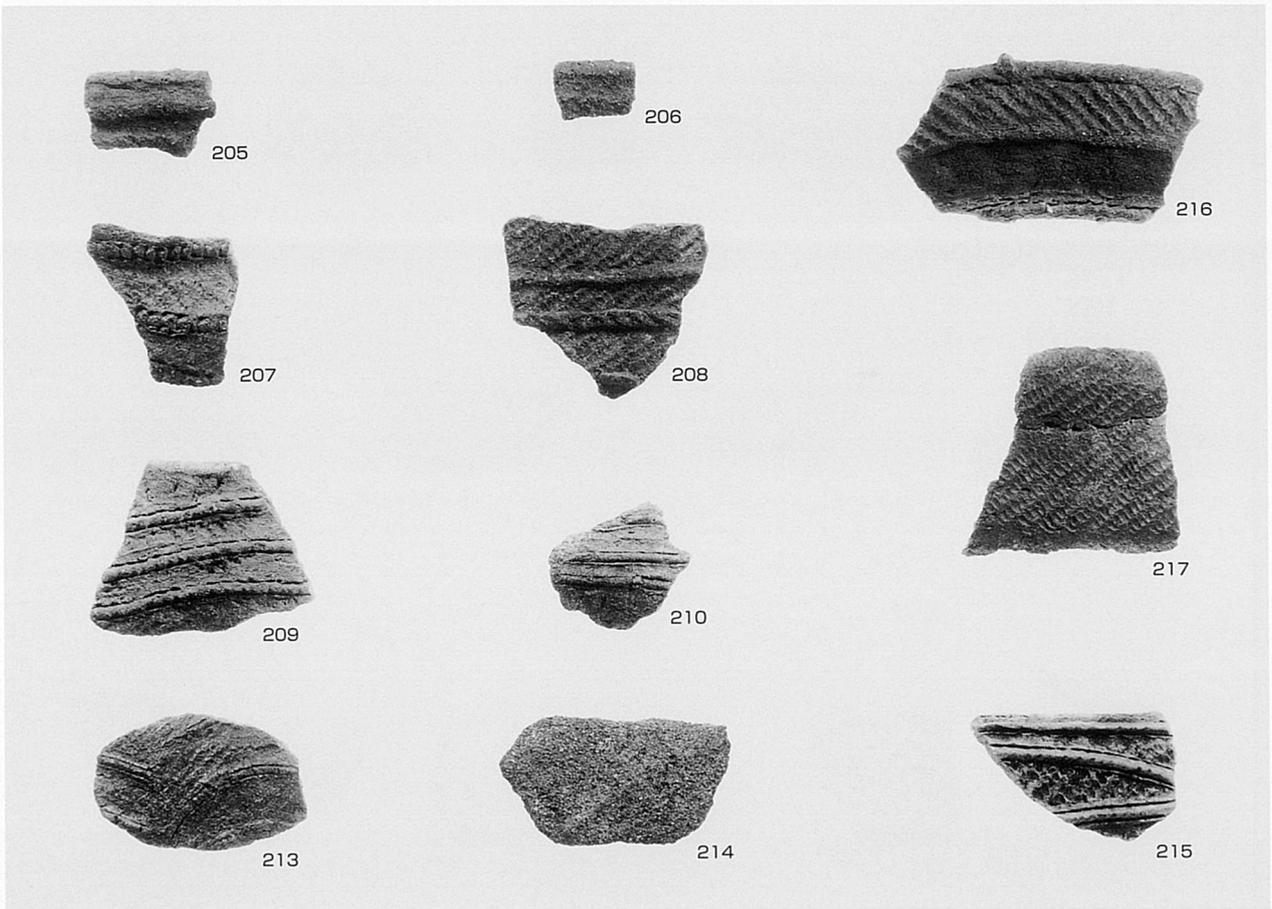


(表面)

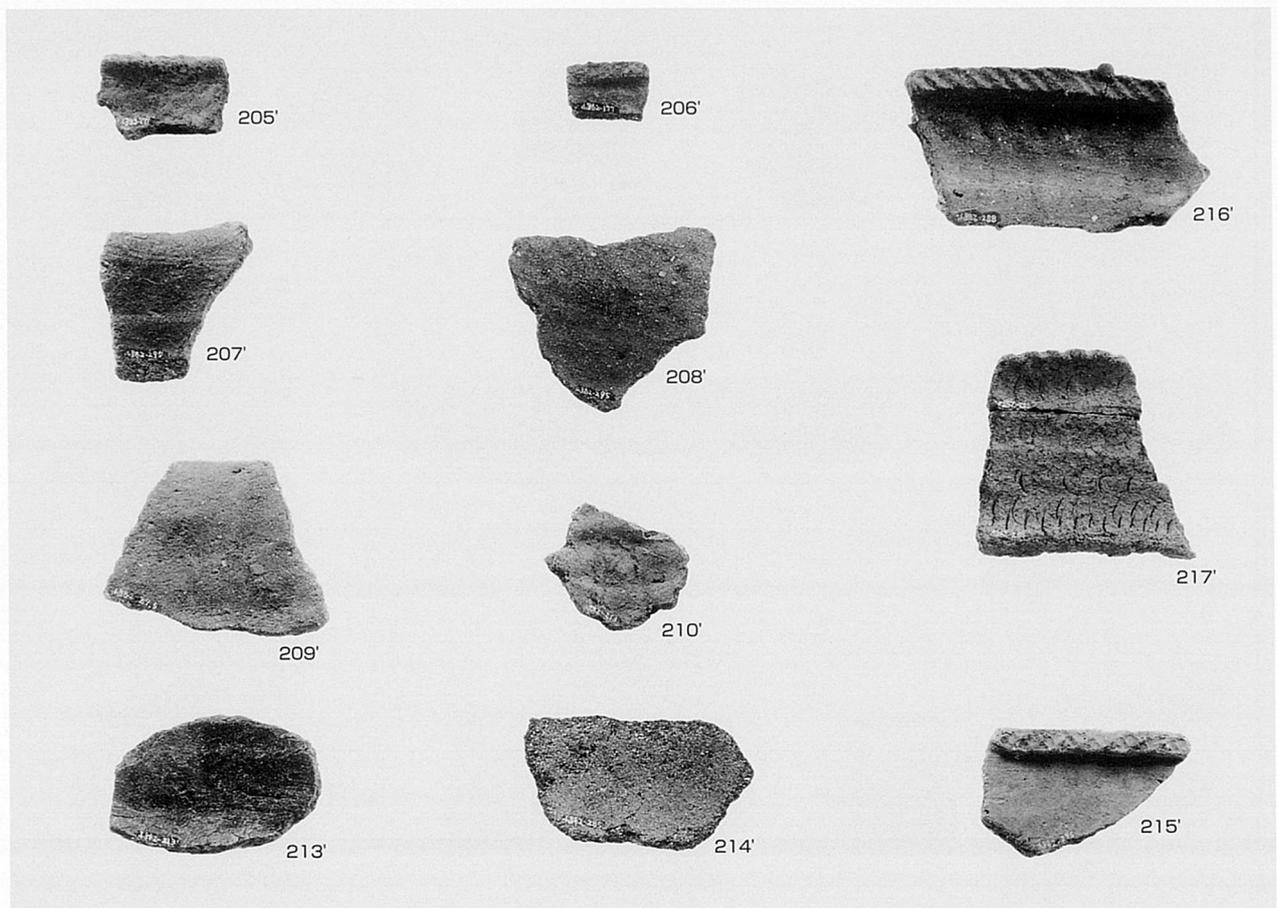


(裏面)

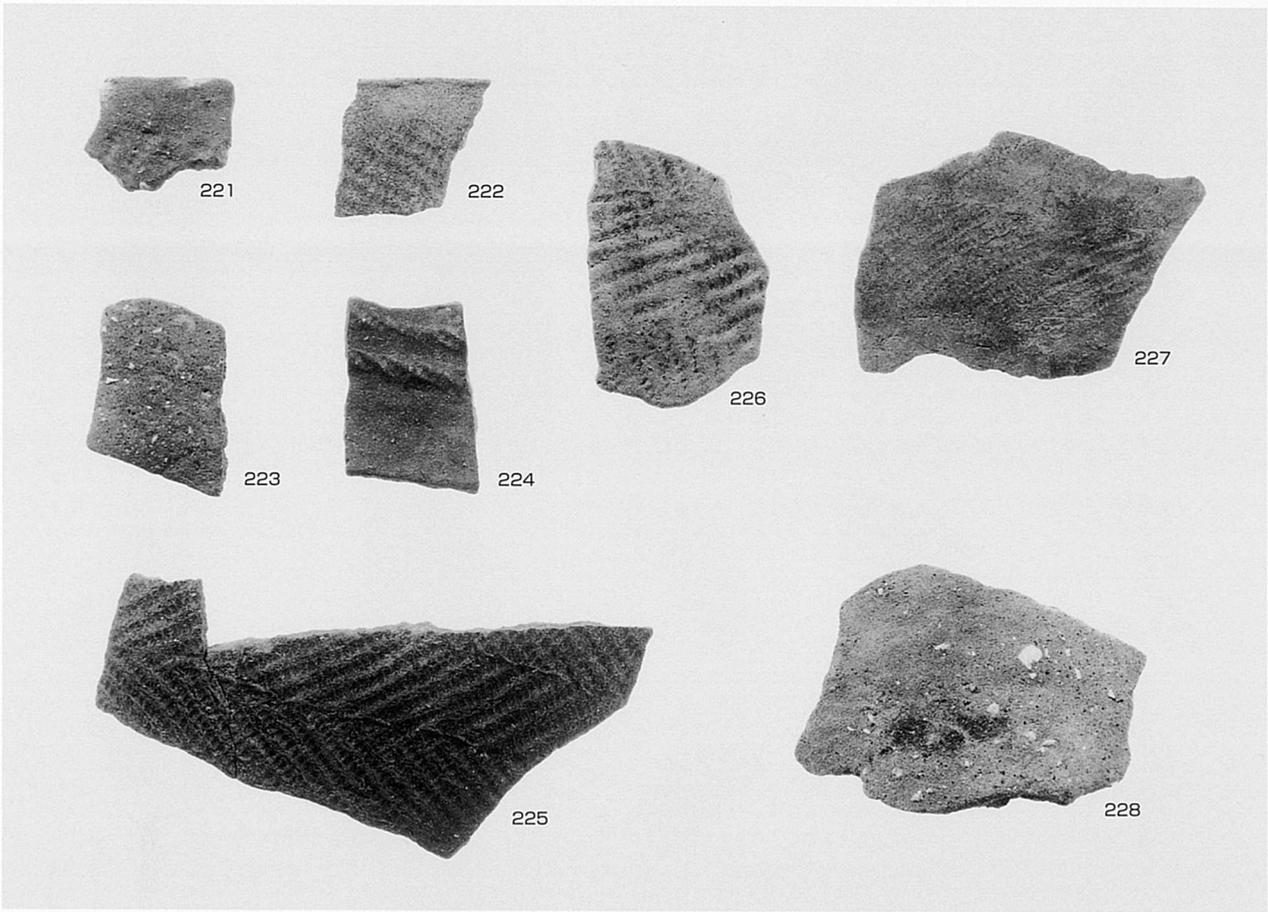
写真図版 18  
出土遺物



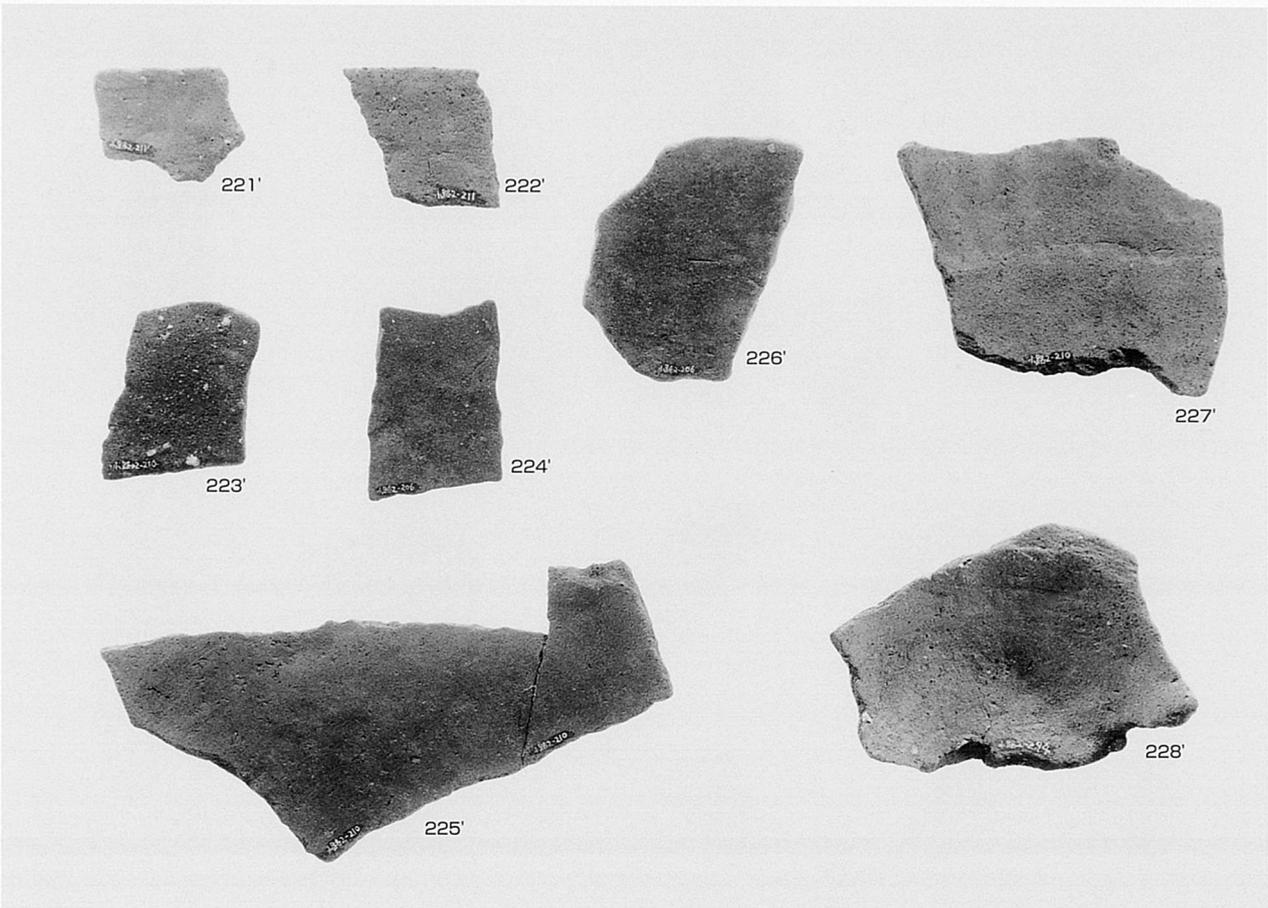
(表面)



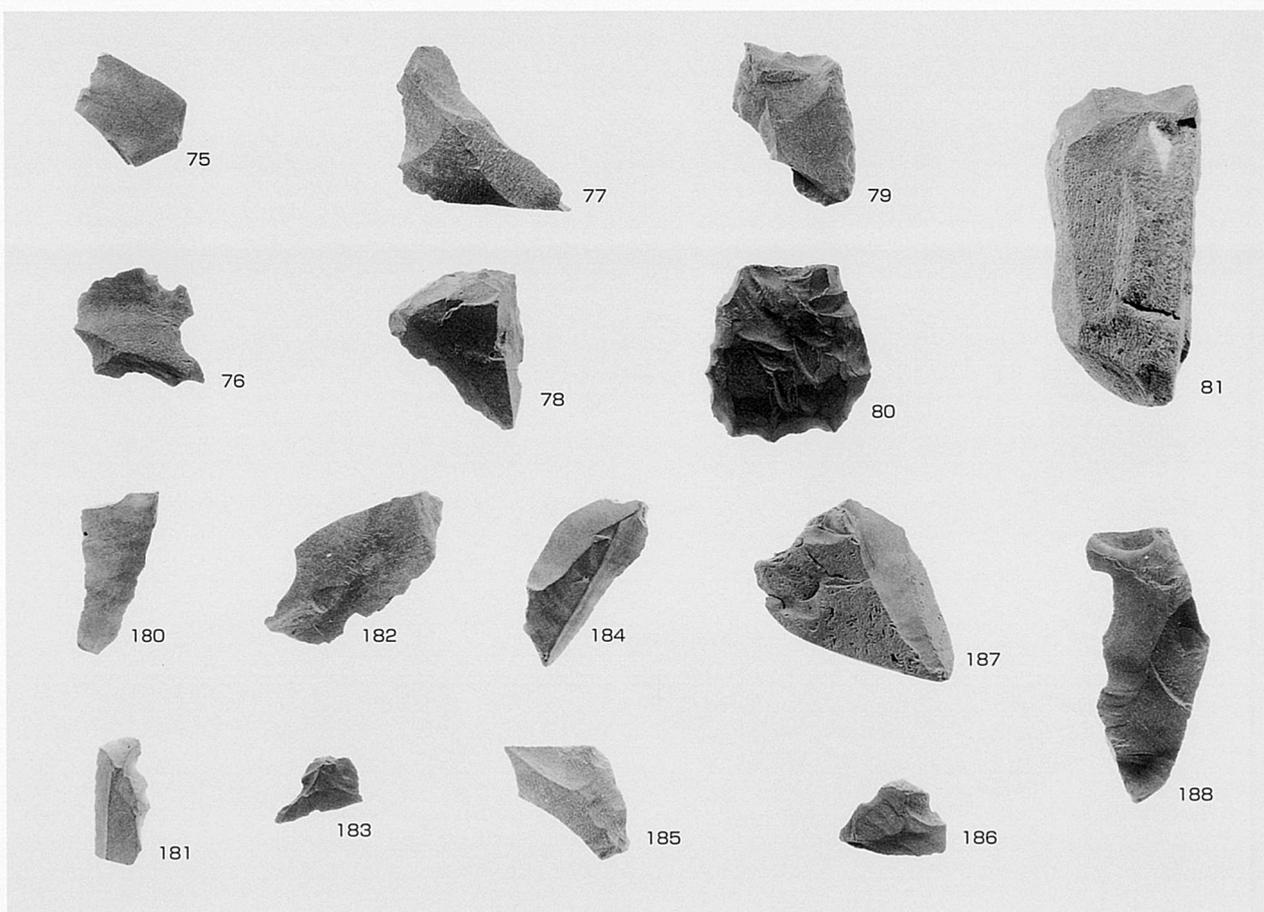
(裏面)



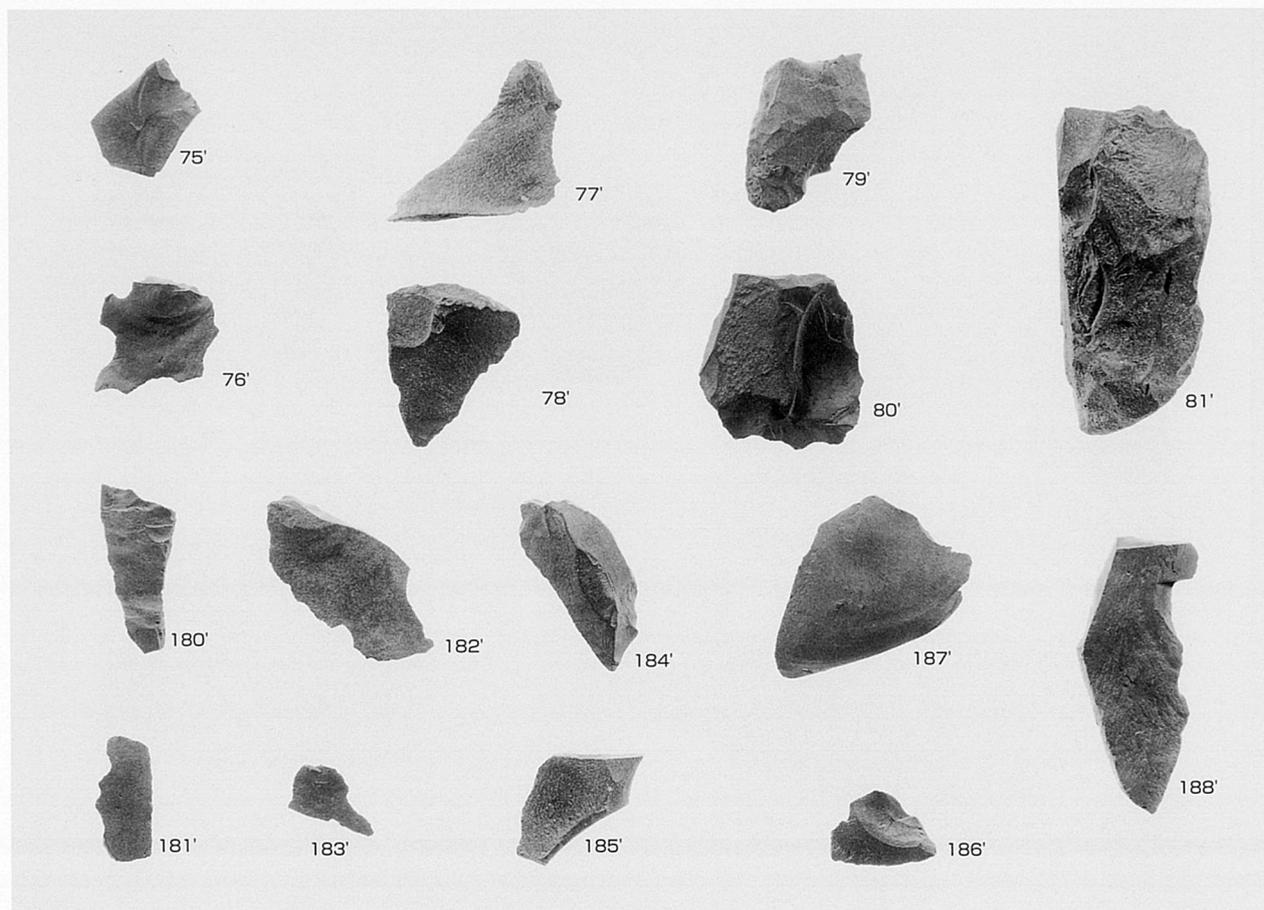
(表面)



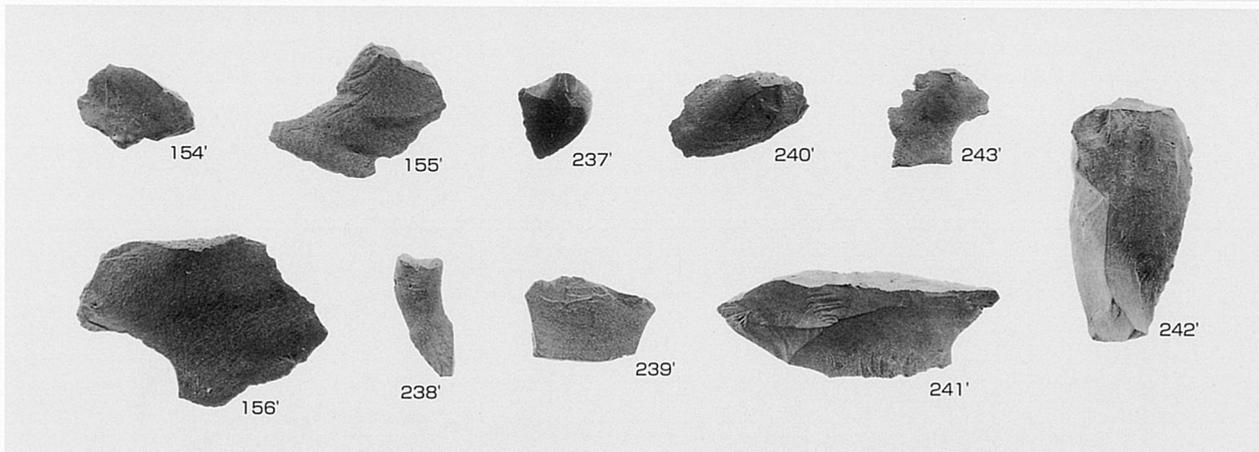
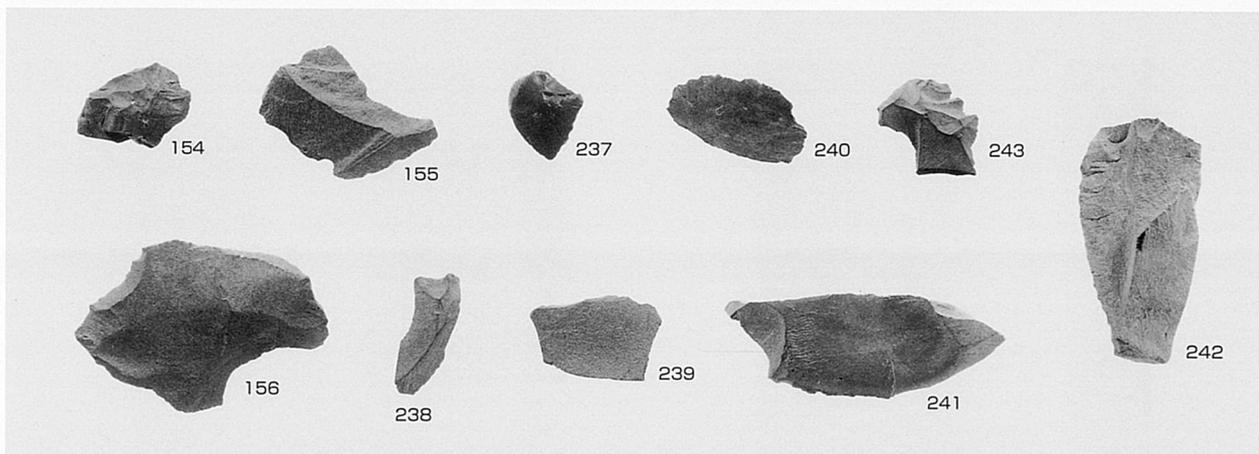
(裏面)



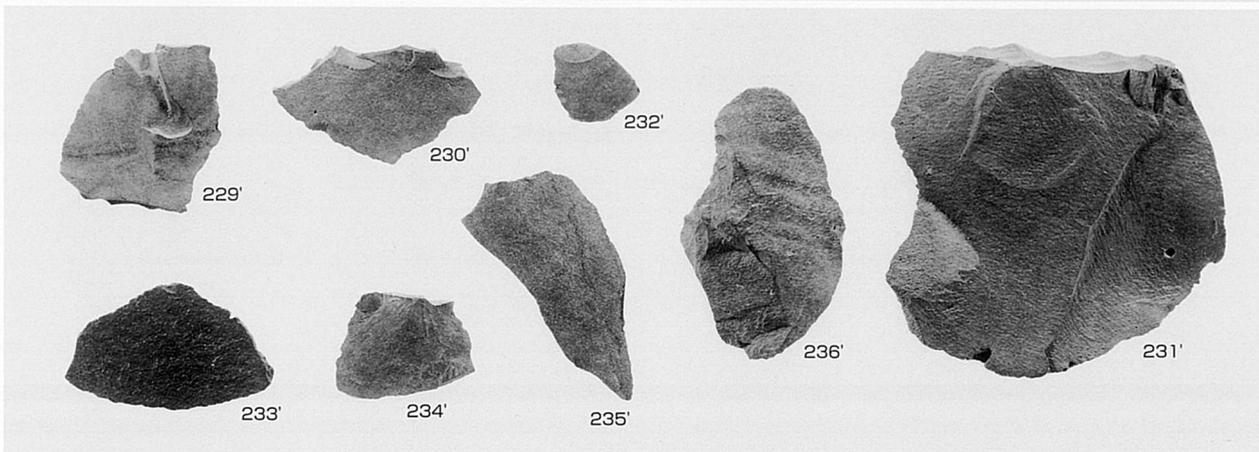
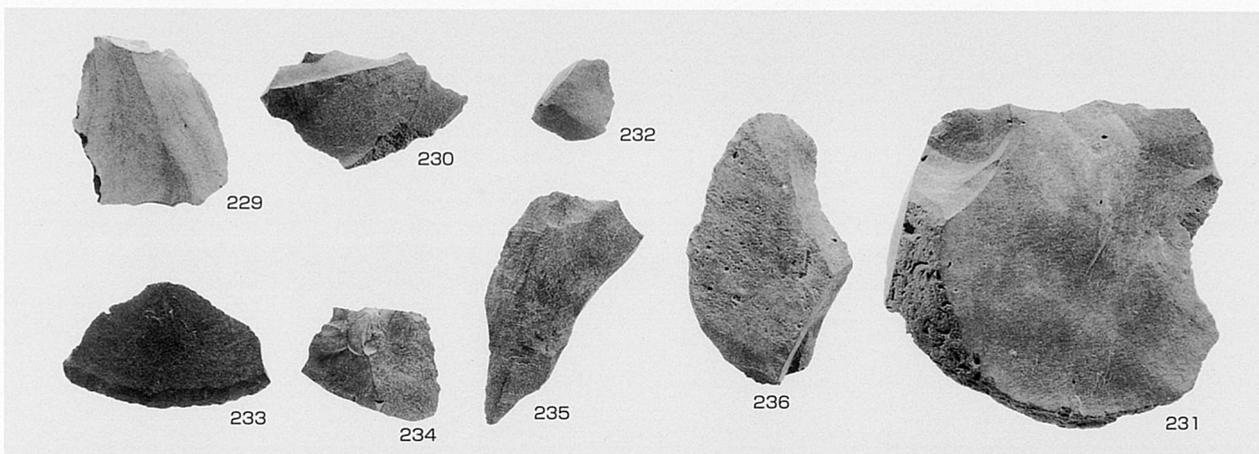
(表面)



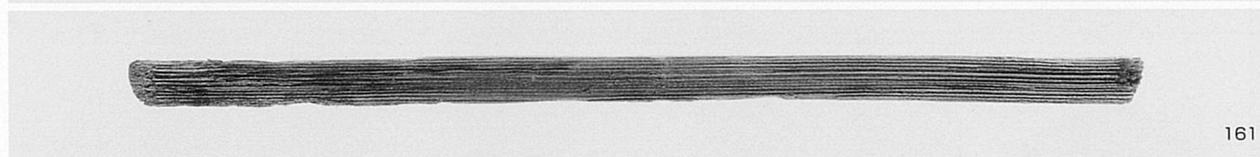
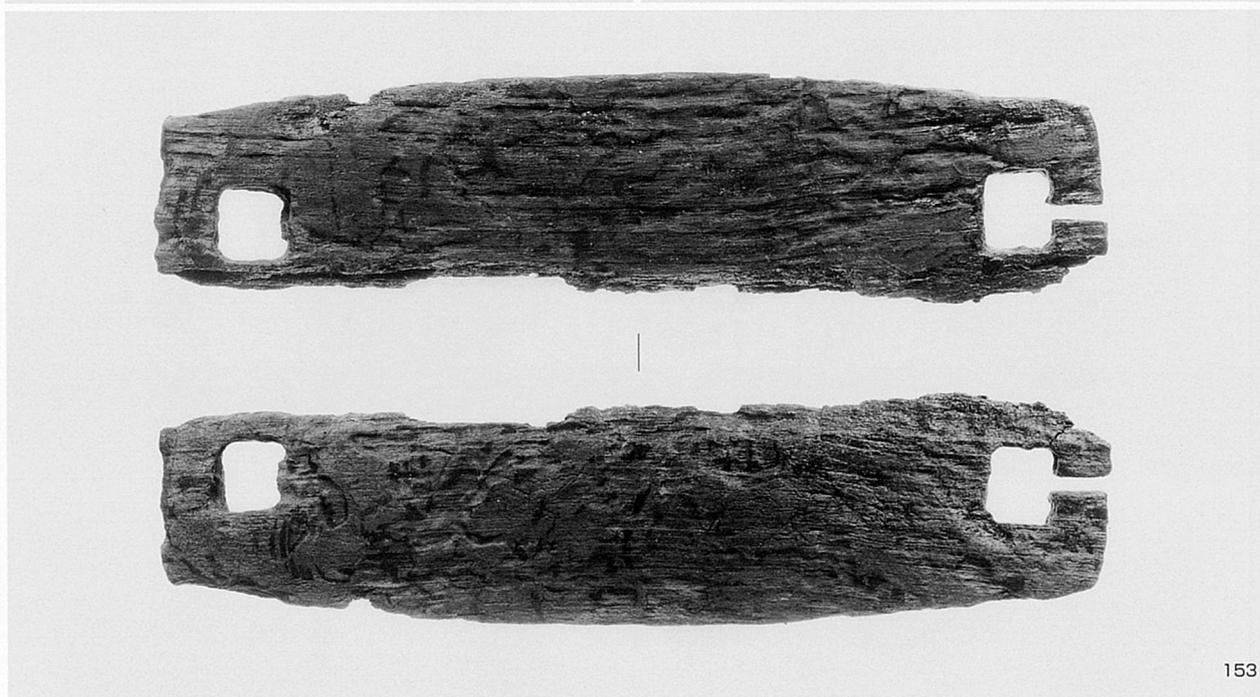
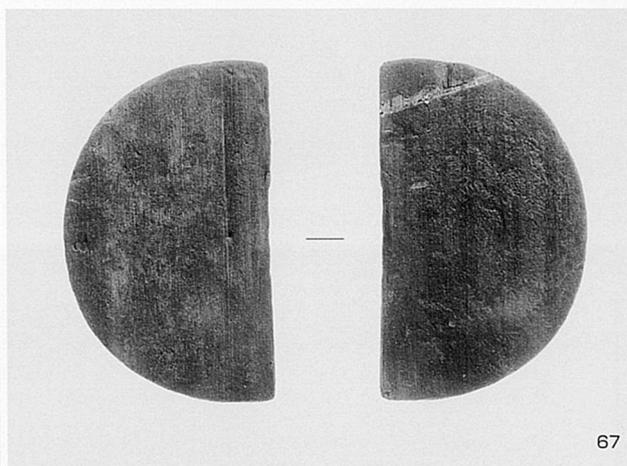
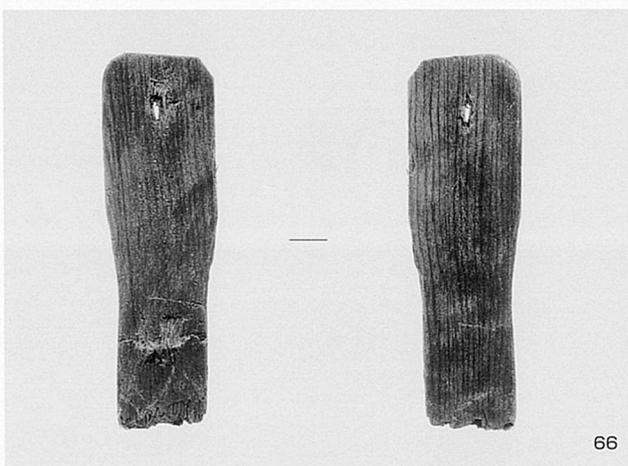
(裏面)



上段 (表面)・下段 (裏面)



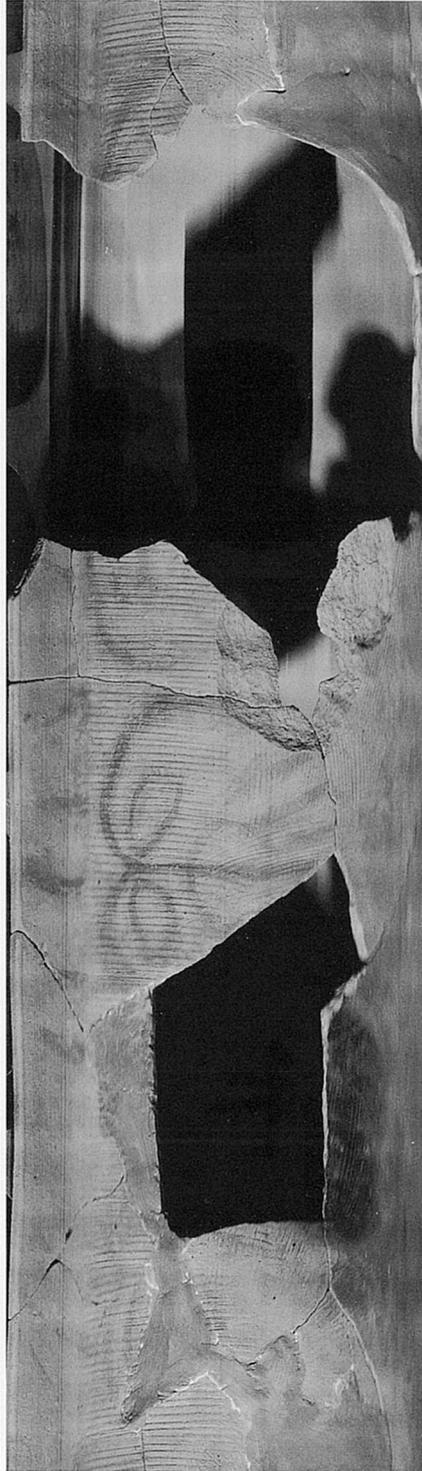
上段 (表面)・下段 (裏面)



写真図版23 出土遺物（人面墨書土器展開写真）



94



96



98

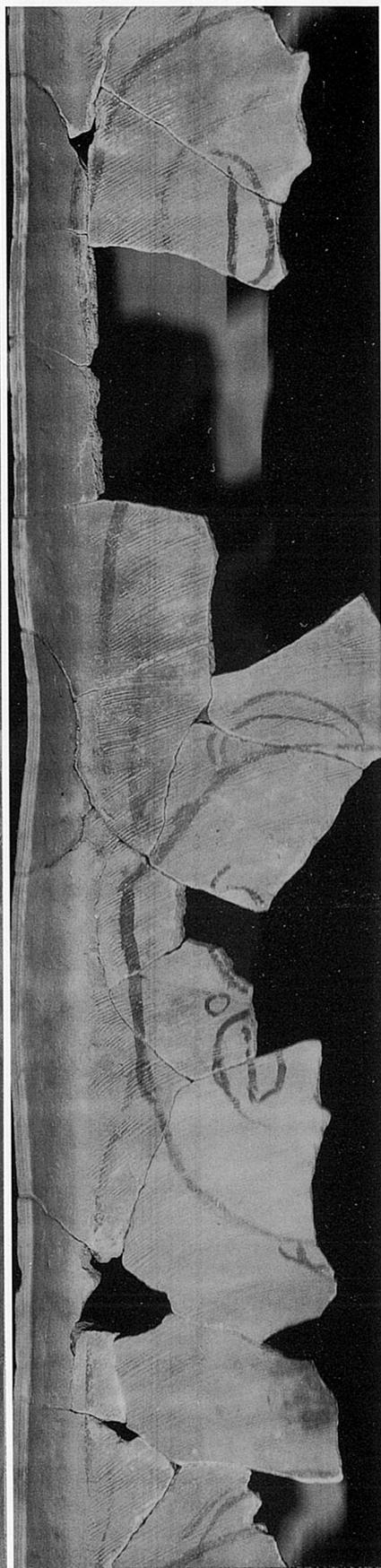
写真図版 24 出土遺物 (人面墨書土器展開写真)



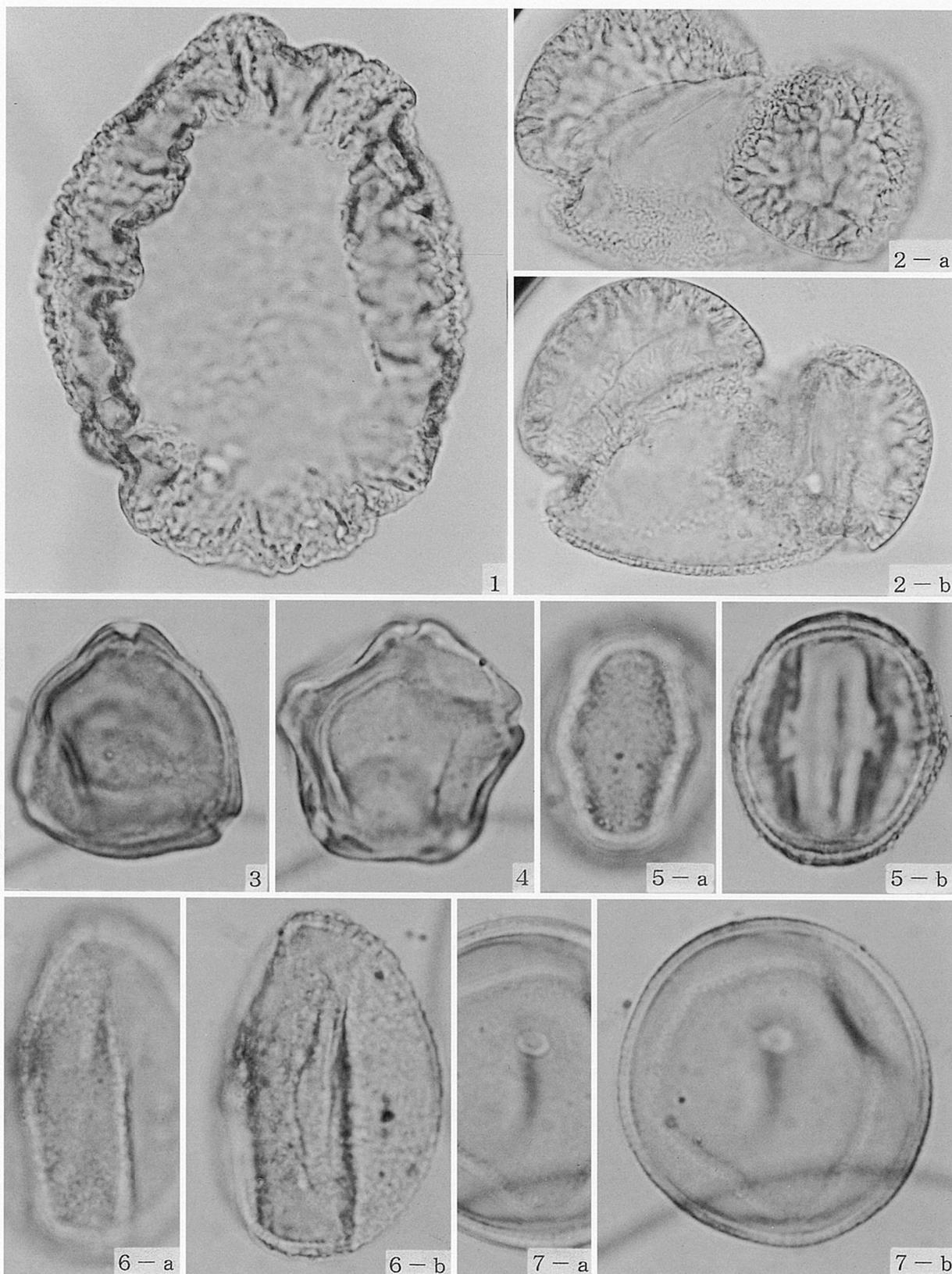
102



103

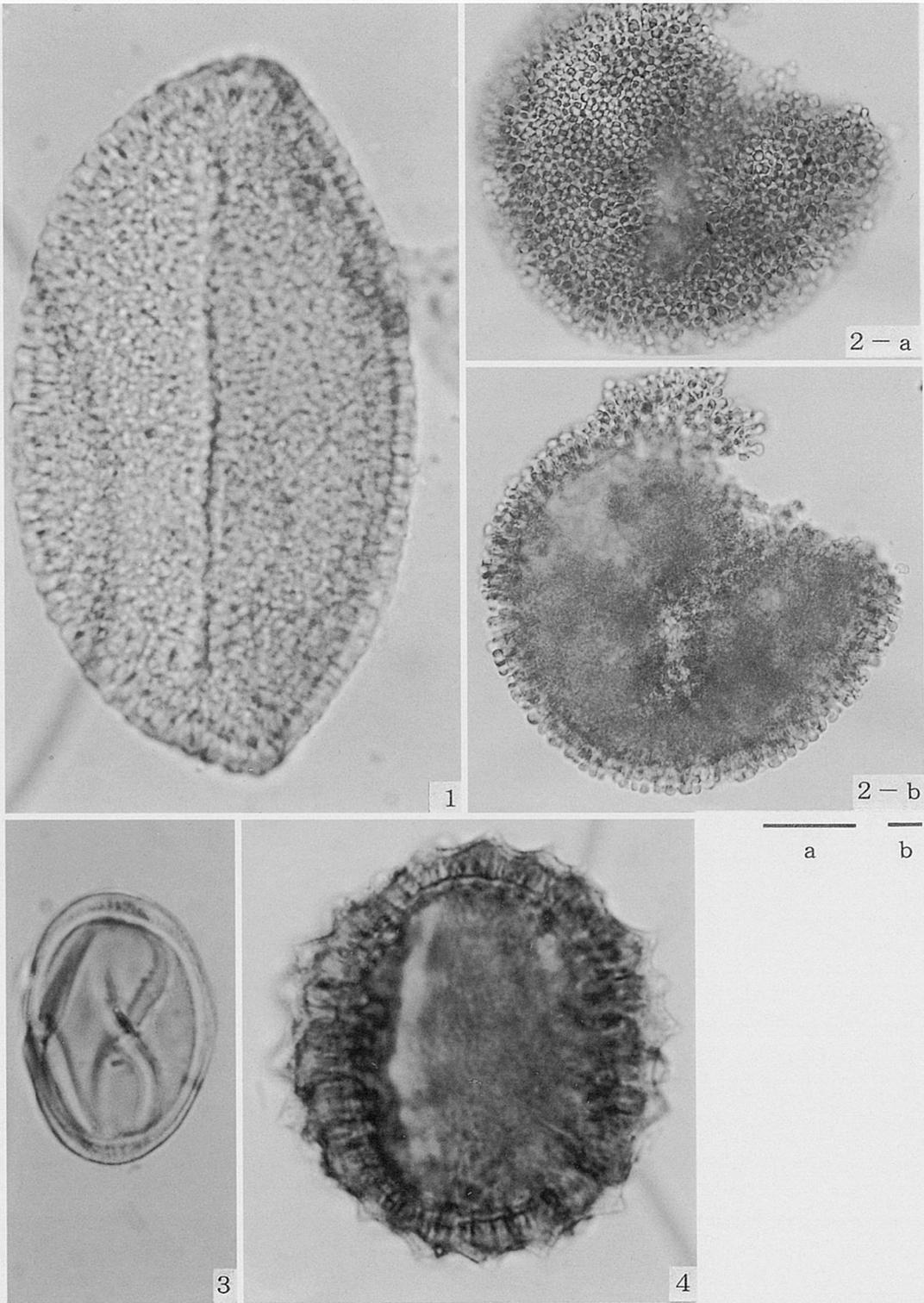


106



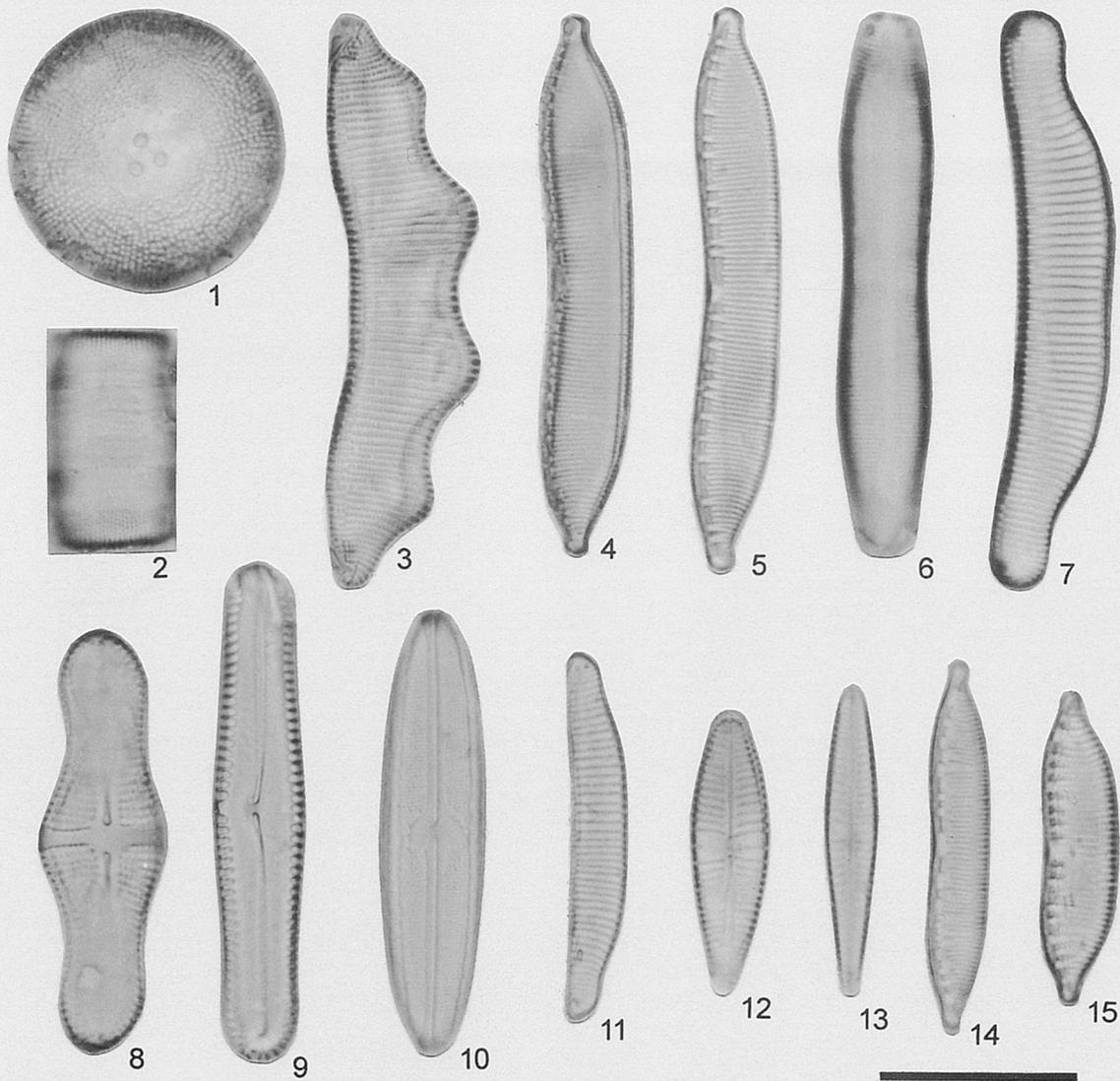
1. ツガ属、E-5、PAL.MN 1834  
 2. マツ属複雑管束亜属、N-3、PAL.MN 1829  
 3. ハシバミ属、E-5、PAL.MN 1833  
 4. ハンノキ属、E-5、PAL.MN 1835  
 5. コナラ属アカガシ属、N-3、PAL.MN 1837  
 6. コナラ属コナラ亜属、N-3、PAL.MN 1838  
 7. イネ科、N-3、PAL.MN 1830

産出した花粉化石 (scale bar:10 $\mu$ m a:1, 2 b:3~7)



1. ソバ属、N-3、PALMN 1839
2. フウロソウ属、E-5、PALMN 1832
3. キカシグサ属、N-3、PALMN 1831
4. 他のキク亜科、E-5、PALMN 1836

産出した花粉化石 (scale bar:10 $\mu$ m a:1, 3, 4 b:2)



- |  |  |
|--|--|
| 1. <i>Melosira roeseana</i> No.N-12                      | 2. <i>Melosira roeseana</i> No.S-4     |
| 3. <i>Eunotia</i> spp. No.N-12                           | 4. <i>Hantzschia amphioxys</i> No.S-4  |
| 5. <i>Hantzschia amphioxys</i> No.S-4                    | 6. <i>Hantzschia amphioxys</i> No.S-4  |
| 7. <i>Eunotia praerupta</i> No.S-4                       | 8. <i>Achnanthes inflata</i> No.N-12   |
| 9. <i>Pinnularia acrosphaeria</i> No.S-4                 | 10. <i>Neidium iridis</i> No.S-4       |
| 11. <i>Eunotia</i> spp. aff. <i>Eunotia pirla</i> No.S-4 | 12. <i>Gomphonema parvulum</i> No.S-4  |
| 13. <i>Gomphonema racile</i> No.S-4                      | 14. <i>Hantzschia amphioxys</i> No.S-4 |
| 15. <i>Hantzschia amphioxys</i> No.S-4                   |  |

# 報告書抄録

ふりがな	しょうじいせき
書名	小路遺跡(その2)
副書名	第二京阪道路(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第122集
編著者名	田中龍男・島田裕弘
編集機関	(財)大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3-21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3F
発行年月日	2004年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじいせき 小路遺跡	おおさかふねやがわし 大阪府寝屋川市	27215	28	34 度 44 分 58 秒	135 度 38 分 24 秒	2002/3/1～ 2003/2/28	1,710㎡	第二京阪道路 (大阪北道路) 建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
小路遺跡	自然流路	縄文時代		縄文土器・石器	下層確認トレンチ内の流 路内より、縄文時代前期 ～晩期の土器が出土
	自然流路	弥生時代末 ～古墳時代	溝・流路	弥生土器・庄内～布 留期の古式土師器・ 手焙形土器・木製品	溝内から木樋が出土
	祭祀関連跡	奈良時代後半 ～平安時代前半	溝・流路	須恵器・土師器・瓦・ 木製品	流路内から人面墨書土器 が出土
	生産域	中世	溝・土坑・ ピット・井戸	須恵器・土師器・瓦	井戸の底部より曲げ物が 出土

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第122集

## 小路遺跡(その2)

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・  
第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2004年12月28日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 三協印刷社  
大阪府大阪市西成区天下茶屋1-28-16